
ここからはじまる物語 【改訂版】

滝沢美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ここからはじまる物語 【改訂版】

【Nコード】

N2169V

【作者名】

滝沢美月

【あらすじ】

電車の中で本を読む譲子に声をかけたのは、隣の高校のカンナ。それまで話したこともなかった2人は電車の中で出会った。この出会いからはじまるものとは
／『ここからはじまる物語』の改訂版です。

第1話 出会は電車で

学校からの帰りの電車の中。

6月になり、日差しがでると暑いけど夕方はまだまだ涼しくて、電車の中は冷房がかかっているとその風が直接肌にあたると寒い。私は鞆の中から本を取り出すついでに白いカーディガンを取り出して羽織る。

たった17分しか乗らない電車だけど毎日乗る電車は退屈で、本を読んで時間を潰す。それが私の習慣になっていた。

いま読んでいる本は、最近ハマっているライトノベルで主人公の姫が憧れの王子様に会いに旅に出る話。昨日の帰りに寄った本屋で新刊が出ているのを見つけて買って、夕食後読み始めたら続きが気になって止まらなくて……夜中まで読んでもうページは半分も残っていない。朝も電車の中で読んでいたけど、ちょうどいいところで駅に着いちゃってすぐ続きが気になっている。

でも、昨日遅くまで起きていたせいで眠気が押し寄せてくる。小刻みに揺れる電車の揺れも気持良くて、本を読んでいるのに瞼が重くなってくる。

ドアの横のわずかな隙間に寄りかかり、取り出した本を読み始めたんだけど。

うとうと……

瞼が落ち、ふっと意識が飛んだ時

バサッ！

カーブで電車が大きく揺れ、手に持っていた本が落ちてしまった。本を落とした事以上に立ったまま寝てしまった事が恥ずかしくて、慌てて本を拾おうと、腰を折って電車の床に落ちた本を拾おうとしたんだけど

伸ばした手の向こうから私よりも大きい誰かの手がすつと出てきて本を拾って渡してくれた。

床を見下ろした視界から本が消え、そこに濃紺のズボンが見える。

「大丈夫？」

甘く耳に響く声に視線を上げると、そこには学ランの男の子が立っていて、私の落とした本を手に持っていて差し出す。

「ありがとう」

私は本を受け取りながら、視線を男の子の手元から首元に移す。そこに光る金色の校章はSの文字が彫られていて、うちの高校の隣にある私立里見高校の学生だと分かる。

ついでにちらりと胸元に視線を向けると、『1・2』と書かれたバッチが付けられている。

「どういたしました。あつ、このシリーズ面白いよね。俺も好き」

じいーと制服を見ていた私は、その声にはつと顔を上げる。本のタイトルを見て笑った男の子は短く切りそろえられた艶やかな黒髪、私よりほんの少しだけ背が高く、男の子にしては大きな瞳は澄み、通った鼻筋、形の良い唇　とても綺麗な男の子だった。

ふわりと笑った顔は人懐っこく、初めて話すというのに警戒心がなくなってしまう。

万人受けしそうな顔立ち　それが第一印象だった。

「あつ、ごめん。話すの初めてなのに、俺べらべら喋って……」

「えっ、そんなことないよ……」

男の子を観察していて黙っていたのを警戒していると勘違いしたのか、首を触りながら視線を落とした男の子に、私は慌てて返事をする。

じろじろと観察していたのがなんか後ろめたくて、私はぱっと男の子から視線をそらした。だから

「実は、さ……君の事、朝、いつも電車で見かけて話してみたいなっと思ってたんだ」

急にそんなことを言われてビックリしちゃった。

「えっ……？ 同じ電車……」

「うん、同じ電車の同じ車両」

男の子は満面の笑顔でそう言った。

「ぜんぜん気づかなかった……」

本当にぜんぜん気づいていなかったから、私はその言葉をぼつりと漏らす。

話しかけられて初対面だと思っていたもの。

「いつも真剣に本読んでるよね？」

そう言って、だから気づいてないと思ってたよ、と苦笑する男の子。

「本、好きだから。このシリーズも面白いのに、友達には子供っぽくって言われちゃって。この本好きな人がいて嬉しい」

私はもともと本が大好きで、通学の時もだいたい車内では本を読んでいる。彼がそのことを知っているとすることは、本当に朝、同じ電車に乗っているのだろう。

私なんか読書に夢中で、同じ電車にどんな人が乗っているかなんて気にしたことも、考えたこともなかったのに。

「俺、里見高1年の菊池きくち カンナ。よろしく」

そう言って手を差し出され、私は慌ててその手を握り返す。

「えっと、私は国府台南高校2年、桜庭さくらば 譲子ゆづこです」

軽く会釈する私の前で、男の子は目を大きく見開いて私を見下ろした。

「えっ、年上？ 同じ学年だと思ってた……」

うーん……

私はさつき胸元にある『1・2』のバッチを見て、菊池君が1年2組 つまり1年生だということは分かっていたけど、まさか同じ年に見られていたとは思わず苦笑する。

それから、菊池君の降りる海神駅かいじんに着くまでの数分、簡単にお互いの自己紹介をして別れた。

次の日。

朝ごはんも食べ終わって、学校に行く準備も完璧で、私はダイニ

ングチェアに座ってぼーとテレビを眺める。

「ごめんね、お母さん寝坊しちゃって。お弁当ももう少しでできるから、まだ時間は大丈夫かしら？」

後ろのキッチンから顔を覗かせたお母さんがフライパンと菜箸を持って申し訳なさそうに言う。私は振り返って、

「大丈夫だよ、いつも早めに出てるだけだから。1本遅い電車でもぜんぜん間に合うし」

そう言って、またテレビに視線を向ける。

いつも乗っている電車だと、始業のほしい1時間前には着く。そんなに早く行って何か用事がある訳じゃないんだけど、ギリギリの時間の混んでいる電車が嫌いで、空いている時間帯に行っているだけだから特に焦ったりせず、私はのんびりとお弁当の出来上がるのを待った。

「はい、お待たせ！」

お母さんが台所からパタパタとスリッパの音を響かせてやってきて、お弁当を渡してくれた。私は受け取ったお弁当をソファに置いていた鞆にしまい、玄関に向かう。

「ありがとう。行ってきまーす」

玄関を出て腕時計を見ると、5分だけいつもより家を出るのが遅い。5分なら、急げばいつもの電車に間に合うだろう。

家を出て、自転車をとばして漕ぐ。駅前の大通りを、駅に向かう

て歩く人や自転車を勢いよく追い越してあっという間に駅に着き、駅前の駐輪場に自転車を止め、改札へと急ぐ。

改札を通るとちょうど電車到着のアナウンスが聞こえ、慌てて階段を駆け上がり階段から一番近い真ん中より後ろ寄りの車両に駆けこんだ。

ギリギリセーフ。

息を切らしながら車内を見渡すと空いている席はなくて、いつも乗っている1番前の車両に向かつて歩きだす。

毎朝乗っている車両は、進行方向1番前の車両。学校のある国府台駅（国府台）の改札に一番近くて、しかもわりと空いて座れるのである。

電車の時間より早めに駅に着いてホームの1番前まで歩いて電車を待つ。それで電車の中で座って本を読むのがいつものこと。

動きだした車内を人にぶつからないように慎重に歩きながら車両を移動して、2駅過ぎてやっと1番前の車両に着く。

空いている席があったら座って本を読みたいなと思ったけど、私が乗った大神宮下駅（大神宮下）の次の船橋駅（船橋）では人がたくさん乗ってくる。だからほとんどの席が埋まって、それでもどこか空いていないかと座席の方を見た時、ドアの前に立っている菊池君と目があう。

「おはよ」

菊池君が満面の笑みで挨拶してくる。

「おはよう」

席はどこも空いていないようなので菊池君の傍まで行って挨拶すると、菊池君がほっと息をついた。

「よかったー。昨日、俺が話しかけたのが嫌で、時間ずらされたのかと思った」

首を触りながら苦笑する菊池君の頬は僅かに赤く染まっている。

「まさか、そんな。今日はちよつと家を出るのが遅くなって、改札から一番近い車両に飛び乗っただけだよ」

そう言った私に。

「そっか、よかった」

腰を折って上目づかいに私を覗きこんでくる菊池君は、その後も何度もよかった　って言うてて、その様子が可愛くて笑ってしまった。

「国府台駅はこの車両が改札近くていいよね。国府台南高も国府台で降りるでしょ？」

「うん」

「この車両、空いてるしいいよね」

私の通っている国府台南高校と菊池君の通ってる里見高校は、同じ国府台駅から徒歩数分のところにあつて、道路を挟んで隣の敷地に建っている。国府台南高校はそこそのレベルの公立。里見高校はレベルの高い私立。隣同士の高校でもほとんど交流がなくて里見高生のことを意識したことはぜんぜんない。

そういえば駅から学校までの道のり、国府台南高生も里見高生も同じ道を登下校しているけど、いつも始業より少し早めの時間に行っている私は、朝の通学路ではあんまり学生を見かけない。

「あのさ、昨日会ったばかりだけど。もしよかったら、朝一緒に登

校してもいいかな？」

そんなことをぼんやり考えていたから、菊池君のいきなりの提案にびっくりして素っ頓狂な声を上げてしまっ。

「う、えっ!？」

あまりに酷い声に、周りにいた人がちらちらとこっちを見て、また視線を戻していく。

「ダメかな？」

小首を傾げて、覗きこんでくる菊池君の瞳は 心なしか、潤んでいる。

『だれか拾ってください』って書いてある段ボールに入った子犬のような瞳で見られたら 嫌だなんて言えるはずがないじゃないっ！

9

「うっん、いいよ。一緒に行こ……」

それに、同じ車両に乗ってて知り合いなのに一緒に行かない方が変だよね？

この時はそんな風に考えていて、成り行きで一緒に登校することになった

第1話 出会は電車で（後書き）

この作品は、以前連載した『ここからはじまる物語』の改訂版です。本文を加筆訂正し、話の流れはほぼ同じですが、後半を変更する予定です。

新しい作品として読んで頂けたら嬉しいです。

改稿は誤字脱字の訂正の範囲です。

第2話 気になる存在

「譲！ ついに彼氏ができたのね〜！」

教室の自分の席で英語の小テストの勉強をしていた私のところに
けてきた親友の沙世ちゃんの第一声がそれだった。

「なんのこと？」

私は心当たりがなくて、英単語帳に視線を向けたまま素っ気なく
聞き返す。

「もう、とぼけちゃって！ 見たんだから〜、里見高の彼氏と一緒
に登校してる、と・こ・ろ！」

その言葉で、沙世ちゃんの言う“彼氏”が誰のことを指している
のか分かった私は、手に持っていたシャーペンを机に置いて顔を
上げる。

「ああ、それ、彼氏じゃないよ。友達」

苦笑して言う。

あれ……友達でいいんだよね？

昨日知り合ったばかりだけど、友達でしょ……？

心の中で自分に問いかけながら、沙世ちゃんの方を向く。

「えー、だってすごい仲良さそうだったよ？」

「ほんとに、ただの友達なの」

そう言っても納得してくれない沙世ちゃんに、私は仕方なく、昨日と今朝の出来事の一部始終を話した。

「えー、電車で話しかけられた？ 毎朝同じ電車って、それって譲りがあるから見てたんじゃないの？」

「そーかな」

そんなことないと思うけど……

私は苦笑する。

沙世ちゃんは何んでも恋愛方面に話を持って行きたがるから、困ってしまうな。

みなみ南 沙世ちゃんは、高校1年から同じクラスで私の親友。肩までのウェーブヘアは明るい茶色に染めてて、おしゃれ大好き、恋バナ大好きな乙女チックな子。噂話に目がなくて、いろんな情報を知っているけど、他人事に深入りして騒ぎにしてしまうことが多々あって……それがたまにキズなんだよね。

「菊池君は、誰とでもすぐにお友達になれちゃう子なんだよ、それだけ」

私は顔の前で手を横に振って、前の席に座った沙世ちゃんを見る。

「ホントにいい？」

疑うように覗きこんで来る沙世ちゃんをじいっと見つめて頷く。

「ホントだって。とくに連絡先だって聞いてないし、ただの友達」

そう言って私は一瞬、視線だけで斜め後ろの席に座ってる御堂君をちらっと見る。もちろん彼は友達と話しててこちらを見たりはしない。

私はすぐにまた沙世ちゃんと話し始める。

「それよりさ、今日のリーダーの……」

だから、御堂君が私を見たことや2人の会話が聞こえていたとは思いもしなかった

なんか、今日は疲れたなあ。

駅に向かう学校の帰り道の坂を一人で歩いていた私は大きなため息を漏らして、肩にかけた鞆をかけ直す。

結局あの後も、話をそらしたと気付いた沙世ちゃんの質問攻めにあって、菊池君のことを根ほり葉ほり聞かれた。そんなに聞かれても、昨日知り合ったばかりなんだからほとんど知っていることもなくて、最終的にはただの友達だって渋々納得してくれたみたいだけど。

でも、沙世ちゃんと話してて疑問に思った。

菊池君と私は どんな関係？

もちろん、彼氏彼女ってのは違うし。

友達って言ったけど、昨日会ったばかりなのに“友達”でいいのかな？

それとも単なる知り合いレベル？

顔見知り？

考えているとどんどん分からなくなってくる。

もし、私が菊池君の立場だったとして、毎朝同じ電車に乗っている菊池君に気付いたとして、話しかけるかしら

私だったら、話しかける話しかけないの前にその存在自体にまず気づかないだろうけど、もし気づいていたら 話しかける？

うーん……そうとう興味があつたら話しかけるかな。でも、ぜんぜん知らない人に話しかけるのは勇気があるなあ。話しかけるなんてやっぱ無理かも。

そう考えると。

菊池君は勇気があるなあ。それだけ私に興味があるってこと……それともただ単に人懐っこくて誰とでもすぐに仲良くしちゃうだけなのかな？

『それって譲に気があるから見てたんじゃないの』

ふいに沙世ちゃんの言葉が頭をよぎる。

私はそれを否定するように頭を思いっきり左右に振って、周りを歩いていた人が何事かと驚いたようにこっちを見ている。

まっさか、ねえ……そんなわけないよ。自意識過剰もはなはだしいでしょ。

私は身長162cm、女子では平均より高いとは思っけど。

顔は女友達からはかわいって言われるけど、セミロングストレートの黒髪、いちお二重で、だけど特別かわいいわけではないと思う。今まで告白されたことも誰かと付き合ったこともないし。

そんな私に、興味を持つだろうか？

放課後、図書館に試験勉強をしようと思っただけど、そんなことが頭の中をぐるぐる回っただけでぜんぜん集中できなくて、勉強も早々に切り上げて駅に向かっていた。

「讓子さん！」

突然、腕を掴まれて後ろに引かれ、振り返ってみるとそこには菊池君がいて、私は国府台駅の階段を登りきったホームに立っていた。

「わっ、びつくり……」

考え事して歩いていたから、気が付いたらいつのまにか駅のホームに着いていた。

「讓子さん、ずっと呼んでたのに気づかないで行っちゃうから、気になって」

はあー、はあーと息をつく菊池君が言うには

駅前のコンビニで友達と喋っていた菊池君の前を、私はぼーっと通り過ぎて、呼んでも気付かない私の後を走って追ってきたらしい。

「ごめん、ちょっと考え事したら駅まで着いちゃった」

「あはは、なにそれ。悩み事？」

無邪気な笑顔で、また小首をかしげて覗きこんでくる菊池君。

癖なのかな？

菊池君の笑顔に見入っていると。

「おい、カンナ。急に走ってって、どーした？」

菊池君の友達らしき男の子が3人、階段を登ってホームにやってきた。

「んー、ちょっと知ってる子がいて追いかけてちゃった」

振り向いて友達と話し始めた菊池君を見て、私はその場を離れようとしたんだけど。
ぐいっ。

また腕を掴まれて菊池君の方へ引つ張られて、バランスを崩した私はよろけて菊池君の腕の中に抱きとめられる。

「どこ行くの？ もう電車来るし、一緒に帰ろう、ねっ？」

至近距離でうっとりするような笑顔でそう言われたら……一緒に帰るしか、ない、よね？

電車の中。

「菊池君は部活帰り？」

私と菊池君は、菊池君の友達から少し離れた扉の前に2人で立つ。

「うん、何部だと思っ？」

じーっと菊池君を観察した私は、菊池君が学生鞆の他にピーナッツ型の大きな鞆を肩から提げている事に気づく。

「テニス部？」

「あつたり〜！ なんで分かったの？ って、分かるか」

肩越しに自分の鞆に気づいて笑う菊池君。

「カバン、テニスラケットのでしょ？」

「うん。譲子さんは？何か部活やってるの？」

「私は水泳部だよ」

「えっ、水泳？まだプール冷たくない!？」

ふふっ。

本気で驚いている菊池君がおかしくつて、私は自然と笑みがこぼれて口元を押さえる。

「今はまだ学校のプールは水温が低いから入ってないよ」

「あれ？じゃ、今日は部活帰りで遅いんじゃないの？」

小首を傾げて不思議そうに聞いてくる菊池君。

「図書館に行って勉強してたの。もう2週間後には中間試験始まるしね」

「うちもさ来週から試験だよ……。あー、勉強しないとやばいなー。あっ、もしかして昨日も図書館の帰りだった？」

「うん。たくさん本のある空間好きだし、勉強も進むから。って言うても、半分くらいは本読んじやうんだけどね」

そう言っつて私は苦笑する。

「俺、試験1週間前までは部活で帰りはいつもこの時間なんだ。明日も一緒に帰れるかな？」

またまた突然の菊池君の誘いに、私は目を大きく見開いて、呆然と菊池君を見つめる。

「……………えっ？」

『譲のこと、好きだから、一緒に登校しようって言ったんじゃないの』

なんで今、沙世ちゃんのことを思い出しちゃったんだろう

第3話 誤解

「えつと……私と菊池君って友達……だよね？」

「うん、友達だね？」

私の突然の質問に、菊池君は不思議そうにこちらを見ながらも即答する。

「昨日、話したばかりだけど俺は友達だと思ってるよ」

だっ、だよね〜！

はあ……

さっきまで、一人で悶々と考えていたのが馬鹿みたい。

「俺は友達だと思ってるし讓子さんは年上なんだからさ、俺のことカンナ　って名前で呼んでほしいな」

安堵の息をついて胸を撫で下ろしていたのも束の間……新たな菊池君の攻撃に私はうつ……と言葉を詰まらせた。

「えつ……名前で？」

そう言えば、菊池君は今朝会った時にはすでに私の事を名前で呼んでたな。友達とは名前で呼びあうのが普通なのかな？

「友達はみんなカンナって呼んでるし、ねっ！」

そう言つて上から覗き込んでくる。

ちっ、近いんですけど、顔があっつ！

菊池君の透き通るような綺麗な瞳にまっすぐ見つめられると、目をそらせないつていうか逆らえなくなっちゃう。

「わっ……分かったから！ 名前で呼ぶから、ちよつと離れてっ」

私は顔をそらし、菊池君の胸に両手を突っ張って距離を取ろうとする。

お願いだから、そんなに見ないでえ〜！

「カンナって呼んでくれるまで、離さないよ」

てんぱつてしどろもどろになっている私をくすりと笑つた菊池君は、両手を私の腰にまわし優しく引き寄せ、横を向いた私の前に顔を覗かせる。

きらりと光る瞳と目があつて

「……カ、ンナ……っ」

仰ぎ見た菊池君は嬉しそうに白い歯をのぞかせてにかりと笑う。

私はもう顔を合わせているのが恥ずかしくつて、下を向いて両手で顔を覆う。

なんですか、この密着度は……

友達にこんなことするなんて、反則じゃないですか……

あんな艶っぽい目で見つめられたら 好きになっちゃっても文句言えないよ……

「もう、からかうのはやめて」

とん、っとカンナの胸を叩いて、後ろを向く。
なんか、ホントに今日は疲れる日だなあ……
カンナに気づかれぬように、ため息をつく。

「あれ？ 譲子さん、怒っちゃった？」

後ろを向いたままの私に、慌ててカンナが誤ってくる。

「ごめん！ ごめん！」

ちらつと肩越しに振り返ると、両手を顔の前で合わせてペコペコ頭を下げているカンナ。その様子はなんとも可愛い。

普段は人懐っこい子犬みたいなのに、急に男の子の顔になる時があるから心臓に悪いよ。

月曜日の朝。

地元駅の大神宮下駅の改札を通った時に知っている後ろ姿を見かけて、私は駆けより挨拶する。

「おはよう、御堂君」

振り返った御堂君が、一瞬、目を見張ったのに気がついて胸がざわつく。普通に挨拶出来てなかったかな……

だけど、御堂君は静かな口調で挨拶を返してくれた。

「桜庭、おはよ」

「いつもこの時間の電車に乗ってるの？」

朝の駅で御堂君に会うのは珍しくて、階段を並んで登りながら尋ねる。

「今週、週番だからいつもより早く来た」

欠伸をしながら御堂君が言う。

「そうなんだ、私はいつもこの時間だよ」

階段を登りきってホームに着くと、電車が来るまでまだ少し時間があるようだった。同じ学校に行くのに、そのまま別れるのも変な感じがして、私はホームの前を指しながら御堂君に聞いてみる。

「ホームの一番前まで行ってもいいかな？」

「ああ」

私が歩く後ろを、ゆっくりと御堂君がついてくる。ホームを歩いている間、何か喋らなきゃと思いつつも何も話したらいいか思いつかなくて黙ったまま歩き、ホームの端に着いた時、ちょうど電車が来て一緒に電車に乗り込む。

席が空いているといいなと思ったけど、1人分ずつなら空いているのに2人分並んで座れる席はなくて、仕方なく座席の前に並んで立つ。

右隣に立つ御堂君をちらっと見て、それから勇気を振り絞って話しかける。

「御堂君と話すの、すごい久しぶりだよね」

ほんとうに久しぶりで 緊張する。

「そうだな、1年の時はクラス違ったし」

御堂 晃紘君あきひろ、中学3年間同じクラスだった。高校も同じで、1年の時はクラスが違ったけど、2年の今はクラスメイト。話すのはクラス替えの春以来かな。

話が続きなくて、なんか話題はないか一生懸命考えて昨日のことを思い出す。

「あつ、昨日、中野達と集まったんだよ」

そう言った私を、御堂君が振り返る。

「それでね、今度、同窓会やろうかって話になって」

中野っていうのは、中学3年のクラスメイトで私と御堂君の共通の友人。

「へえ、おもしろそうじゃん」

「まだ、日にちとかは決まっていなだけで、御堂君も来られそう？」

そこまで言って、自然に話せているかなって思って、ちらっと御堂君を見る。

「バイトじゃない日だったら大丈夫」

吊革につかまりながら正面を向いて笑う御堂君に、しばらく見とれてしまう。

御堂君はクールな感じで、本当に話すのも笑顔を見るのも久しぶり

だったから、ついつい、見とれてしまったの。

あまりにじいーっと私が見ていたから、御堂君と目があってしま
い……

わわっ。

誤魔化すように目をそらして言う。

「あ、奈緒は元気？ 奈緒にも同窓会のこと言っといてね」
「……………」

息をのむ音が聞こえて、黙り込んだ御堂君をそおつと見上げると、
頭を掻いて少し困った顔をしている御堂君。

「いや、最近会ってないから分からない」

沈黙を挟み、小さな掠れた声が続く。

「奈緒とは 別れたんだ」

「えっ？」

御堂君と奈緒が別れた……？

急に言われた言葉が理解できなくて、黙り込む。その時。

「譲子さん？ おはよう」

後ろから声をかけられ、ぱつと振り向くと、カンナが首を傾げて
立っていた。

考え込んでいた私は、カンナが電車に乗り込んできたことに全然
気付いていなかった。

「………… あっ、おはよう、カンナ」

ぎこちない挨拶だったかな……

カンナは私の横にいる御堂君を見て軽く頭を下げる。

「ども」

私と御堂君の間には、気まずい空気が流れている。

「じゃ、俺、向こうに行ってるから」

「えっ、御堂君？」

そう言っただけで御堂君は、止める間もなくすつと隣の車両に向かって歩き出してしまった。

私が呆然とその後ろ姿を見つめていると。

「譲子さんの友達？」

カンナも去っていく御堂君の後ろ姿に視線を向けながら聞いてくる。

私はカンナの方を振り向けなくて、御堂君に視線を向けたまま言う。

「うん。クラスメイトの御堂君」

そう言っただけで俯き、さっきの御堂君の言葉が気になって黙っている。カンナが感情の読みとれない静かな声で言う。

「邪魔しちゃった？」

ぱっとカンナを仰ぎ見ると、無表情でまだ御堂君の後ろ姿を見て

いた。

「えっ、違うよ?」

カンナがなぜそんなことを言うのかなんとなく想像ついて 苦笑する。

「御堂君とは、駅で偶然会っただけだよ」

なんか言い訳っぽい言い方になっちゃったけど 本当だもの。

「ふん」

自分で自分の言葉に疑念を抱いて困っていた私に、カンナは意味ありげにそう言った。

国府台駅に着いて、私とカンナが歩く少し先に御堂君の後ろ姿を見つけた私はきゅっと唇をかみしめる。

話しながらゆっくり歩いている私達と、サクサク歩く御堂君はほとんど距離が離れていく。

御堂君は、私とカンナのことをなにか勘違いしたのかな?

一緒に行く約束をしていると思って、一人で行っちゃったのかな? いろいろ想像してみるけど、御堂君がどういうつもりだったのかは分からない。ただ、勘違いされたと思うと、少し胸が痛んだ。

ただの友達だよ って言いたいけど、もう話す機会もなくて、そんなことは言えないだろうな。

第4話 2つの気持ち

学校までの道のり、カンナは楽しそうに顔をほころばせ、話しかけてくる。

「昨日はずっと部活でさー」

カンナが御堂君のことを気にしていた様なのは駅に着くまでで、その後は週末の出来事を話してくれた。

「休みの日も練習なんて、えらいね」

「もうすぐでつかい大会があるんだ！　なのに明日から試験前で部活停止でしょ。休みの日に練習しても時間が足りないくらいだよ」

「へー、真面目にテニスやってるんだね」

真剣なカンナがすこし可愛くて笑ってしまった。

「まあね。部活だろうとやるからには勝ちたいしさ！」

力強く言うカンナの表情はキラキラして眩しい。

「すごく前向きなんだな　そんなカンナがなんだか羨ましく感じる。」

「中学の時もテニス部だったの？」

「いや、中学ん時はサッカー」

普通、中学高校って同じ部活に所属している確率が高い、運動部

ならなおさら。それが中学も高校も違う部活、しかも運動部だなんて

「運動神経よさそうで、うらやましい……」

つい、本音がこぼれてしまう。

「譲子さんだって、泳げるんだから運動神経いいでしょ？」

そう聞かれると思った……

私はふうーっとため息をつく。

「泳ぎは得意な方だけど、球技は苦手。だから運動神経良いつて言えないよ？」

泳ぐことと走ることは得意だけど球技がド下手……だから体育はいつも段階評価で平凡な3なのだ、悲しいことに。

複雑な気持ちで言う私を気にした様子も無く、カンナが尋ねてくる。

「バタフライも泳げんの？」

「いちお、泳げるよ」

「じゃー、運動神経いいじゃん！」

上から首をかしげながら覗き込んで、言い切る。

なんだかカンナが言うつと　そう思えるから不思議だな。

「譲子さんは、週末何してたの？　休みの日はなにしてるの？」

話が戻って、私のことを聞かれる。

「休みの日は、やっぱり読書かな？」

「読書好きだね」

そう言って、白い歯を見せて笑うカンナ。

「俺も本は好きだけど、漫画が多いかな」

つられて笑う。

「私も漫画も好きだよ。本棚の半分くらいは漫画かな。日曜は、中学の同級生と会ってた」

「へえ、仲いいんだね！ よく会うの？」

「中3の時のクラスはね、男女関係なくみんな仲良かったよ。クラスの団結力もあったし」

うんうんって頷きながら、私の話を聞いている。

カンナは自分の事もたくさん話すけど、相手にも話を振ってちゃんと聞いているからすごいな。私は話すのは得意じゃないけど、ついついたくさん喋ってしまう。

喋り上手で聞き上手、一緒に話してて楽しいんだもの、きつともてるんだろうなあ。

そんなことを考えながらカンナの方を見て話す。

「仲いい友達とは月1回くらいで会うかな？ あっ、今度同窓会やるうって話になってね、さっき御堂君に……、っ！」

そこまで言って、はっと気づく。

御堂君の話題は避けた方がよかったかなって思いカンナを見ると、

さっきまで笑顔でこっちを見ていたのに、今は正面を見てて表情が伺えない。

あまりに喋るのが楽しくて、余計なことを言ってしまった……かも。

「えっと、御堂君とは中学も一緒だね？　って言っても、そこまで仲良くなかって……ええっと、さっき話したのもすごく久しぶりで……」

私があたふたと説明していると。

「ぶっ」

「えっ？」

噴き出したような気がしたけど気のせいかと振り仰ぐと、カンナはお腹を抱えて笑っている。

「あはは、ごめん。譲子さんが、真剣に悩んでるから……」

笑いすぎて、瞳に涙が滲んでいるカンナはそれを手の甲で拭いて、片目を瞑って悪戯っぽい顔でこっちを見る。

ひっ、ひどい！

カンナを怒らせちゃったかと思って、私、すごく焦ったのに……

「さっきはみんな仲良かったって言ったのに、今度はそこまで仲良くない　って矛盾してるし」

言っつて、カンナは笑いを堪えようと手を口に当てたけど、結局耐えきれずに笑う。白い歯を見せながらいーっと笑って、こっちを見ている。

私はうなだれてふうーっとため息をつく。

なんだか、誤魔化そうとしたことが馬鹿らしくなってしまった。

「だって本当」

そう言った私は皮肉げだったかもしれない。

「中学の時は仲良かったけど今はぜんぜん話さないもの。ただのクラスメイトって感じかな」

自分で言った言葉が胸に突き刺さり、心なしか気分が沈む。

「俺は？ 友達？」

そんな私を、カンナが真剣な表情で覗きこんでくる。

私は、そのあまりに真剣な表情にドキんと胸が跳ねる。

「カンナは 友達、カンナがそう言ったでしょ？」

欲しい答えを貰えたという様に、カンナはにこりと笑って。

「うん、クラスメイトより友達が仲いいよね？ ならいいや」

そう言って腕を頭の後ろに組み、軽快な足取りでカンナは歩きだした。

第5話 当たり前

私が思うに カンナは私の事を好きなんだと思う。
こんなこと言ったら、自意識過剰って思われるかな？
でも、そう思うの。

この勘は当たっていると思う。
カンナと出会ってから約2週間、カンナと一緒にいて そう感じたの。

だからカンナが御堂君に対して、何か気にしている様子だったのもそのせいだと思う。

あの日の朝

「うん、クラスメイトより友達のほうが仲いいよね？ ならいいや」

そう言ったカンナは眩しいほどの笑顔で私に笑いかけた。

それから、もう一度確認するように。

「今は御堂さんってクラスメイトよりも、俺のが譲子さんと仲いいんだよね？」

カンナは涼しげな眼もとに笑いを含んで私を見る。

その言葉と表情が 私を好きだと言っているように感じて。

自分が一番仲いいって確かめるように聞いてくるんだ　って。
だから一瞬、返答に詰まってしまった。

私にはまだ、振りきれない気持ちに心に残っていたから……
カナナとの距離を、これ以上詰めてはいけない　って、頭に警
戒音がガンガン鳴り響いていた。

だけど私は、カナナを突き放すことも出来なくて。
顔をぐいっと上げて、まっすぐにカナナを見る。

「クラスメイトよりも……カナナとが仲いいよ」

あえて御堂君とは言わずに、曖昧に答えた私。

そんな私を、カナナは少し皮肉な感じの、でもすごく魅惑的な微
笑みで見つめ返す。

「それでいいよ」

今はまだ、それでいいよ　って。

カナナが今の関係で満足していることが分かったから、私もそれ
以上何も聞かないことにした。

試験が目前に迫っても、カナナは私の下校時間に合わせてくれて、
一緒に帰るのが当たり前になっていた。

「試験前は部活ないから、本当は早く帰れるんでしょう？　待ってて
もらって、なんか悪いな」

私が申し訳なさそうに言うと、カンナが首を横に振りながら。

「大丈夫。俺も譲子さんを見習って図書館で勉強してんだ。家だと他の事に気がいっちゃって勉強進まないから」

おかげで今回の試験は赤点免れそう、って笑いながら言うの。

ほんと、こつやって笑っている顔は年相応というか可愛いんだよね。

「明日から試験だね、初日から三教科もあるから大変」

「俺は、明日は二教科だけだ……」

言いながら、カンナはちらつと私を見る。

「じゃ、明日は先に帰ってていいよ」

なんととはなしに私が言うと、カンナはちょっと不満げに唇を尖らせる。

「あーあ。明日、譲子さんに会えるのは朝だけか。寝坊しない様子を気をつけないとな」

カンナは首を触りながら斜め下を見つめる。

きっと、今日は徹夜して勉強するつもりなんだろうな。

「あー、やべえー。寝坊しない自信がない……」

ふふっ。

ずっと首を触って悩んでいるカンナが可愛くって笑ってしまって、口元に手を当てる。

「試験の日はいつもより遅い電車に乗ってるの？」

私が聞くと、カンナは頷く。

カンナと出会ってから、毎日、登校も下校も一緒なのだから、時々は会わない日があってもいいと私は思うんだけど。

カンナは、なるべく一緒にいいみたい。

6つ年上の兄がいて年下の兄弟はいないから、可愛い弟が出来たみたいで私はお姉ちゃん気分でふふつと笑う。

「譲子さん、試験中、朝の電車に俺がいなかったら寝坊だと思って」

カンナは片目をつむって申し訳なさそうに言う。

実は　私とカンナはお互いの連絡先をいまだに聞いてない。メールアドレスも携帯番号も交換してないのだ。

だから寝坊とかいざという時、お互いに連絡を取る手段がないの。今までその必要がなかったから教えあわなかったけど。

もしかしたら、明日からカンナは同じ電車には乗ってこなくて、試験が終わるまで会わないかもしれない。その事をカンナが気にしているなら、教えた方がいいかしら。

アドレスを教えるかどうか考えている間に、カンナが降りる海神駅に着いてしまった。

「じゃ」

そう言って片手をあげて別れの挨拶をするカンナが、一瞬、何かを言おうとして動きが止まり私を見つめる。

「やっぱいいや。じゃ、また明日」

私の方を見たまま電車を降りて、手を振るカンナ。

「また明日ね」

私もアドレスを言うタイミングを逃して、手を振り返す。

プシューッと音を立てて、電車のドアが閉まる。

閉まったドア越しに、カンナが私を見ている。口が動いた。

私はドアに近づき、カンナを見る。

し・け・ん・が・ん・ばっ・て　　って言ったみたい。

私も声を出さずに口だけ動かして、“カ・ン・ナ・も”と言う。

言い終わる前に電車が動き出して、私もカンナもお互いに手を振って別れた。

次の日の朝。

やっぱり、カンナはいつもの電車には乗ってこなくて。その次の日も、その次の日も、試験期間中は会うことはなかった。

試験初日は、朝の電車にカンナがいないことに少し寂しさを感じたけど、2週間前まではそれが当たり前だったのだと思うと、なんとも不思議な気分がした。

試験2日目以降は、電車の中で試験の勉強に夢中になってカンナの事は全く考えもしなかった。

そうして、あっという間に4日間の間試験が終わる。

週末を挟み、試験明けの朝。

電車の座席に座って本を読んでいた、それはいつもの事。だけど大神宮下駅から2つ目の海神駅に着くと読んでいた本を閉じ、開く扉に視線を向ける。

扉越し、ホームに立ったカンナと視線が合い、カンナがはにかんで笑う。

いつもの電車、いつもの習慣なのに　そこにカンナが乗ってくると、それまでと景色が違って見える。

「おはよ、カンナ」

座っている私の前に来たカンナに挨拶すると、カンナが爽やかに笑う。

「おはよ、久しぶりだね」

「試験どうだった？」

「んー、まあまあかな」

カンナは俯きながら、髪をくしゃつと掻く。

「遅刻はしなかった？」

私が笑いながら聞くと、カンナが苦笑する。

「なんとか……」

そう言つて、2人して笑い出す。

その日からまた、カンナと一緒に登校する日々が始まった。

カンナとはつい19日前に会ったばかりなのに、いつの間にかそれが当たり前になっていた。

もし、試験前日にメアドを教え合っていたら試験中すれ違いになることはなかったかもしれないとか、そんなことを考えたこともあったけど、たとえ会わない日があっても、こうしてまた当たり前のように一緒に登校する日が来るんだなあ。

ひよんなことから一緒に登校するようになったカンナと私だけど、今ではすっかり友達になっただんな、と実感する。

ふふっ。

そんなことを考えて笑ってしまった私を、カンナが怪訝そうに見ている。

まさか、私が今更カンナを友達と認識したなんて言うのは恥ずかしくて、こう言うことにしたの。

「ねえ、カンナ。メアド教えてよ！」

そうして、私とカンナは本当の友達に 2人の距離を、また1歩縮めた。

閑話 あ頃のわたしたち

中学の3年間ずっと同じクラスで、ずっと気になっていた男の子。サラサラの黒髪、通った鼻筋、落ち着いた雰囲気をもった彼の事がずっと好きだった。

きっかけはたぶん、単純なこと。

中学1年の時、初めての席替えで隣の席になった彼が普段はシャイで無口なのに、私と話す時はよく笑ってくれて、ちょっとした会話嬉しくて、自然と好きになっていたんだと思う。

席が離れてからも時々喋って、男の子の中では1番仲が良かった。彼にとっても私が1番仲の良い女の子で、特別だと思っていた。

だから好きって気持ちを伝えなくても、こんなに仲がいいならそれでいいと思っていた。

中学2年の時も中学3年の時も、その先も

この関係がずっと続くと思っていた。

でも、それは私の勝手な思い込みだったんだ。

中学3年の時。

初めて同じクラスになったけど席が前後ですぐに仲良くなった奈緒が 彼の事を好きだと言った時。

私も好きだとは言えなかった。

私も好きだと 言えばよかったのに。

それから間もなくして、奈緒が彼に告白して付き合うことになったと聞いた。その時になって、私が彼にとって特別な存在じゃなか

ったと知る。

奈緒と彼が付き合いだしても彼は私に今まで通り接してくれて、いっぱいいっぱい話したり、笑ったりした。

だから、特別じゃなくてもいいかなって思った。

彼にとつて、女の子として1番じゃなくても、女友達として1番だったらいいかなって。

でも、そんなのは嘘

「あまり話しかけないでほしい。彼女が心配するから、彼女以外の女の子とは、あまり仲良くできない」

そう彼に言われて、気付いた……

今更気づいても、遅いのよね。

私は、女友達としても1番ではなくなった。

彼の中で、彼女の奈緒が1番。それ以外は1番もなにもないんだって、はつきり言われてしまった。

もし、私が先に告白していたら。

もしあの時、私が奈緒に本当の気持ちを伝えていたら 何か変わったのかな？

そう考えることもあるけど、いくら考えてももうあの頃のわたしたちに帰ることはできないのよね。

彼と話さなくなっただけからあつと言う間に月日が経ち、中学を卒業。同じ高校に進学したことも知らずに、高校に入学してしばらく経った頃に校内で見かけて知ることになる。

どこで、なにを間違えたのかな

あの頃のわたしたちは、あんなに仲が良かったのに。彼女とか彼

氏とか関係なく、私も、奈緒も、彼も。みんなみんな、仲が良かったのに。

あれから、2年が経って。

私と奈緒は時々メールをするのみ。奈緒が彼と付き合いだしてからは、一緒に遊ぶことはほとんどなくなってる。

私と彼は同じ高校に進学。1年ぶりに同じクラスになったけど、以前とは違って話すこともなく。

彼と奈緒は……

この2年に2人の間にあったことを私は知らないけど。

今、彼　御堂君と奈緒は、別れたという。

あの頃のわたしたちは2年後　こんな風になっているとは思ってもしないんだろっな。

第6話 メール誘惑

朝、鏡の前でボトルグリーンのリボンを襟につけていると、ブーツ、ブーツ。

携帯のバイブレーション。

机の上に置いてあった携帯が鳴る。

携帯を取ってみると、メールが一件。

『From: 菊池 カンナ

subject: おはよう

本文: いま起きた。今日も暑いね』

カンナからのメールだ。

メールを読んだ私の頬が自然とゆるむ。

『To: 菊池 カンナ

subject: おはよう

本文: 私はこれから、朝ごはんだよ。今日はすごい暑くなるみたい！』

メールを打ちながら、リビングへと降りていく。

さつき顔を洗いに洗面所に向かう途中で見たニュースで、今日はすごく暑くなると天気予報士が言っていたのを思い出して、メールに書く。

私とカンナが出会ってから約3週間。

あの日 私はカンナとメールアドレスを交換した。

それ以来、カンナとはメールをするようになって、カンナは朝起

きるとかならずメールをくれる。一時間後には、電車で会うというのに。

私は　　というと、筆不精ならぬメール不精で、なかなかメールを返さないんだけど。

いえね、そもそもメールが来たことに気づくのが遅くて、返信が遅れてしまうの。だから、着信に気づいてすぐに返信するのは朝の一回のみ。

カンナもそんな私の性格を分かってくれて、頻繁にメールをするわけでもなく1日に3〜4回やりとりするだけ。

なぜか、おはようとおやすみメールは必ず来るけど。

いつものように朝ごはんを済ませて、家を出る。

今日から7月。

今年の梅雨はあんまり雨が降らない。梅雨明け宣言はまだされていないけれど、暑い日が多くて嫌になってしまう。

何もしていないのに汗が出るくらい、じめじめした日が続いている。

駅に向かって自転車を漕いでいる私の額にじわりと汗が浮かび、前籠に手を伸ばして鞆の中から大判のハンドタオルを取り出して額を拭って、素早くタオルを鞆に戻す。

自転車を勢いに任せて走らせ空を見上げると、春には桜並木だった木々の青葉の隙間から夏の日差しがちらちらと差し込んで、眩しかった。

うちの高校は、前期と後期の2学期制。中間試験が終わって、1カ月も経たないで夏休みがやってくる。

他の学校の子が期末試験に追われているこの時期、ただやってくる夏休みを待つだけなのだ。

確か、カンナの通っている里見高校も2学期制って言ってたな。もちろん授業は普通にあるし、2学期制で試験の回数が少ない分、1回の試験範囲が広くて大変ではあるけどね。

そんなことを考えながら駅に着き、定期を出そうと鞆の前ポケットに手を入れた時、携帯が鳴る。

定期と一緒に携帯を取り出して着信を確認すると、中学の同級生の夕貴ゆづきからだった。

『From: 三井 夕貴みつい』

subject: 3 - A 同窓会のお知らせ

本文: 7月23日(土) 17:00 ためき亭で3 - A 同窓会をやりませう。

参加できる人は、三井まで返信よろしく!

全員にうまく連絡いってないかもしれないから、他の人も伝えてね!』

あつ、この間話していた同窓会の日にちが決まったんだ。

改札を抜けてホームを歩きながらメールを読んでいた私は一人類が緩む。

中学3年のクラスメイトはみんな仲良くて、その中でも特に仲が良い人とは1〜2カ月に1度は集まっています、メールの送り主の夕貴も中間試験前に会っている。

でも、同窓会って形で集まったことは卒業以来一度もなくて、今回が初めての同窓会ということになる。

卒業以来会っていない友達に会えるのも嬉しいし、3年A組のみんなが集合すると思うと中学生の頃が懐かしくなってきた、それだけでうきうきとした気持ちになる。益々夏休みが楽しみになってきたな。

両手に持った携帯に視線を落としたまま、来た電車に乗り込んで席に座ってメールを打つ。

『To:三井 夕貴』

subject:同窓会

本文:日にち決まったんだね。夕貴が幹事? 参加するのでよろしく』

すると、すぐに返信が着る。

『From:三井 夕貴』

subject:そう

本文:私が幹事することになったんよ……大輝だいきに押しつけられた。譲子参加で了解!

そういえば、御堂と同じ高校だよな?

私、御堂のアドレス分かんないから譲子から伝えてもらうことってできる?

あと、須藤さんもお願い』

って……!

ええっと、別にいいんだけどね。

別にいいんだけど、ちょっと気が進まないなあ……

そう思いつつ、慣れない手つきでまたすぐにメールを打つ。

『To:三井 夕貴』

subject:了解

本文:御堂君とは今年同じクラスだから、学校着いたら聞いてみるよ』

別に、御堂君に聞くのは構わないんだよ。この間、同窓会の話題はしたし。

ただ、その時の事を思い出すと 同時にあの事も思い出しちゃ

って。

『……奈緒とは別れたんだ』

そう言った御堂君の顔は切なげで、思い出すだけで胸がぎゅっと締め付けられる。

沈んだ気持ちになったのを誤魔化すように夢中でメールを打っていた私は、カンナが目の前に立っていることにぜんぜん気づいていなかった。

「譲子さん？ めずらしいね、携帯いじってるなんて」

急に声をかけられて、びっくりと肩を震わせて顔を上げる私。

立っているカンナが覗きこむように私を見て

パタンッ。

焦って携帯を閉じて鞆にしまっちゃった。

カンナが不思議そうに首をかしげる。

「なんでもないよ」

何も聞かれていないのにそう言ったのは、怪しかったかもしれない
い……

でも、なんとなく話をそらしたかったから、引きつる笑顔で誤魔化すことにしたの。

第7話 夏休みまであと20日

無理やり話をそらしちゃったけど、カンナは特に突っ込んでこなかった。

「夏休みまであと20日だね」

吊革に両手をかけて私の向かいに立っているカンナは、そんなことを言っただけで楽しそうにしている。

「夏休み、楽しみなの？」

私も夏休みは楽しみだけど聞いてみる。

「楽しみ！ まっ、ほとんど部活でつぶれるだろうけど、学校は面白いね」

前髪をいじりながら喋るカンナ。

「譲子さんも休みは部活？」

「うん、7月から部活も毎日になるしね」

「えっ、じゃあ今日から放課後は部活？」

「うん」

私は、水泳部 っと言っても、うちの高校のプールは屋外だから7月から9月の間しか入れないんだよね。だから、毎日部活があるのはその3カ月だけで、それ以外の期間は週に1回、市のプール

に練習に行くの。

今日から7月でプールも解放されるから、部活も毎日になるんだ。まあ、7月の初めは気温によって入れない日もあるから、朝練はほとんどないんだけど。

「カナナは、今日も朝練なんですよ？」

「うん、大会まで2週間ちょっとだから。放課後の部活も長引くと思うから……しばらく一緒に帰れないねって言おうと思ってたけど譲子さんも部活じゃどっちにしる無理だったね」

カナナは首を傾げて残念そうに言う。

「うん。しばらく、帰りは別々かな？」

私もそう言って苦笑する。

「あーあ、しばらく一緒に帰れないのか……、あつ、夏休みになったらますます会える日減っちゃうじゃん！」

そう言って、しょんぼりするカナナ。

「そうだね。お互い部活があっても、始まる時間は違うだろうから」

カナナのテニス部は午前9時から午後6時くらいまでびっちり練習するらしい。私の水泳部は10時から12時くらいで終わると思う。

「夏休みは、同じ電車ってわけにはいかないね」

私がそう言うと、カナナはますます不満そうに頬を膨らませる。

ふふっ。

そんな顔をするカンナは子供っぽくて可愛くて、つつい笑ってしまった。

「ひどいな……譲子さん、笑うなんて」

そう言ってふてくされた顔も、なんだか可愛いんだ。
国府台駅に着き、電車を降りながら言う。

「夏休みまでまだ20日もあるし、いっぱい一緒に帰れるよ」

なぐさめるように言う、すると。

階段を下っている間、黙りこんでいたカンナが私を横目で見て、
ぽつんと艶っぽい声で言う。

「20日したら、会えなくなっちゃうのか……」

そんな寂しそうな声を出されると、どうしていいか分からなくなってしまう。私が口をつぐんでいると。

「あっ、そうだ！ 夏休みの土日は部活ないから、譲子さん遊ぼうよっ……」

突然思いついたように、カンナが言う。

普段、カンナは土日も部活があって休みの日に会ったことは一度もない。でも、さすがに夏休みの土日は部活もお休みみたい。

「うん、いいけど……」

カンナが瞳をキラキラとさせて嬉しそうに言うものだから、何に

も考えずに即答してしまった。

「やった！ 譲子さんとデートだ！」

そしたらカンナがデートだなんて言うものだから　びっくり！
ええー、デート！？

「えっ」

バサッ。

あまりにびっくりしすぎて、手に持っていた定期を落としてしまった。

私は改札を出てすぐのところ立ち止まる。

「譲子さん、どこか行きたいところある？」

カンナは私が立ち止まっていることには気づかず、てくてく歩きながら話を続けていた。

「あれ？ 譲子さん？」

駅の建物を出たところまで行ってようやく私が隣にいないことに気付いたカンナが、小走りに戻ってきて私の顔を覗き込む。

自慢じゃないけど私は今まで、誰かと付き合ったこともなければ、“デート”すらしたことがない。

だからいきなり“デート”とか言われると、その単語だけでドキマギしてしまうじゃないかっ。

言う、言うぞ！

私は文句を言おうと、キッと顔を見上げたんだけど
カンナがあまりにも綺麗な笑顔で私を見ているから、勢いを失っ

てしまう。

「なんでもない……」

はあー。

どつとため息をついて、とぼとぼと歩き始める。

カンナの端正な顔を見たら、言いたかったことも言えなくなっちゃったじゃない。

カンナは不思議そうに首をかしげながらも足早に私を追いかけてきて、すぐに横に並ぶ。その顔は満面の笑みで、私は複雑な気持ちに唇をかみしめた。

「23日」

突然そう言われて、びっくりしてカンナを仰ぎみると。

瞬間。

ばちつと私とカンナの目が合って、宝石みたいにキラキラした綺麗な瞳にじいーっと見つめられて、私はカンナをまじまじと見つめ返してしまった。

あまりにじろじろ見すぎたせいかしら。

私の視線の先で、カンナの顔がカツと赤くなってふいつと視線をそらしたの。

「23日は会える？」

顔をそむけたまま言うカンナ。見ると耳まで真っ赤になってる。

あら、照れちゃって可愛い。

「えっと、その日は中学の同窓会があるから」

同窓会は夕方からだけど、同じ日に予定を2つもこなせるほど私は器用な性格じゃないから。

「できれば、違う日がいいかなって……」

そんな理由で断るのが悪いなって思っ、だんだん声が小さくなる。

「了解、予定があるなら仕方ないね。じゃ、24日なら大丈夫？」

「うん、24日は大丈夫」

一度断っているから、即答で答える。

「じゃ、24日会えるの楽しみにしてる」

そう言っ、白い歯を見せてにかりと笑っカナナ。

「どこ行くかは、また今度決めよう！」

里見高校の校門までもうすぐのところで、カナナがそう言い手を振って校門をくぐっていく。私はそのまま少し歩いてから横断歩道を渡って、国府台南高校の校門へと向かった。

教室に入るとまだ誰も来ていなくて、私は机の横に鞆をかけて、一緒に持ってきていたプール道具の入った鞆だけを持っ、水泳部の部室に向かう。

教室棟を出て体育館に向かう渡り廊下を通っ、その途中にある部室棟に向かう。

部室にも誰もいなくて、荷物を置いて渡り廊下に戻り、体育館の中にある体育教官室でプールの鍵を貰って、とりあえず気温と水温を確かめにプールに行っただけ、朝はまだプールには入れなさそうだった。

水泳が好きっていうよりも、小さい頃から習っていて泳ぐのが当たり前というか、ただ単に楽しいから、それだけの理由で水泳部に所属している。まあ、いちおメドレー泳げるし、他の人よりは早いとは思うけど、水泳部の中では普通かな。

水に浸かった時の感覚は気持ち良くて、泳いでる時は無我夢中で自分の世界に入り込めるから好きなんだ。

あー、早く泳ぎたいなあ。

そんなことを考えつつ、頭の片隅でもう一つの事を考えていた。

『あ、奈緒は元気？ 奈緒にも同窓会のこと言っというてね』

『いや、最近会ってないからわからない。……奈緒とは別れたんだ』

御堂君

奈緒

実はあの日以来、御堂君とは話していない。

今朝、夕貴に頼まれた同窓会のことを御堂君に伝えるってことは御堂君と話すっていうことは、どうしてもまたあの話をしなくてはならないような気がして、ずっと切り出せないでいた。

教室棟と体育館をつなぐ渡り廊下と部室棟の間にある中庭に腰をおろして渡り廊下の壁に寄りかかりながら、ぼんやりと空を見上げる。

教室に戻って御堂君が登校していたら、話さなくてはならないそう思うと教室に向かう足取りが重くて、教室に戻りたくないような気にさえなってくる。

ひたすらボーっとして、始業のチャイムが鳴るのを待っていたんだけど、こんな時に限って、どうして会ってしまふものなのかな。

「桜庭？ 何やってるんだ？」

その声をかけてきたのは他でもない御堂君。
いま一番会いたくなかった人

「ん……」

私はそう言っただけで俯き、黙りこんでしまった。
御堂君は、奈緒と別れたって言うていた
そのことについて触れていいのか、私なんか聞いていいのか、
ずっと迷っていた。

だから、私は重い口を開けて声を絞り出す。

「あのね……」

第8話 7月23日、午前

『それで、どうしたのさ?』

携帯の受話器から聞こえる声に答える。

「結局、聞けなかった……」

そう言った私は、自分の部屋の床に座ってベッドに寄りかかりながら、携帯を片手に持ってたうなだれる。

夏休みになって4日目、今日は7月23日。夕方から、中学の同窓会がある。

電話の相手は、夕貴。

『なーんだ、聞いちゃえばいいのにー』

明るい口調でけらけら笑いながら言う夕貴に、私は唇を尖らせる。

「聞けないよ……だってなんて言うの?」

私が情けない声で言うと。

『それはさ』どうして奈緒と別れたの? 私と付き合っ!』って

私の口調を真似て言った夕貴の、はははっという笑い声が聞こえてくる。

「なに、その最後の付き合って！　って？　ぜんぜん関係ないし！
ってか、もうそんなんじゃないし……」

はあー。

ため息をつきながら、私は呆れて言う。

『へえー、もう御堂のことは吹っ切れたんだー？』

そう言っつて、興味津々で聞いて夕貴はまた笑う。

自分でも不思議だけど

御堂君のことは気にはなる。でも“好き”とかそういう対象では
なくなっつてきてることに、うすうす気づいている自分がいたの。

「うん……吹っ切れそう、なんだと思う……」

それは、カンナの存在のおかげだと思う。

カンナの事を好きかって言われるとまだ“友達”の関係なんだけ
ど、カンナが私に対して抱いてる好意が、態度が　私の御堂君に
対する気持ちを和らげてくれている。

私の中で、私と御堂君の時間は2年前のあの時で止まっているよ
うな気がするけど、それがカンナをきっかけにまた御堂君と話すよ
うになっつて動きだしたんだ。

ううん　動かさなきゃならないと思う。

あの時の気持ちに、そろそろ決着をつけなきゃいけないんだ。
でも

いざ御堂君と話すと、好きだった時の気持ちを思い出してしまっ
てドキドキしちゃっつて、うまく話せないんだよね。

あの日も

「あのね……この間話してた同窓会なんだけど、今日、夕貴からメールが来て、7月23日にやることに決まったって」

俯いたまま、御堂君の方を見ないで言うのが精一杯だった。

「そっか。行けるかどうかは、教室戻ってバイトのシフト見ないと分からないから、またあとでいい？」

静かな口調の御堂君の声が頭上から聞こえて、それだけで胸がチリチリと焼けるように痛む。

「……………」

しばらくの沈黙。

「御堂君！」

私は顔をあげて、御堂君を見る。

「ん？」

首をかしげながらこつちを見た御堂君は、長い足を僅かに開いて立っている。それだけで格好良い。

「あの、なお……………」

私がそこまで言った時で、腕時計を見ながら御堂君がさえぎる。

「あっ、悪い。体育の佐藤に呼ばれてて、そろそろ行かないと……」
「佐藤先生に？ ……そっか、ごめん、じゃあ、またあとでね」

じゅつと片手をあげて駆けていく御堂君。

御堂君の後ろ姿が教官室のある体育館の中に消えていくのを見送ってから、はぁーっと大きなため息をつく。

私、なにやってんだろ……

『奈緒にも連絡してくれる？』

そんなこと言ったら、また御堂君が辛い顔するのは分かっているのに

どうして奈緒と別れたのか、聞きたいけど 聞けないよ。

その後教室で、御堂君が同窓会に参加できるという返事をもらった。

結局、奈緒の事は聞けなくて。奈緒には、私から直接メールをして同窓会のことを伝えた。奈緒にメールするのはすごく久しぶりだったから、要件のみのメールを送ると、夕方に参加するという返信が着た。

『今日、須藤さんも来るんだよね？ 御堂も須藤さんも揃うなら、もう、直接須藤さんに聞いちゃえば？』

のんきな声で夕貴が言う。

御堂君と話した日の事を回想していた私は、夕貴の言葉で現実
引き戻される。

「奈緒に……？」

『そう！ 御堂のことぶっきれたとか言ってるけど、譲子、ホント
はまだ気になるんじゃないの？ もう、はっきり聞いてぶっき
ちやいなよー』

「んー……」

私は、曖昧にうなづく。

聞きたいのか、聞きたくないのか、自分でもはっきりしないから
だ。

『譲子が聞けないなら、私が聞いてあげるよー』

踏ん切りがつかず口ごもる私に、夕貴がそんなことを言う。

いくらなんでもそれはいきなりすぎて、無茶な話だから止めよう
と思ったら。

『あつ、ごめん。そろそろ切るねー。同窓会の準備で大輝ん家行か
なきゃだからー』

ツウー、ツウー。

そう言っつて、一方的に夕貴は電話を切ってしまったって、受話器の向
こうから無機質な音が響く。

私はふうーっとため息をついて、ぱたんっと閉じた携帯をしばら
く見つめる。

夕貴はああ言っていたけど、まさか夕貴から聞くってことはない

よね

悩んでも仕方ないと投げやりな気持ちになり、携帯を机の上に置いて出かける準備をした。

第9話 同窓会、直前

お昼ごはんを食べ終わって部屋に戻ってくると、机の上の携帯がメールの受信を知らせてピカピカと光っていた。携帯を開いてみると、カンナからのメールだった。

『From：菊池 カンナ

subject：明日

本文：南船橋駅に集合でいいかな？

映画もあるし買い物もできるし、何するかは行ってから決めよう。

実は、いま起きた……』

7月に入ってから、カンナとは放課後はそれぞれの部活が忙しくて、朝も大会前のカンナは朝練がいつもより早くから始まったりして、ほとんどすれ違っていた。

だから、遊ぶ約束はしたものの、具体的にどうするかとか決められないまま、時間が経っていった。

7月20日の終業式、その日は久しぶりにカンナに会う。

「おはよ、讓子さん」

久しぶりに見たカンナは、日焼けしてすこし黒くなっていた。

「おはよう、カンナ」

私はカンナが朝練と一緒に登校できない間は、久しぶりに読書を楽しんでいて、カンナが電車に乗り込んだのを確認して、読んでいた本を閉じて鞆にしまう。

「明日から、夏休みだね」

そう言つと、カンナはうんざりした感じで肩をすぼめ。

「あー、もう夏休みとか関係なく部活だからなあ……、さすがに今日は部活ないけど」

部活をすごく頑張っているカンナだけど、7月に入ってから朝も放課後も土日もずっと練習だったから、すごい疲れているみたい。一昨日までの3連休は夏の大会があつて、それで一段落なのかと思つたら、まだ8月にも大会が残っているらしく、夏休み中もハードに部活があるんだつて。

「夏休みも忙しそうだね」

私が疲れた様子のカンナを見て苦笑すると、カンナも苦笑して。

「うん、でも好きでやってるから。それに、夏休みも譲子さんに会えるって思えば頑張れるよ」

にこつと白い歯を見せて、うつとりするような甘い顔で笑つ。笑つと出来る、左頬のえくぼはなんとも色っぽい。

うつ、ずるい……

そんな素敵な笑顔を見せられたら、好きになっちゃいそっだよ。
私はぱつとカンナから視線をそらして俯く。

「うん、そっだね。一緒に出かけるの楽しみだね」

もう胸がドキバクして、自分でもなに言っているのか分からなくて、そんなことを言ったら。

「じゃあ、夏休みはいっぱい一緒に遊ぼうね」

思わず振り仰いだら目の前にきらきらの笑顔があつて、ドキドキする胸を誤魔化すように慌てて頷いて相槌を打つ。

「うん」

えっ………？

「やったーっ！ 8月の後半は部活も休みが多いから、たくさん譲子さんに会えるね」

えっ

満面の笑みで私を見つめるカンナの勢いにつられて、23日以外にも夏休みに会う約束をさせられてしまったのだった。

私は携帯を両手で持って、カチカチとメールを打ち始める。

『To: 菊池 カンナ

subject: OK

本文:それでいいよ。何時に集合する？

私はもうお昼ごはん食べたよ。もう少ししたら出かけるんだ』

ベッドに座って垂らした足をブラブラさせながら、時間を確かめる。

今は13時。同窓会は17時からだけど、少し早めに行って買い物でもしようかな。

実は同窓会をやるためき亭があるのも、明日カンナと会う約束をした南船橋駅なの。

メールを打ち終わって携帯を鞆にしまうと、部屋着から私服に着替え、机の上に置いた鞆を持って家を出た。

学校に行く時に乗るのと同じ電車に乗って1駅、そこで乗り換えて1駅で南船橋駅に着く。

南船橋駅の周りは住宅街と競馬場なんだけど、駅前に大きなショッピングモールがあって、映画もあるし、お店もいろんなお店が揃っている。1日ばかりでも回りきれないほど広くて、ウィンドウショッピングするだけでも退屈しない。

ためき亭はそのショッピングモールから少し歩いた所にあるお店で、中3のクラスメイトだった中野 大輝の両親がやっている洋食屋さんでコロッケがとっても美味しいの。

中学の卒業式の打ち上げも、そのためき亭でやっている。

本当は自転車でも、通学に使っている電車で学校とは反対方向に一駅行った船橋競馬場からでも歩いて南船橋駅にはいけるんだけど、ショッピングモールに行くには乗り換えて行く方が楽なんだよね。とりあえず、お店をぶらぶらしようかな。

そう思って、南船橋駅に着いてからショッピングモールに向かつて歩いていると、携帯が鳴ったことに気づく。

『From: 菊池 カンナ』

subject: 10時でいいかな？

本文: そういえば、今日同窓会だったっけ？ 楽しんできてねー

俺も今から友達と出かけるよ』

受信箱を開くと、カンナからのメール。それともう一通

第10話 トラブルメーカー

『From: 須藤 奈緒

subject: 無題

本文: 今日同窓会が終わった後に話したいことがあるんだけど聞いてくれる?』

カナナのメールと一緒に届いていたもう一通のメールは 奈緒からだった。

なんだろう、聞いてほしいことって……

すつごく嫌な予感がするのは、私の気のせいかしら。

私は奈緒とは今でも友達だと思ってる。でも、奈緒の方はどうなんだろうか

奈緒は御堂君と付き合い始めてから、私とはめったに遊ばなくなつたし、卒業以来メールは時々しても会ったことは一度もない。

そもそも、御堂君に私と話さないで って言ったのも、奈緒なんだよね。

奈緒はもしかしたら私の気持ちに気づいていて、だから私と御堂君を話させないようにさせたのかしら

だとしたら、その奈緒が今さら私に何の話があるというのだろうか。

そんなことを悶々と考えながら歩いていたら、横断歩道の前で信号が変わるのを待っている人とぶつかってしまった。

ドンッ!

「あつ、ごめんなさい……」

相手の顔を見ずにペコペコ頭を下げ謝る私。そしたら。

「桜庭？」

聞き覚えのある声に顔を上げると、御堂君が目の前に立っていた。

「えっ、あれ、御堂君？」

まさか、ぶつかったのが御堂君だったなんて思いもよらなくて、びっくりしてしばらく見つめていると。

「もしかして、桜庭も中野に呼び出されたのか？」

「えっ、中野？」

突然、中野の名前が出てきてびっくり。

なんで、中野……？

私がぼかんとして首をかしげていると。

「あれ、違った？ 俺は、中野に同窓会の準備手伝えって呼び出されたんだけど……」

そう言って御堂君は眉間をもむように手で触る。

そーいえば、夕貴も同窓会の準備で午前中からたぬき亭に呼び出されたって、電話で言ってたな。

「あー、夕貴も呼び出されたって言ってたけど、もしかして、手伝い足りないのかな？ 私も行った方がいいかな？」

特に目的があつて早く来たわけでもないから、手伝いに行こうかな。

「あー、まあ、人手は多いに越したことはないと思うけど。大丈夫？」

何に対して大丈夫と聞かれているのか分からなくて首を傾げた私に、用事があつて早く来たんじゃないのか、つて御堂君が聞く。

「違つもの、ぶらぶらしようと思つて早く来ただけだから手伝つよ」

そう言つて、青に変わった信号を二人で渡り、たぬき亭に向かつて歩き出す。

しばらく歩いて、手に持ったままだった携帯に気づく。

あっ、カンナと奈緒に返信しないと

「ちよつとメールしてもいい？」

いちお、一緒に歩いている御堂君に聞いてみる。

「ああ」

御堂君が無表情で頷く。

さて、なんと返信しよう……

携帯画面を顔の前に掲げて、うーん、うーんと悩む。

とりあえず、カンナから返信しよう。

そう思つて、受信ボックスからカンナのメールを選んで“返信”を押す。

『To: 菊池 カンナ

subject: 了解!

本文: 10時ね。

そう、同窓会。いま御堂君に会って一緒に向かっていると
だよ』

そこまで打って

こんなこと書いちゃいけないなっと思直して、二行目を消しに
かかる。

ピッ、ピッ、ピッ……

考えながら両手で携帯を操作していたから歩くのが遅くなっちゃ
って、いつの間にか御堂君との差が開いている。数メートル先で立
ち止まった御堂君が振り向いて私に来るのを待っている。

小走りで御堂君に追いつくと、御堂君が私の手元を見て。

「メールって、こないだ一緒だった里見高のやつ……?」

不意にそんなことを聞くから、私は声が裏返ってしまっ。

「えっ……」

動揺して携帯のボタンを触っている手がぶれる。

ピッ。

「あっ!」

慌ててボタンを押したものだから、間違えて書きかけのメールを
送信してしまった……

「大丈夫？」

顔を真っ青にして携帯を見つめる私に、御堂君が眉根をよせて聞いてくる。

「だい、じょうぶ……」

なのかな　っ!？

「里見高のやつにメール？　もしかして　桜庭はそいつと付き合い
ってるの？」

まさか、御堂君にそんなこと聞かれると思ってなくて　びっく
り。

「メールは……そうだけど、付き合いではないよ」

電車でカンナと御堂君が会った時、付き合いしているって誤解され
てたらどうしようって思ったけど、御堂君からこの話題に触れてく
るなんて思いもしなかった。

もし誤解しているのなら、誤解を解きたい　そう思ったの。だ
からちゃんと言わなきゃ。

「里見高校の彼は、あっ、菊池君って言うんだけど。たまたま電車
で話して友達になっただんだよ」

ドキン、ドキンっ。

これでちゃんと、伝わってるかな

「……そう、なんだ」

そう言った御堂君を見上げると、涼やかな眼差しで前を見て、感情が読みとれなかった。

それから御堂君はずっと無言で歩いてて、あっという間にたぬき亭に着いてしまう。

だから私も、すっかり忘れていたの

カンナに間違っって書きかけのメールを送ったことも。

奈緒から来たメールのことも。

すっかり

第11話 ついにはじまった同窓会

ざわざわ

たぬき亭の店内は、大勢の人でにぎわっている。

同窓会はなんと全員集まることができ、久しぶりに会う友達同士、あちこちで話が盛り上がっている。

「譲子！」

飲み物のお代わりをしようと思って厨房に近づいた私に、夕貴と中野が近寄り声をかけてきた。

「準備、手伝ってくれてサンキューな」

中野が隣の夕貴の肩を組んで言う。

「もう、大輝が手伝いに声かけたヤツらぜんぜんつかまなくなってるさー、準備間に合わなかったらどうしようかと思ったよー」

夕貴が苦笑して中野のお腹をポカッとグーでなぐり、中野がうぐっと苦しそうにお腹を押さえる。

「うっん、中野はお店貸してくれたり色々準備してくれたんだもん。私で役に立ってよかったよ」

そう言った私に、夕貴と中野がニヤニヤと顔を見合わせぐっと詰

め寄る。

「でもまっさか 御堂と一緒にくるとはねえ」

夕貴の頬は完全に緩んでいてからかう気満々なのが分かって、私は一歩後ずさる。

「それは、偶然会っただけで……」

なんか、ヤな感じだな……

また一歩後ずさり、逃げ道を確保しようとする後ろを振り返った時、夕貴が私の腕を掴んで厨房の中に引っ張って行き、その後を中野が続く。

「ちよっ……夕貴っ？」

厨房の奥の壁に追い詰められ、その前に夕貴と中野が立つ。夕貴がドアアップで顔を近づけてきて。

「で、聞いたの？ 言ったの？」

わっ。

顔に唾がかかっているんだけど。

私は夕貴の口元に両手をあてて少し距離を取るように押す。

「な、なんの事？」

目をあわせず横を向いとぼけてみる。

「だーから、須藤さんの事！ 御堂に聞いたの？」

わわっ。

夕貴があまりに大きな声を出すものだから、私は慌てて夕貴の口をふさぐ。中野も慌てた様子で、夕貴の肩を揺さぶり。

「夕貴、声デケーよっ」

口到人差し指をあてて、しいーって言ったら……ボカツ。

今度は中野の頭を夕貴が殴った。

「いってーなあ……」

中野は頭を押さえながら、涙目になって抗議する。

「声がでかいのは、アンタよ！」

負けずに、夕貴が眉を吊り上げて言い返す。

この2人、似ているな！。ってか、2人とも声大きいよ。

他人事のようにそんなことを考えて、ため息をついていると。

ギョロツ 4つの目が同時にこっちを向く。

わわっ。

迫力っ !

「で、聞いたの？ 言ったの？」

夕貴がさつきとまったく同じことを言っただけど、もう突っ込む気力も失せて肩を落として言う。

「何も。聞いてないし、言っていない」

言っ..てないはたぶん “好き” っ..てことをだと判断して、とりあえず答えておく。

「なんでー、2人つきりだったんでしょー？ チャンスだったんじゃないのー？」

「そーだって。晃紘は、譲ちゃんのこと好きだと思っようよー」

中野が顔を2本の指で搔いて、うーんと視線を天井に巡らせる。

夕貴と中野と私と御堂君は3年間ずっと同じクラス。夕貴と中野は幼馴染で、中野と御堂君は同じ野球部だったから仲がいい。

私が御堂君を好きだということは誰にも言ったことがないけれどこの二人には、ずっと前からばれていたのかもしれない。

「それは、違うと思っけどなあ……」

私は小さな声で、中野の言葉を否定する。

だって、もしもよ

「もしも、御堂君が私の事を好きだったなら、奈緒と付き合ったりしないんじゃないかな」

そっ..て言っ..と。

「んー、そうかな？ そっ..とは限んないんじゃない？」

っ..つて、夕貴がめずらしく真面目な顔つきで言っ..つ。

私にはよく理解できないけど 好きな人がいても、他の人と付き合えるのかな？

御堂君はそんないい加減な人じゃないと思っ..つけど

「じゃあさ、晃宏に聞けないなら須藤に聞いてみれば？」

そう言った中野の言葉で、奈緒からメールが着てて返信をするのをすっかり忘れていたことに気づく。

「あつ、奈緒……」

奈緒に返信してないこと謝らないと　そう思って厨房を出て、店内に視線を巡らせて奈緒を探した。

店の隅の方で奈緒の後ろ姿を見つけて、声をかけようと傍まで近づいた時。

奈緒の近くを御堂君が通りかかって、奈緒が呼びとめた

「晃紘！」

御堂君が奈緒の方を振り向き、奈緒は可愛らしい笑みを浮かべた。そんな2人の姿を見た瞬間。

ツキンッ　胸が張り裂けそうに痛んで、思わず胸に手を当てて、細く深呼吸をする。

声をかけるタイミングを失って2人のすぐ側に呆然と立ち尽くした私と奈緒の視線がぶつかる。

「譲子？」

奈緒はぱつと顔をほころばせ、私の側に駆けよる。

私は金縛りにあったように身動きが取れなくて、奈緒が目の前に来た時、ぴくりと肩を震わせた。

「あつ、奈緒……ひさしぶり」

「久しぶり！ 譲子、元気だった？」

そう言つて奈緒が私の両手を掴んで握りしめる。

「うん。あの……メールの返信できなくてごめんね。同窓会の準備手伝つてて、返信するの忘れてて」

握られた手の感覚がない

視界がぐにやりと歪んで頭痛がする

私は、奈緒の瞳を見れなくて、視線を斜め下に落とす。

「うづん、いいのよ、気にしないで。高校はどう？ あつ、晃紘と同じ高校だったよね？」

言つて奈緒は御堂君を振り返る。

ちらつと視線を上げると、奈緒の後ろに立っている御堂君は眉間に皺を寄せて。

「ああ、今は同じクラスだよ」

つて。

「そうなんだ。じゃあ もう言つた？」

奈緒が少し笑つて御堂君を見つめ、御堂君はただ黙つたまま首を横に振る。

2人が私には分からないことを話していて、また胸が苦しくなつてきて、目をぎゅっと瞑る。

できれば奈緒に握られている手も振りほどきたかったけど、それはさすがに出来なくて

じりじりと痛む胸に眉根を寄せて、背筋がさあーっと冷たくなる。それでも、そんな様子を悟られてはいけないと思って、精一杯虚勢を張って、笑顔で顔を上げる。

「なに、なんの話？」

頑張って、そう聞いたのに

「あのね、私たち 別れたのよ」

奈緒の切り出した言葉に、私は言葉に詰まり息をのみ込む。

奈緒を見つめると握った私の手に視線を落としていて、その向こうに立っていた御堂君と目があっただけど、御堂君は 私から目をそらしたのっ。

「それは……聞いたけど……」

やっとの思いで私がそう言うと、ぱっと掴んでいた手を奈緒が離して、振り向いて御堂君の前に近づき、顔を覗き込むように見上げる。

「そうなんだ。言ったのね？」

「ああ」

御堂君は、私の時とは違ってまっすぐに奈緒の目を見て頷く。

そのことに胸がツキンと痛む。

それから奈緒はこう言ったの

「讓子　晃紘が本当に好きなのは、讓子なのよ」

囁くような奈緒の声は、がやがやと楽しそうに騒いでいる周りの声にかき消されそうだったけど、私の耳にはハッキリと聞こえたの。

御堂君が好きなのは　私？

その瞬間。

ダツと私は駆けだした。

店の入り口で夕貴にぶつかって、どうしたのって聞かれたけど、何も言えずにそのまま外に飛び出した。

第12話 まさかの告白

外に出ると、さあーっと夏の風が吹き髪を揺らす。まだ19時前だから空はうつすらと明るく、東の空に向かってブルーのグラデーシオン。その空に、1つ2つ星が瞬く。

7月も終わりに近づいたけど、先週末た台風の影響で夜でもわりと涼しい風が吹いている。

店を飛び出した勢いそのまま走り、少し行ったところで立ち止まる。はあー、はあーと膝に手をつけて、肩であらい呼吸をする。

さつき 奈緒はなんて言った？

ッ と頭と胸が痛んでその場にしゃがみ込んだ。

タツ、タツ、タツ……

後ろから足音がして、月明かりで出来た人影が私のすぐ後ろで止まる。

その影が御堂君で、私を追いかけて来たんだって分かったけど、私はしゃがんだまま膝に顔を埋め込む。

「桜庭……」

さあーっと肌に優しい夜風が吹いて、木の葉がさやさやと揺れる。私は葉の音と一緒に御堂君の声を聞いていた。

「俺は、桜庭が好きだよ」

その言葉に、体がびくつと反応する。
それでも、顔を膝につけたまま黙っていた。

「中学の時　桜庭のことは仲のいい友達だと思ってた。だから、奈緒に告白された時も、ただ嬉しくて、それだけで付き合いたしたんだ」

そこで言葉を切った御堂君、沈黙がやけに長く感じられる。

「しばらくして、奈緒に他の女の子と仲良くしないでほしいって言われて、奈緒がそうしてほしくないならそうしようと思った。だけど、桜庭と話さなくなって寂しくて　毎日がつまらなくて。それでやっと、俺は桜庭の事が好きなんだって気づいた。奈緒には正直な気持ちを話して、年が明けた頃には別れた」

「うそ　っ」

私は思わず顔をあげて御堂君を仰ぎ見る。

「だって……卒業式でも御堂君と奈緒は仲良さそうにしてて」

卒業式、御堂君と奈緒が笑いあっているのを遠くから眺めている自分がいた。その時の事を思い出して、また胸がツキンと痛む。

私から3歩離れたところに立った御堂君と、しゃがんだままぐつと顔を上げた私の視線が絡み合う。

「奈緒とは、別れても今まで通り友達として接してほしいって言われたから。すぐに、桜庭には自分の気持ちを言おうと思った。でも、その頃は登校日もほとんどなくて、会えない日が続いてタイミングを逃して　高校が同じだって知った時も、せめて桜庭とは以前のような友達に戻りたいと思ってた」

うそ

私は涙ぐみながら首を横に振って弱々しい抗議の声を上げる。

「そんな……だって廊下ですれ違った時も目も合わせてくれなくて同じクラスになった時だってなんにも私、嫌われたのかと思ってた……」

「いつも、話しかけようと思った。けど、なんて声かけたらいいかわからなかった。だから、朝、駅で会った時はチャンスだと思った、桜庭も普通に話してくれたし。でも里見高のやつと一緒にいるのを見て焦った。もしかして付き合ってるのかって。それからずっと気になっててさっき友達だって聞いて、安心したんだ」

そこまで言って、視線を足元に落としていた御堂君が私を見る。瞳の奥に切なさを宿して、真剣な顔で言ったの。

「俺は、君が好きだ」

そう言った御堂君のきれいな瞳が一瞬、潤む。

「付き合ってほしい」

「わたしは……」

そこまで言って、言葉に詰まる。突然の告白に驚いて、頭の回転が鈍る。胸がジリジリ痛んで、顔をしかめる。

私は、どうしたいんだろう

なんて言えばいいのか分からなくて黙りこんでいると。

「答えは今じゃなくていい。俺だって自分の気持ちを伝えるのにこんな時間がかったんだ。だから桜庭も、ゆっくり考えてから答えを出してほしい」

御堂君がそう言ったのとタイミングよく夕貴がやってきて、その場の雰囲気とかお構いなしに私の腕を掴んで無理やり立たせると、右手を勢いよく振り上げて大声で叫んだ。

「さあー2次会に、いくぞー」

そう言って、掴んでいる私の腕を強引に引つ張ってたぬき亭の方へとずんずん歩きます。

すでにたぬき亭の前には、わらわらと同級生たちが出てきて、2次会に行くか行かないかを話していた。

1人2人と、2次会には行かないで帰る子たちが、別れを告げて去っていく。

そんな中、私はただひたすら御堂君の事を考えていた。

だから夕貴に手を引かれるまま2次会のカラオケへ行き、気が付いたら、船橋の中野の家の中。とつくに21時を過ぎていたのだから ビックリ！

第13話 禁断の遭遇

時計を見るとすでに21時20分で、たぬき亭での同窓会は19時を過ぎた頃に終わって、それから夕貴に連れられて2次会のカラオケに2時間くらい行って21時にはほとんどの同級生が帰っている中、中野とか夕貴とか高校生になってからもよく遊ぶメンバー数人で中野の家に押しかけて徹夜でゲームをするという流れになっていた。だけど、たぬき亭から中野の家まで来る間の私の記憶はおぼろげで

とりあえず家に連絡をしなきゃと思い鞆にしまっていた携帯を取り出し画面を開くと、自宅からの着信履歴がびっしりと画面を埋め尽くしている。

19時には同窓会が終わるから20時前には家に帰ってお母さんには言っておいたのを思い出して、顔からさあーっと血の気が引く。

電話ができる静かな場所を探し私は慌てて中野の部屋から1階に降りて玄関を出る。中野の家の前の細い道路を進み、大通りに面した隣の敷地にある駐車場に行き、家に電話をする。お母さんには遅くまで連絡しなくてすっごく怒られたけど、中野の家にいることを伝えて、ダメもとで泊ってもいいかと聞くと、もう夜も遅いから明日の朝にはちゃんと帰って来ることを約束させられて、泊りを許してもらえた。

中野は中学の同級生だからうちと中野の家までは30分もかからないで歩いて帰れるけど夜道は危険だとお母さんは言って、それに中学の頃にも何度か中野の家には皆で泊ったことがあるからわりとすんなりと外泊の許可が出たのだ。

はあー。

電話を切ってどつと安堵のため息をついて、大通りに背中を向けて駐車場のタイヤ止めに腰をおろす。

駐車場に停まっている車は少なく、私が座った位置からは中野の家が見える。

今日はいろんなことがあるすぎて、なんだか目眩がするよ。

考えないといけないことは一杯あるのに、胸が苦しくて頭が働かない。

駐車場でしばらくぼーっと座っていると。

ピロロン。

両手の中で握りしめていた携帯が鳴って、画面を見ると夕貴からの電話だった。

「はい」

『もしもし、譲子？ いまどこにいるのー？ もしかして帰っちゃったの！？』

受話器からは夕貴の声以外に男子の笑い声が混じっていて聞きとりづらい。

「あつ、今、外で家に電話してただけだから」

『なんだー、急にいなくなるから心配したよー』

「ごめーん、もうちょっとしたら戻るから心配しないで」

そう言って電話を切る。

再び大きなため息をついて、足の上に肘をついてその上に顔を乗せ、ためき亭での事を思い出す。

私……御堂君に好きって言われたんだよね。

付き合って って言われたんだよね、なんだか現実感がないな。

中学の頃、好きだった御堂君に、告白されちゃったんだよ……

私。

あの時の御堂君の真剣な顔を思い出すと、切なくて、なんでか涙が溢れてきて視界が滲み、胸がドキドキしてくる。

どうしたらいいんだろう

まさか告白されるとは思ってもみなくて。

御堂君の事は好きだったけど、けど

そう、もう過去形　なんだよね。好きだったけど、2年間話さなかったのに今更付き合うとか考えられないよ。

じゃあ、断るの？

そう思った時、中野の家から出てきた御堂君の後ろ姿が見える。

あっ、御堂君だ。どうしたんだろう

そう考えただけで、胸が切なく締め付けられる。

御堂君は首を動かして辺りを見回し、振り返ったその視線と目が合う。

私を見る

ドキンっ、ドキンっ。

御堂君に見つめられて鼓動が速くなる。

私はまだこんなに御堂君にドキドキするのに　断るの？

そんな考えが頭をよぎる。

御堂君は振り返った格好のまましばらく私を見つめ、それから踵を返してゆっくりと私に近づいてくる。私から2歩の距離を取って細い道を背に駐車場を囲むフェンスに寄りかかって立つ。

たったそれだけの行動がすごく長く感じて、私はその間ドキドキしっぱなしだった。

御堂君の服装は、細身の黒いパンツに紺と白のTシャツを2枚重ね着している。長い足をからめてフェンスに寄りかかる姿は、それだけで絵になるくらい綺麗で、見入ってしまう。

ああ、私　まだ御堂君に未練たらたら、そう思った。

「桜庭がないって三井が大騒ぎしてた」

優しい笑みを浮かべ、御堂君が横目で私を見る。

「さっき夕貴から電話があったよ。ちょっと家に電話してただけなんだ」

そう言っつて御堂君から視線をそらして、額にかかった髪を横に分けて耳にかけて地面を見つめる。しばらくの沈黙の後。

「俺も心配した。俺のせいで悩ませてるかと思って　心配した」

えっ……

ぱっと顔を上げると、御堂君と視線があう。御堂君の瞳の中に優しさで切なさのきらめいて、その顔があまりにも綺麗で胸に沁み入って、涙が出そうになる

「違うの、私は御堂君のことが　」

そう言った時。

「譲子さんっ！」

カンナの声がして、声のした大通りの方に振り返る。

見ると大通りの向こう側で、ガードレールに手をかけて身を乗り出したカンナがこっちを見ている。私の視線の先でカンナはガードレールを軽やかに飛び越え、道路を走る車をよけながらすごい勢いで駆けてきて、私の後ろに立つ。

はぁー、はぁーと肩で呼吸を整えながら額にじわりと浮かんだ汗を乱暴に腕で拭くと、私ではなくて横に立っている御堂君を　何かを強く思い定めたような真剣な表情で見つめた。

しばらく御堂君とカンナが無言で視線を交わした後、私を見降ろしてカンナが切羽詰まったような口調で言う。

「譲子さん、なんでこいつと？」

それなのに私は、突然目の前に現れたカンナに驚いて、間抜けなことを聞いてしまう。

「カンナこそ、どうしてここに？」

「俺の事はどうだっていいんだよ！ 今日はずっとコイツと会ったのか？」

いつもの穏やかなカンナからは想像も出来ない様な、苛立ちを露わにした乱暴な口調で問い詰めてくる。

カンナがあまりにも怖い形相で聞いてくるから背中に冷たい汗しみ、振り返った姿勢のまま私は驚きのあまりぽかんと口を開けてカンナを見上げた。

第14話　それぞれのキモチ

「それは一緒だったよ？　だって同窓会なんだから」

ぼかん　　としてしまったの。

カンナがあまりにも怖い顔で、あまりにも普通の事を聞いてくるから、私はなんでそんなことを聞かれたのか分からなくて首をかしげる。

「だけどメールで……っ」

その続きを言おうとして開いた口に手を当て、カンナは私から視線をそらして俯く。その直前、一瞬御堂君を見たことに気づいて、私はカンナから御堂君に視線を移す。

御堂君はカンナをまっすぐ見つめ、それからゆっくりとフェンスからつけていた背中を離し、歩きながら言う。

「俺がいない方がいいなら。先に部屋に戻ってる、ちゃんと戻ってこいよ」

前半はカンナに、後半は私に向かって御堂君が言い、中野の家に歩いて行ってしまった。

しばらくの沈黙の後。

「あ　　っ」

急に大きな声をだしたカンナがその場にしゃがみこむみ、頭をわしゃわしゃつと掻きむしって、大きなため息をつく。

私は訳が分からなくておろおろとすることしかできない。

カンナになんて声をかけたらいいかも分からなくて、でも、落ち込んでいる様子のカンナを放っておけなくて、タイヤ止めから腰を浮かせてカンナのすぐ側にしゃがみ顔を覗き込む。

「……なんで、あんなメール送ったんだよ」

ぽつんとカンナが掠れた声で言う。顔を隠したまま、右手だけを動かして私の服の裾をちょんつと引っ張りながら。

「えっ、メール……？」

首をかしげて手に持っていた携帯に視線を向け、あっと思いつく。カンナに書きかけのメールを間違えて送っちゃっていたことを私はあわてて携帯を開いて送信ボックスの一番上にあるカンナへ送ったメールを確認すると。

『To: 菊池 カンナ』

subject: 了解！

本文: 10時ね。

そう、同窓会。いま御堂君に会って』

会って の書きかけでメールが送られていた。

カンナはこのメールを見て、私と御堂君が同窓会以外でも会っている って勘違いしたの？

ぶっ

「あははっ」

私は思わず声を上げて笑っちゃった。だって、みんなみんな、勘違いだらけなんだもん。世の中、勘違いで成り立っているのかしら。

笑いすぎて涙目になっている私を、今度はカンナがぼかんと見つめている。

一通り笑いが収まってから手の甲で涙をぬぐい、苦笑する。

「ごめん……なんかおかしくなっちゃって」

申し訳なさそうに眉根を下げた私を、カンナがじーっと見ている。

「えつとね、メールは書きかけで間違えて送っちゃって。同窓会の前に買い物でもしようと思って少し早く行ったら偶然御堂君に会ってね、同窓会の準備の手伝いに行くっていうから一緒にお店に行っただけなの」

言いながら首を傾げて、カンナの表情を伺う。

「今も、同窓会の後に中野　　っていうのも中学の同級生なんだけど、中野の家でゲームするって来てて、家に連絡するために外に出てただけで」

カンナは私が話すのを静かに聞いている。

それから　　はぁーっとため息をついて、膝の前で抱えていた両腕を前に垂らして。

「そっか」

って素っ気ない声でそれだけ言うの。

「心配した？」

私が笑って聞くと、カンナが苦笑して首を触る。

「うん……譲子さんとあいつが付き合っちゃうかと思った」

澄んだ瞳の中に甘いきらめきがあって、うっとりするような艶っぽい顔で見つめられて

きゅんっ、と胸が痛む。

私はその時感じた胸の痛みに、カンナに気付かれないようにははっと乾いた笑いを出す。

それからカンナと少しだけ話す。カンナも今日は昼過ぎから友達と会っていて、そのまま友達の家 高校の友達の家がこの近くらしい に行くことになって、その途中に私を見かけて思わず声をかけたということ。

「そろそろ行かないと、友達、待たせてるから」

そう言ってカンナが立ち、私も立ちあがる。

「明日、どうしよつか？」

「えっ、明日……？」

私なきよとんとして聞き返すと。

「デートー！」

頬を膨らませているカンナを私が目を丸くして見つめると、ニヤ

ツと悪戯っ子のような笑みを浮かべ。

「約束したでしょ？」

そう言っつて小首を傾げて、私の顔を覗きこんでくる。

あつ、そつか。カンナと明日一緒に出かける約束していたんだつた。

「俺も譲子さんも友達の家泊まるなら、明日のデートは来週に延期しようか？俺はそのまま朝合流しても平気だけど、譲子さんは疲れちゃわないかな？」

そう言っつて私の事を心配してくれるカンナの優しさが伝わって、胸がほかほかとする。

「うーんつと……朝には家に一度帰ってくるようにお母さんに言われてるから、朝そのまま合流は無理かな」

「じゃ、やっぱ来週にしようか？俺は予定大丈夫だけど、譲子さんはどう？」

「平気だよ」

その時、カンナの携帯が鳴る。カンナは携帯を鞆から出して、画面を眉根を寄せて見る。

「じゃ、詳しいことはメールで。そろそろ行かないと。またメールするから」

そう言っつて手を振ったカンナは、携帯を耳にあて。

「今から行く」

友達からの電話に答えて、もう一度振り返って私に手を振ると駆けて行ってしまった。

私は手を振り返して、カンナの後ろ姿が見えなくなってから中野の家へと戻る。

部屋に戻ると、男子達はゲームに白熱していて、その様子を見て夕貴はお腹を抱えて笑っている。私が戻ってきた事に気づいた夕貴が隣に座り、耳打ちで。

「御堂も外に行つてたみたいだけど、なに話したの？」

そう言つて興味津々に瞳を輝かせてきたけど、同じ部屋の中に御堂君がいることに気を使つてくれたのか、曖昧に答えた私に対してしつこく追及してくることはなかった。

夕貴にはいっぱい心配かけて相談にも乗ってもらつたけど、御堂君本人に返事をしていないのに他の人にべらべら話すのはどうかと思つて今度ちゃんと話と言つたら、夕貴がめずらしく真面目な顔をして頷くから驚いてしまった。

そう　ちゃんと御堂君に返事をしないと。

第15話 のびのびになった・・・デート

「今日、いいお天気になってよかったね！」

遊園地について、私はにこりと笑って言う。

私の今日の格好は、淡い緑系のチェックや花柄の生地が縫い合わされた胸元がゴムの切り返しになっている膝より少し短め丈で肩ひもタイプのチェニツクに、七分丈の黒のレギンスを合わせ、上にレース編みのボレロを羽織っている。手に持っているのは大きめの籠バックで、周りはレースで縁取りされピンクの大きな花のコサージュが1つ付いている。

髪の毛もいつもは下ろしているだけだけど、今日は編み込んでサイドで結んでいる。

いつもより、念入りに支度してきたつもりだ。

「うん、まあ、そうなんだけ……」

それなのにカンナは不機嫌そうな声で言いそこで言葉を切って、眉間をぎゅっと寄せ後ろを振り向く。

「なんで、こいつがいるんだ？」

私とカンナが並んで歩く後ろ　そこには御堂君、それから中野と夕貴が立っていた。

今日、7月31日は私とカンナののびのびになっていたデートの

日。先週の日曜日に出かける約束だったけど、前の日に2人と友達の家泊ったからをデートの日を1週間延期した。

少し遠出して電車で1時間半、県外の遊園地に来ているのだけどなぜか御堂君と中野と夕貴が一緒なんだよね。

あの日

中野の家でゲームして皆で騒いで徹夜して。

夕貴と中野は最後までゲームして起きてて私もそれを見ていたからずつと起きていたんだけど、他の男子は部屋でごろごろと寝ちゃって御堂君も壁に寄りかかって俯いていたから寝てるんだと思っていた。

話したいことはあつたけど寝てるならまた今度でいいかな、そう思って静かに夕貴と中野に帰ることを告げて部屋を出たら、御堂君が追いかけてきて。

「俺も帰るから、途中まで一緒に行こう」

そう言ったのは、私に気を使わせない為だったのかもしれない。

私と御堂君は朝の静かな道をしばらく黙って歩き、私は覚悟を決めて気持ちを伝えることにした。

「あのね……私も中学の時ずっと御堂君のことが好きだったよ。でも、今は　って聞かれると、正直わからないの」

私は自分の曖昧さが恥ずかしくて、無意識に口を触る。

「だから、また友達から仲良くしてもらえると嬉しいな」

そんなことはずうずうしいお願いだとは分かっている。だけどそれが私の気持ちだったから。

横に並んで歩いている私と御堂君はお互いまっすぐと前に視線向けていたから、私の我が儘に御堂君がどんな表情をしていたのかは分からなかったけど。

「桜庭がそう言うなら、それでいいよ」

そう言った御堂君の声は優しく、胸に沁み入る。
それから

「友達からよろしく」

くるっと私の方を見て御堂君が手を差し出してきたから 私は躊躇わずにその手を握る。すると。

ぐい っと、急に御堂君の側に引き寄せられてバランスを崩した私を御堂君の胸が受け止めて、背中に腕が回される。

あまりの近さに、ドキンっドキンって心臓が飛び出しそうな程、鼓動が速くなる。

「また俺の事を好きだって思わせてみせるよ」

ふわりと首を折って、私の耳元で囁いた御堂君の声は魅惑的で私が突然の出来事にまごついて見上げると、うっとりするような甘い顔で笑う。

そんな顔でそんなことを言うんだもの。私は自分でも分かるくらいかあーっと顔が赤くなるのを感じて、どうしていいか分からなくなってしまうた。

「俺は、桜庭が遊園地に行くっていうから、一緒に来たただけだけだ？」

しれっと悪びれずに御堂君がカンナに言う。

「なっ……今日は俺と譲子さんのデートなんだけど！ ついてくるな！」

カンナが眉を吊り上げて御堂君に食ってかかる。そんな2人を中野がまあまあと言って宥めている。

私という時のカンナは大人っぽく感じるけど、御堂君といるとカンナが1つ年下って実感するっていうか、御堂君が大人っぽいつていうか そんなことを考えて、私は苦笑する。

「ね、御堂君はいいとして、なんで夕貴たちが来てるの？」

カンナ達が歩く後ろで、私の横をゆったりとした歩調で歩く夕貴に聞く。

遊園地に行くことを御堂君が知っているのはこの間会った時に、流れでその話題になったからなんだけど、なんで夕貴と中野が知っているの？

っていうか、なんで付いてきたの？

私が不思議そうに首をかしげていると。

「おもしろそうだったから！」

夕貴がにやっと笑って言う。

「えっ、そんな理由……？」

呆気にとられている私を置いて、夕貴は前にいる中野達のところまで駆けていく。

「最初は絶叫系でしょ〜」

そう言って中野の腕を掴みアトラクションに向かってずんずん歩き出すから、私は慌ててみんなの後を追いかけた。

なんだかんだで、5人仲良く遊園地を満喫して、やっぱりカナナはすぐに誰とでも仲良くなれちゃうんだなってしみじみ思った。

一通りアトラクションに乗ってから、夕貴と中野はお土産を見ると言って売店に行ってしまう、私はベンチに座って待っている。

はぁーっと大きなため息をついて、カナナが右隣に腰掛ける。

「疲れた？ ごめんね。カナナは2人で出かけたと言ってたのに、なんかみんなついてきちゃって……」

膝の上に乗せた籠バックに視線を落としながら、もごもごと言い訳する。

「御堂さんのこと 譲子さんが誘ったわけじゃ、ないよね？」

カンナがこっちをじいーっと見つめるから、その視線に見入ってしまう。

「違うよ……」

息が止まりそうなほど綺麗なカンナの瞳にまっすぐ見つめられて、目がそらせなかった。

カンナが体を私の方に向ける。

ぎゅっ

大きな右手がバックを掴む私の手を上から包みこむように掴み、左手で額に落ちた髪を耳に駆けてくれる。

それからゆっくりと唇を開き、何か言おうとしたの。

でも、その瞬間。

今度は左側からぐいっと腕を引かれてびっくりして仰ぎ見ると、目の前に端正で彫の深い御堂君の顔。

きゃっ、美形のドアップは迫力だわ。

「桜庭、はい」

ピンク色のソフトクリームを私の左手に持たせる御堂君。

「ストロベリー、好きだったろ」

そう言った声はなんとも艶っぽくてドキマギしてしまっ。

「あっ、ありがとう」

お礼を言って受け取ると。

「どづいたしまして」

御堂君はうつとりするような甘い顔で笑う。吹いた風にさらさらの黒髪が揺れ、太陽の光をきらきらと反射して眩しい。

うつ……

御堂君ってこんなによく笑う人だったかしら……

ステキすぎて、胸がドキドキしてくるよお。

私は自分の心臓の音が聞こえてしまわないか心配しながら、誤魔化すようにソフトクリームにかじりついた。

閑話 電話（前書き）

同窓会翌日、7月24日の話です。

閑話 電話

ふあ……

自室のベッドのふちに腰かけた私は、大きなあくびが出て手でおさえる。格好はパジャマ、寝ぐせで髪の毛はぼさぼさだと思ふ。目もしょぼしょぼして焦点が合わない。

久しぶりに中野の家で徹夜して、朝の6時過ぎに家に帰ってきてシャワーを浴びて寝て、さっき起きたとこ。

いまはもうお昼前か。4時間くらいしか寝てないけど、部屋が明るくて寝ていられなくなつて。

ううーんつと両手を思いっきり上にのばして伸びをして、体を起こす。

今日も出かける予定だったけど、その予定は延期になって、さてどうしようかと考えていると……

ピロロン。

携帯が鳴つて、見ると奈緒からの電話だった。

ピロロン、ピロロン。

鳴り続ける電話。

昨日、同窓会で会った奈緒とは、たぬき亭で話している途中に私が駆けだして行ってそのままだった……

電話に出るのに戸惑うけれど、出ないわけにはいかななくて、通話ボタンを押して携帯を耳にあてる。

「はい」

当たり前だけど、電話に出ると受話器の向こうから奈緒の声が聞こえる。

『譲子？』

「うん。どうしたの奈緒？」

昨日のことで話があるんだとは分かっていたけど、そう聞いてしまっ
まう。

『メールで話したいことがあるって言うてたでしょ。昨日はあんな
ことになっちゃって……ちゃんと話せなかったから』

……しばらくの沈黙。

『晃紘から聞いたかな、私達のこと』

「うん……聞いたよ」

私達の事 って言われると胸がツキンと痛んだけど、昨日と違
って、ここから逃げ出したいような辛い痛みではなかった。

『私が 譲子も晃紘のことが好きだって気づいたのは、晃紘と付
き合い始めて少したった頃だったの。晃紘が譲子の事好きだって気
づいたのもその時』

私は、奈緒が話すのを静かに聞き。

『中学3年の時、譲子とも晃紘とも初めて同じクラスになって。席
が近かった譲子とはすぐに仲良くなったよね。初めて晃紘を見た時、
かっこいいなって思った。一目ぼれだったのよ。』

よく、譲子と晃紘が一緒に話してて、それで私も晃紘と話さよう
になって話しても楽しい人なんだなって思ったから、告白して付き
合い始めたんだけど 晃紘は、私と2人の時はぜんぜん話さない

しほとんど笑ったりしないの』

奈緒が自虐的な苦笑を漏らす。

『あれっ？ って思った。譲子といる時と違うな、もしかして……
つて。今考えたらばかみたいよね。譲子も晃紘もお互い好きだった
からあんなに仲良かったのに、気付かないなんて。晃紘は譲子の前
でだけ、たくさん話すしよく笑ってた。

それで私 譲子に晃紘を取られなくて、晃紘に譲子と話さ
ないでっってお願ひしたの。晃紘は優しいから分かったって言ってく
れたけど、それからずっと寂しそうにしてた……あんなこと言っ
て、本当に後悔してる。

もつと早く別れてれば、譲子と晃紘がこんなにすれ違うこともな
かったのに。私のせいで2人の仲が壊れたんだって、ずっと責任感
じてた。でも、なかなか言い出せなくて……』

そこで言葉を切った奈緒の声が震えて嗚咽が電話越しに聞こえる。

『じゅめんね』

奈緒が震える声で最後にそう言った。
だから

「ううん。私もあの時ちゃんと自分の気持ちを言えなかったから。
ちゃんと伝えていたら違ったかもしれない……けど」

奈緒がすべて悪いとは思っていなかったから。

「もういいの。だって2年も前の事だしね」

私は笑って、そう言うことが出来た。

閑話 電話（後書き）

閑話を3つ挟んで第3章です。

閑話 デート前夜革命

夏休みが始まって1週間が経つ。

私は午前中は部活へ行き、お昼ご飯を食べに一度家に帰ってきてから、午後は市の図書館に夏休みの宿題をやりに行く、それが夏休みの恒例になっている。

その日も市の図書館の談話室に何冊か本を持ち込んで読みつつ、夏休みの宿題をしていた。

トン、トン。

肩をたたかれて振り向くと、そこに御堂君がいた。私はiPodから延びるイヤホンを片方外す。

「隣、いい?」

そう聞かれて頷く。

御堂君は隣の椅子を引いて私の横に座ると、鞆からノートや参考書、筆記用具を出して、黙って勉強を始めた。

だから私も、イヤホンをつけ直してやりかけの問題集をまた解き始めたの。

問題集をきりのいいところまでやって、ふうーと一呼吸して問題集を閉じる。

ふっと隣を見ると、御堂君が片肘を机について、こっちをじーと見てて目が合う。

「終わった?」

慌ててイヤホンを外して御堂君の机を見ると、すでに問題をやり終えたのか、参考書などは閉じられて綺麗に脇に片付けられていた。

「うん。今日はここまでで終わりにしようと思って」

御堂君は私の勉強が終わるのを待ってたようで、そう言うと小声で聞いてきた。

「桜庭は、よく図書館来るの？」

「夏休みになってから、平日はだいたい来てるかな。御堂君もいつも来てるの？」

「いや、俺は調べ物があつて来たんだ」

「そうなんだ」

「桜庭、中学の時も学校の図書室によく行ってたよな」

御堂君が思い出したように言って、ふっと笑う。

「よく覚えてるね……そんなこと」

私はちよつと恥ずかしくなって言う。

「ああ、覚えてるよ」

懐かしそうに言って、うっとりするような甘い笑みを浮かべる。きゅんっと、その言葉が胸に沁み込む。

「また……図書館来ようかな」

そう言って、ぐうーんと両手を上に向けて座ったまま背伸びをす

る御堂君。

「まだ調べ物があるの？」

私が首をかしげて聞くと。

「いや。図書館に来て、また桜庭に会えるなら、来てもいいかなと思つて」

くすつと笑つてそんなことを言うものだから、ドキンつて私の胸が大きく跳ねて、自分でも分かるくらいかぁーっと一気に顔が赤くなる。

御堂君はそんな私を涼しげな瞳で斜めに見て、ふつと笑つたの。

それから本当に、御堂君は毎日図書館にやつてきた。

私が勉強していると声はかけずに隣に座つて、読書したり勉強したりして、私がりりのいいところまで終わるのを待つて、図書館で少し話してから一緒に帰るのが定番になっていた。

「図書館なんて滅多に来ないけど、涼しいし、いいな」

図書館からの帰り道、御堂君が感慨深げに言う。

「だよ、私も図書館好き。なんか落ち着くんだ」

くすつと笑つて、私も頷いた。その時。

ピロロン。

携帯が鳴って、画面をみるとカンナからの電話だった。隣を歩く御堂君は私を見る。

「電話？」

「うん」

「どうぞ」

そう言うから、私は通話ボタンを押して電話に出る。

「もしもし。うん、今大丈夫だよ。31日の8時半に船橋駅のシャポー口改札の前ね。うん、うん。くすくす、大丈夫、分かってるよ」

そう言っつて、私は電話を切る。

携帯を鞆にしまうと、御堂君が前を見たまま聞いてくる。

「もしかして 菊池？」

「えっ？」

私はドキンつとする。まさか御堂君の口からカンナの名前が出てくるとは思わなかったから。

それに、今の会話で分かっちゃうなんて……

「菊池と、日曜出かけるの？」

そう聞かれたら隠すわけにもいなくて。ってか、隠す必要もないと思っただけ。

「うん。実は、同窓会の次の日に遊ぶ約束してたんだけど、私は中野の家で徹夜して菊池君も友達の家泊って遊んでたから、予定を

ずらして今週の日曜日に横浜に行くことにしたの

「そう……」

そう言った御堂君を仰ぎ見ると、涼しげな瞳が、一瞬いらだたしげに光ったように見えて、びっくりして見つめていると、御堂君ははっとしたように顔をそむける。

「俺も、一緒に行つていいかな？」

振り返つた御堂君が魅惑的な甘い声で言つて私をじいーつと見るから。

「えっ……と……」

私は言葉に詰まつてしまつて俯く。すると。
くすつ。

「冗談だよ」

御堂君が無邪気な笑顔を見せる。そんな顔を見るのはすごく久しぶり過ぎて、びっくりして振り仰ぐと、息が止まりそうなほど綺麗な瞳と視線が合う。

「じゃ、俺、こっちだから」

そう言つて御堂君は、片手をあげて分かれ道を曲がって行つてしまったの。

私は、その場に呆然と立ち止まって、しばらく御堂君の後ろ姿に見入ってしまう。

御堂君があんな顔で私を見るから、信じられないくらい胸がドキ

ドキしてる。

うー、緊張した。まったく、なんで御堂君はやたらに色っぽいのかしら。そして、そんな色っぽい目で見つめて、うっとりするような甘い声で喋るのかしら。

私はなんだか分からないけど、どっと疲れてしまって、肩を落とすため息をつき、とぼとぼと歩きだして家路に着いた。だけど。

御堂君に翻弄される日々は始まったばかりだということに、私は全く気づいていなかった。

そうして、2日後。

カナナと待ち合わせた船橋駅の改札前に立つカナナの横にはなぜか御堂君と、そして中野と夕貴もいて

カナナが望んでいたデートは、デートとは言えない形で終わったのだった。

7月29日、土曜日の夕方、大輝に借りていた漫画を返しに家に行く。

大輝と私の家は同じ町内で幼稚園の頃からの幼馴染で、大輝は一人っ子だからおばさんは私の事を娘のように可愛がってくれて、大輝の家には自分の家のように出入りしている。

その日も、チャイムも鳴らさずに玄関を開ける。

「お邪魔しまーす」

つと言っても、この時間、家には大輝とおばあちゃんしかいない。大輝にはさつき家に行くことをメールしてあるから、そのまま家に上がり、大輝の部屋のある2階に行く。

「大輝、漫画返しに来たよー」

言いながらドアを開けて部屋に入ると大輝はいなくて、ベッドの横に腰かけて漫画を読んでる御堂と視線が合う。

「御堂……」

「よっ」

御堂は軽く手を上げて、また視線を漫画に戻しながら言う。

「あっ、中野は便所行ってる」

あー、だからいないのか。

御堂とは中学3年間ずっとクラスが同じで、わりとよくつるんでる。でも、仲がいいかと言われると、微妙だ。

一緒にいても、私と御堂はあんまり会話をしない。っていうか、御堂が無口なんだ。私が何か話しかけても「ああ」とか「そう」とか、そんな返事しかしないから話が続かない。

気まずい雰囲気にならなくて、漫画だけ置いて帰ろうとしたら大輝が戻ってきて、私の好きそうな新作のゲームを買ったからやっていけばって誘われる。

私と大輝がゲームをやっている間、御堂はずっと漫画を読んでいて、時々視線を上げて、大輝にゲームのアドバイスをする。

ゲームが面白くてすっかり日も暮れて、私がそろそろ帰ると言った時。

「じゃあ、俺も」

御堂がそう言って立ち上がり、読んでいた漫画を大輝の部屋の本棚に戻す。

「えっ、晃紘も帰るのか？ 泊ってけばいいのに……」

急に一人になると思った大輝が、しゅんと寂しそうに顔を伏せる。

「あー、また今度な。明日は大事な用事があるから今日は帰るわ」

私には無愛想にしか聞こえない御堂の言葉の中に、大輝はなにかに関心に惹かれたものがあるらしく、瞳を輝かせてばつと御堂を振り返る。

「えっ、大事な用事って何だよ？ もしかして譲ちゃんとかける

とか？」

その言葉に、私はぴくりと耳を動かす。

無口で無表情な御堂だけど、譲子の前でだけは、見たこともないような笑顔を見せたり、よく喋ることを私は知っている。

たぶん、御堂は譲子の事が好きなんじゃないか。私はそう感じてた。大輝もその事には気づいているみたいで、でも、私も大輝もそのことには今まであえて触れてこなかった。それは、御堂は譲子じゃなくて他の女子と中学の時付き合っていたからだ。

だけど同窓会の時、譲子と御堂と須藤さんが話してる声が少し聞こえて、二人が別れたこと、御堂がまだ譲子を好きなことを聞いてしまった。

譲子も御堂を好きな気持ちがあるみたいで悩んでいて、同窓会の後どうなったのかはまだ聞いていないけど、譲子と御堂の関係が微妙に動き始めていることに気づいていた。

「そう。桜庭が遊園地に行くからついて行こうと思って」

「そっか、2人でデートなのか……」

そう言った大輝が、ん？ と違和感に気づく。

「あれ？ 譲ちゃんが遊園地に行くからついて行く？ 一緒に行くんじゃないって？」

私も同じ疑問を持って、じいーっと御堂を見つめる。

御堂はまったく表情を変えずに、こくんと頷く。

「桜庭は里見高のやつとデートだって言うからついて行って 邪

魔しようかな、と思ってる」

本気で邪魔するつもりではないことは分かってたけど、そう言った御堂の瞳が鋭い光を宿らせて光った気がした。

譲子に対して　本気モードだということが伝わってくる。

大輝は「そんなことしていいのかよ」ってあたふたとしているのに、私の顔はにやっと緩んでいる。

「なになに、楽しそうじゃん！ 私も遊園地行きたいなあ」

「夕貴、なに言ってるんだよ……っ」

大輝がおろおろとして御堂を見つめると。

「いいんじゃない？　ついて行っても」

しれっと言って、部屋を出て行ってしまった。

その後ろ姿をぼーっと眺めていた私と大輝の目の前でもう一度扉が開き、御堂の声だけが聞こえる。

「8時半に船橋駅のシャポー口改札前」

私と大輝は顔を見合わせ、ぷつと吹き出す。

マジなんだ　そう思った。御堂が譲子に本気でアタックしている。譲子のデートの集合時間をわざわざ言いに戻ってくるなんて、無表情だったけど、本当はかなり切羽詰まっているのかもしれない。そう思うと御堂が可愛く思えてしまう。

「どうすんの、夕貴？」

「どうするって、行くに決まってるじゃん」

私は頬を緩めてにやつと大輝に笑いかけた。

御堂と譲子の恋を見届けたいって言うのもあるし、あの御堂一筋だった譲子がデートする相手にも興味があった。

譲子　そんな相手がいるなんて、私聞いてないぞお。

そんな訳で翌日、待ち合わせの時間よりも20分早く船橋駅に大輝と一緒にいくと、改札の前の柱の横に寄りかかっている男子に目を引かれる。

黒いスニーカー、水色に近いブルーケミカルの細身のジーンズ、ワンピースの白いシャツに黒いベストを合わせつつと整ったスタイルはモデルのようで、顔は中性的でどちらかといえば可愛らしい印象だった。

まさか、そのおしゃれ男子が譲子のデートの相手とは思わず、まじまじと観察してしまった。

譲子が駅に着く数分前に御堂が現れ、おしゃれ男子の表情が曇る。御堂はおしゃれ男子の近くまで進むと、御堂の方が背が高く見下ろすように見つめて横に立った。

その直後に現れた譲子はおしゃれ男子を見つけると、ぱっと顔を輝かせて。

「カナナ、お待たせ」

手を振りながら駆けてきたんだけど、横に立つ御堂に気づいて大きく目を見開き、おしゃれ男子を見つめる。

「行こうか」

おしゃれ男子はそう言っつて、譲子の無言の視線を無視して改札に向かう。その後ろを譲子、それから御堂と大輝と私が続く。

つかず離れずの距離を保つて後をついてくる私達を譲子はちらちらと視線を向ける。

たぶん、駅で会つたのは偶然？ とかつて考えていたんじゃないだろうか。でもさすがに武蔵小杉で乗り換えた時は、偶然じゃないと気付いた様子だった。

遊園地についてはからは、私達が後をついてきたと知つたおしゃれ男子がふてくされていたけれど、なんだかんだ5人で仲良く遊んだそう思っていたのは、たぶん譲子だけだと思う。

アトラクションに乗るたび、おしゃれ男子、もといカンナ君遊園地に着いてから自己紹介された と御堂が譲子の隣を廻つて、視線でバトルツてる。

もちろん譲子はそんなことに気づいていない様子。

一通りアトラクションを乗りつくして、大輝と土産を見に行つて帰ってきたら、そこには緊迫した空気がビシビシ伝つてる。

ベンチに座つてソフトクリームを夢中で頬張っている譲子の頭上で、カンナ君と御堂がお互いをじいーつと見ている、というか睨んでる？

カンナ君は不機嫌そうに眉根を寄せて威圧的に。

御堂は涼しげで、だけど挑戦的な瞳で。

もちろん間に挟まれている譲子はその視線には全く気付かずソフトクリームを頬張っている。

近づいていいものか、少し離れたところで立ち止まった私の横で大輝がぼつりと漏らす。

「すげー、虎と竜の睨み合いみたいだな」

その言葉に私は笑いを堪えられなくてぷつと吹き出し、虎と竜と
兔が同時に視線を上げて私を見たのだった。

閑話 竜虎図 <夕貴side> (後書き)

改訂前の作品では書けなかったエピソードです。

ちなみに中野君、改訂版ではフルネームで登場しています。

中野^{なかの}大輝^{だいき}、第6話の夕貴のメールの部分で下の名前が出ています。
気づいてくれたかな……？

次話からは第3章 海編です。

第16話 海へ

8月3日、午後から本八幡で沙世ちゃんと会っていた。

駅から少し離れた場所にある今は青葉の生い茂る桜並木に面した喫茶店のテラスで、ランチを食べていると鞆の中で携帯が鳴る。

メールかと思って放っておくと、ピロロン、ピロロン、と鳴り続ける着信音に電話だと気づいて慌てて鞆に手を入れて携帯を取り出す。

画面の表示は夕貴からの電話。

どうしたのだろうと思いつながら通話ボタンを押して、携帯を耳にあてる。

「もしもし」

『あつ、譲子？ 今、大丈夫？』

隣に座る沙世ちゃんに視線を向けると、ランチに夢中だったから私は頷く。

「うん、どうしたの？」

『あのさ、来週の11日から13日って暇？ 暇だったら、一緒に別荘に行かない？ 海もすぐ側にあるんだよ』

受話器の向こうからつきつきとした夕貴の声が聞こえる。

「えっ、別荘！？ 海……！？」

私のその驚いた声に沙世ちゃんが顔を上げ、椅子を近づけてすぐ

横に座り、携帯の裏にぴたりと耳を寄せて話を盗み聞く。

『叔父さんが伊豆に別荘持つてるんだけど、ここ数年使ってなかったから埃だらけらしいの。で、9月に会社で使うことになったから大掃除するらしいんだけど、掃除を手伝ったら泊めてくれるって言うの。だから一緒に行かない？』

夕貴の声を聞いて、沙世ちゃんが手帳を取り出して、なにか書きつける。

11、12日は部活があるけど、休むことはできる。夕貴と一緒に別荘に行くのは楽しそうだし　　なにより海に行けるのが魅力的

「んー、たぶん行けると思うけど、いちお親に大丈夫か聞いてみないと」

沙世ちゃんが、ずっと私の前に手帳を差し出す。そこには。

『海！？　別荘！？　私も行きたい………』

最後には懇願の絵文字が書かれ、瞳を潤ませて私を見ている沙世ちゃん。

沙世ちゃんは、去年の学祭に来た夕貴と会っていて面識がある。

『了解。返事はメールでいいから、なるべく早めをお願いね、じやっ』

「あっ、待って……っ」

早くも話をまとめて電話を切ろうとしている夕貴を慌てて止める。

「今、沙世ちゃんと一緒にいてね、沙世ちゃんも誘っていいかな？」

『おー、大歓迎だよ。こつちも……中野とか、まあ他にも何人が誘う予定だから。詳しい事はメールでまたするね。じゃね』

「ねっね、夕貴ちゃんはなんて？」

電話を切って携帯を閉まった私を、沙世ちゃんが期待の眼差しで見つめてくる。

「大歓迎だつて」

「やったあー！」

本当に嬉しそうな声で沙世ちゃんが叫んで、胸の前でガッツポーズする。

「夕貴ちゃんの他には誰が行くの？」

「んー、夕貴と、中学の同期の中野達を誘うって言ってたから中学のメンバーかな……」

私が誰が来るのか予想していると。

「ふーん。あつ、例のカンナ君も呼んじゃえば？」

沙世ちゃんがそんなことを言う。

いきなりカンナの名前が出て心の中ではかなり動揺していたけど、平静を装ってつれない声を出す。

「残念でした、カンナは平日は夏休みでも部活だから無理だと思つよ。それに勝手に人数増やせないし、夕貴に聞いてみないと」

「じゃあ、聞いてみれば？」

しれっとした顔で言われ、うっと言葉に詰まる。

「夕貴ちゃんに私から電話しようか？」

言つと同時に鞆から携帯を取り出して、電話帳を開いて今にも夕貴に電話しそうな勢이었다から、私は慌てて沙世ちゃんを止める。

「分かった、電話するから……」

で、夕貴に人数が増えてもいいか確認したらすんなりと了承を得た。

「じゃ、次はカンナ君に電話だね」

そう言われてドキッと胸が跳ねる。

男の子と電話で話すのって、なんか緊張するんだよね。カンナとは何回か電話したことあるけど、いつもカンナからかかってくる電話で私からかけたことはない。

「あつ、ほら、今部活中だろうからメールにするよ」

電話をどうにか避けようと思ってそう言ったんだけど。

「さすがに今はお昼休憩なんじゃない？」

そう言つて沙世ちゃんが携帯で時間を確認して、私にも見えるように顔の前に見せる。

確かに今は12時50分、休憩中の確率は高い。

「電話して繋がらなかったらメールにすればいいんだよ」

のほほんと言う沙世ちゃんに促されて、渋々、電話帳機能からカンナの電話番号を選んで、発信ボタンを押す。

プルルルル……

その音が鳴り響くたびに、出ないで！ って願ったんだけど、数度目の呼び出し音の途中で、爽やかな声が耳から脳内に響く。

『はい、カンナです』

「……………っ」

声を聞いたただけなのに胸がキュンっとして、私は思わず息を飲み込む。

『……………譲子さん？』

私から電話をかけたのに一言も話さないで黙り込んでいたから、カンナの気遣わしげな声が聞こえる。

「あっ……………カンナ？」

『くすっ。繋がってた』

そう言って笑う声が、胸に沁み入る。

『譲子さんから電話してくるなんて珍しいね、どうしたの？』

「あのね……………」

ちらっと横目で沙世ちゃんを見ると、好奇心丸出しの瞳で見つめ口元はにたにたとしていて 私はぎゅっと目を瞑って早口で一気

に言い切る。

「夕貴から海に行こうって誘われてカンナもどうかなって思ったんだけど、日にちが平日だからカンナは無理かなあって」

ゴメン

そうカンナの言葉が帰ってくると思っていたら。

「ああ、別荘に行くって話だね、夕貴さんから聞いてるよ。ちょうど11日から部活休みだから行けるって返事したけど」

「えっ」

「えっ……って、その確認の電話だと思ってたけど違ったの？ もしかして 俺が行くこと聞いてなかった？」

夕貴めえ

ふつつつと湧いてくる怒りを押さえて、平静を装って答える。

「うん、聞いてなかった。そっか……行けるのか……」

特に深い意味はなく、そう呟いた私に。

「あれ？ あんまり嬉しそうじゃないね、譲子さん。俺と一緒にじゃない方がいい？」

しゅんつとした寂しげな声で言われ、私は焦る。

「えっ、そんなことないよ？ ちょっと驚いただけ」

「そっ？ 俺は譲子さんと一緒に海に行けるの楽しみだよ」

艶めいた響きで言ったカンナに、私は思わず携帯を耳から離す。

「ちなみに……夕貴にはいつ誘われたの？」

『あーっと、昨日かな？　なんか男手がたくさん欲しいから友達も誘って来てって言われたよ』

なっ、私より先にカンナを誘ってたの

！？

第17話 全力乙女モード

驚きで言葉を失っていると、受話器の向かう側が騒がしくなる。

『ごめん譲子さん。そろそろ部活始まるから切るね』

「あつ、うん。部活頑張ってる」

電話を切った私に、すかさず沙世ちゃんが聞いてくる。

「カナナ君、行けるって？」

まだ呆然としたまま、答える。

「うん。すでに夕貴から誘われてて、カナナの友達も来るんだって」「そうなんだ、楽しみだね。あつ、会った時はちゃんと私にカナナ君、紹介してね」

すでにランチを食べ終えてうきうきとして話す沙世ちゃんをしり目に、私は黙々と食べかけのランチを再開する。

隣に座った沙世ちゃんは、手帳のスケジュール欄に「別荘」「海」と書いて後ろにハートマークを書きこむ。

私が食べ終わったのを見計らって、素早く荷物を手に持つ。

もう行くの？ まだお茶飲んでないのに　　そう言おうとしたら。

「さあーお腹もいっぱいになったし、海に向けて水着を買いに行こう
お

「えっ、水着ならあるよ？」

きよとんと首を傾げて言った私に、じろりと沙世ちゃんの冷たい視線が向けられる。

「譲の言ってる水着って スクール水着でしょ？」

「スクール水着じゃないし……」

反論しようとして口を開いた私を制して、沙世ちゃんが早口に捲し立てる。

「競泳水着だって同じ！ もっと可愛い水着着なきゃダメだよ！」

ぷりぷり頬を膨らませて言う沙世ちゃん。

「あんな可愛げのない水着着てる女子は譲だけだよ！ 授業はまだいいけど 海だよ！ 男の子と一緒にだよ！？ ちよっとはお洒落しないと！ 乙女でしょっ！」

とかつて最後は意味不明な事を叫ぶ。

沙世ちゃんが言っているのは 体育の授業での話。

うちの学校は自主性を重んじる自由な校風で校則も緩い。夏の約1カ月間だけ体育の授業が水泳になるんだけど、屋外プールだし天候次第では変更にもなる。だから学校指定の水着はなくて、各自用意した水着でいいのだ。露出が激しすぎるのはダメだけど、普通にビキニとか着ている女子もいる。

だけど私は水泳部員。競泳水着を2着持っているし中学の時のスクール水着もある。遊泳用の可愛いのは持ってなくて、でもそれが普通だったから授業の時も私は競泳水着を着ていた。

だから海もそれでいいかなって思っていたのに……

「つてか、沙世ちゃんはちゃんと可愛い水着持ってるんだから買う必要ないんじゃない？」

確か沙世ちゃんは授業の時、白地にカラフルなドット模様のビキニを着ていた気がする。

「んー、あれは一昨年買ったやつだし、そろそろ新しい水着がほしいと思ってたところなんだよね」

「えー、一昨年ならまだ着れるよ？」

どうにか水着を買いに行かずに済む理由を探して、私が渋ると。

「ダメダメ、一昨年のなんて流行遅れだよ。新しいの買わなきゃっ

！！」

「わっ、私は買わないからねっ」

横を向いて言った私の声を無視し、沙世ちゃんが私を無理やり水着売り場へと引っ張っていった。

「そんなに張りきる必要ないのに……」

そう呟いた声は、沙世ちゃんには届いてなかった。

「わー、もう8月だけど結構種類が残ってるね。こんなにあると迷っちゃうな」

きらきらと瞳を輝かせて沙世ちゃんが水着の並んでいる通路を歩き、その後ろを私はうなだれてついて行く。

私はついてきただけ。買わないんだから。

ぶつぶつと言って自分に言い聞かせる。

そりゃあさ、フリルや花柄、カラフルな水着は可愛いと思う私だって女の子だもの。

でも必要かって言われたら、微妙なんだよね……

今持っている水着で十分だと思っ反面で、可愛い水着が羨ましいと思っっている。

そんなことを考えながら、鞆の中に入っっている財布に視線を落とす。

それに現実問題……水着を买买うお金なんてないし。

「あつ、これ可愛いっ！」

沙世ちゃんの言葉に、思わず水着に伸ばしていた手をさつと引っこめる。

ピンクのボーダーの生地に黒地にドット柄のふちとりボンが付いたビキニを手を持って振り返えつた沙世ちゃんは、焦つた様子の私を見て眉間に皺を刻む。

「買つちゃえばいいじゃない」

「あつ……あるからいらない」

「可愛いと思って見てたじゃん」

「見てただけだよ」

「手伸ばしてたじゃんっ！」

うっ……っ

唇をぎゅつと噛みしめて横を向いた私に、沙世ちゃんがわざとらしくくらい大きな溜息をついて腰に手を当て仁王立ちする。

「譲、自分に正直になりなさい！可愛い水着着たいと思っでしょ！思っでしょ！？」

すごい迫力で言っつて、沙世ちゃんが詰め寄ってくる。

私は一步後ずさり……観念して首をうなだれて、さっき手を伸ばそうとしたラベンダー色の小花模様の生地のパジャマとワンピースの3点セットになった水着を取る。

「か……わいいと思うよ、私だつてこんな水着着れたらいいなつて思うよ。でも、私バイトもしてないし、水着買う余裕なんてないんだ。ただでさえ海に行くお金だつてどうにかしないとイケないのに……」

小さな声で言つた私に、沙世ちゃんが平然とした顔で首を傾げて

「じゃ、バイトすれば？」

「えっ……」

「夏休みだつたら結構短期とか日払いのバイトあるよ？ 私も長期の休みの時はそうゆうバイトと掛け持ちするし」

そっか……バイトすればいいのか。

「バイトなんて、ぜんぜん思いつかなかつた」

「あはは、譲、真面目だもんね。あつ、よかつたら私が登録してる短期のバイト紹介しようか？ 時給は安めだけど日払いもしてもらえるよ？」

「うーん……とりあえず自分で探してみる」

「そっ？」

「うん。ありがと」

「じゃっ、改めて水着を試着しに行こう！」

沙世ちゃんの切り替えの速さについていけなくてあたふたとして

いる私を試着室へと引つ張っていく。

「ちょっと沙世ちゃん？ 私、今日は買えないんだけどっ」

「買う予定なんでしょ？ だったら、試着して取り置きしておいてもらいなよ！」

そう言って強引に水着の取り置きをお願いすることになってしまった。

うう、16,800円……頑張って稼がねばっ！

帰りに駅でバイト情報誌買って帰ろうっつと。

第18話 初体験

「あつ、これ良さそう」

1人で呟いて、バイト情報誌に赤まるをつける。

『日払い、倉庫内仕分作業、高校生可、時給900円、船橋競馬場より送迎有』

近いし、日払いで条件いいし、ここがいいかな。

よっし、電話しよう！

1週間がっちり働けばなんとかなるかな。まあ、ダメだったらお母さんに立て替えてもらおうかな。

あつ……

思い立って雑誌をベッドの横に広げたまま置き、リビングに降りて行く。

「お母さん」

台所で夕飯の準備をしているお母さんに話しかける。

「なあに？」

「あのね……、2泊3日で夕貴達と旅行に行ってもいいかな？」
「旅行？」

野菜を刻んでいるお母さんは振り向かずに戻す。

「うっうん。夕貴のおじさんが別荘を貸してくれるんだって」

「女の子だけで行くの？ そのおじさんも一緒なの？」

「えっと、女子だけだよ……おじさんとおばさんが一緒って言うって
たと思う」

本当は男子も一緒だし中野達と一緒にだからどこからかばれてしま
うのではないかって言うのも少しは考えたけど、なんとなく、男の
子も一緒とは言えなくて。

「ふーん……」

緊張して声が震えていたのがばれていたかもしれない。

何か含んだようにお母さんが言う。

「あとね、別荘の近くに海があるんだって。だから水着買いたいん
だけど」

「ん？ 新しい競泳水着買うの？」

お母さんが普通に“競泳水着”を買うことを前提に聞き返すから、
私は苦笑しながら答える。

「遊泳用……」

「あら、讓子がめずらしいわね。まあ、もう高校生なんだしそうい
う水着を持ってもいい年頃ね」

くすつと笑みを漏らしてお母さんが振り返り手をタオルで拭って
から、棚の横にかけている鞆からお財布を取り出す。

「水着いくらのなの？ 1万で足りる？ 足りない分はお小遣いでな
んとかなさい」

1万円札を差し出すお母さんを見返す。

「水着、自分で買おうと思うの。だからバイトしたいんだけど……
いいかな？」

そう言った私を、じいーっとお母さんの瞳が見つめる。

さつき嘘をついたのが後ろめたくて、それを見透かされそうで、
冷やりと背中に冷たい汗が伝う。

「いい社会勉強になるからいいわよ。正し、きちんとしたバイトに
しなさい、怪しいのはダメよ。それから、これは海に行く時の旅費
に使いなさい。バイト始めたからってすぐにはお給料もらえないで
しょ？」

お母さんの優しさが胸に沁みて、なんだか泣きそうになる。

「ありがとう」

お金を受け取った私を見てくすりと微笑み、台所に戻っていくお
母さん。

「……あっ、それからお父さんにも海に行くのことは自分から話し
ておくのよ。ちゃんと、女の子だけって言うのよ、心配するから」

そう言ってふふつと笑った声が聞こえて、ドキリとする。

わー……お母さんには嘘ついてたのばれてるっ!？

私は何も言えずにはたばたと足音を響かせて2階に駆けのぼり
自室に飛び込む。

おっ……お母さん、恐るべしっ。

動悸の激しい胸を押さえて、扉に背中をつけたまま座りこむ。

それからバイト先に電話、翌日の部活後に面接に行ってその場ですぐに採用されてその日から働くことになった。

平日は部活が終わってから、土日はまる1日バイトを入れて1週間がむしやらに働いた。

仕事内容は、ネット通販の会社の倉庫での仕分け作業。注文のあった商品を取ってきて袋や箱に詰める。単純作業だけど商品がたくさんあるから倉庫の中で迷子になりかけたりもしたけど、職場の人が親切に教えてくれて、私の初めてのバイトは有意義なものになった。

第19話　うちよせる波

バスに揺られてしばらくすると、窓越しに一面の青がとびこんでくる。太陽の光が水面に反射してキラキラと眩しくて、私は目を細める。

私はバスの一番後ろ、右の窓側の席に座っている。その隣には

朝、待ち合わせの船橋駅に着くとそこには、カンナとカンナの友達らしき男の子が2人と夕貴と中野と沙世ちゃん、それから　御堂君がいて、私は眉根をピクリと動かして夕貴を見る。

私の視線に気が付いた夕貴はにやにやと頬を緩めてカンナと御堂君に視線を向け、それから私を見た。

夕貴からは、カンナが来ることも聞いていなかったのに　まあ、本人から聞いてて知ってはいたけど　御堂君も来るなんて、聞いてないっ！

ってか、なんかこの組み合わせはまずいんじゃないかな！？

そう思って焦っている私を尻目に、電車の時間だと言って夕貴が改札をくぐったのを先頭にぞろぞろと改札を通りホームへと駆けあがる。

夏休みといえど朝の電車はそれなりに混んでいて、でも学生がいない分は空いているのかもしれない。普段乗らない総武線に乗り、品川と熱海で乗り換えて普通電車で伊豆急下田を目指す。

電車に乗ってすぐに、初対面の人もあるから簡単に自己紹介をす

ることになる。

「三井 夕貴です。今日は集まってくれてありがとう！ 初日は別荘の掃除で終わると思うけど、次の日からは海に行けると思うから手伝いお願いね」

「中野 大輝です。高校2年です」

「御堂です。よろしく」

旅行の提案者の夕貴から順に挨拶を始める。

「桜庭 譲子です、よろしくお願いします。えっと、クラスメイトの沙世ちゃんです」

沙世ちゃんは夕貴とは会ったことあるけど中野とは初対面だからそう付けたして言う。

「南 沙世です。よろしくね」

沙世ちゃんは可愛い笑顔を浮かべて、カナナや友達の方に手を振る。

「菊池 カナナです、はじめまして。いつも譲子さんにはお世話になってます。こつちから河原かわはら、熊本くまもと。2人ともテニス部のメンバーで1年です。よろしく」

「河原です、よろしく」

「熊本です、よろしくね」

カナナが初対面なのは沙世ちゃんだけだから、前半は沙世ちゃんに向かって言い丁寧に頭を下げる。それから隣に立つ友達を紹介した。

河原君は色黒で眼鏡をかけていてインドア派という感じだけど、服の上からでも分かるほど体つきはがっしりとして筋肉がついている。

熊本君は明るい茶髪でノリが良いけど、ちょっと遊び人なかんじ。それからそれぞれが話し初めた時、沙世ちゃんが私の耳元でぼそっと囁いた。

「御堂君がいるなんてびっくり。譲とどういう関係？」

そっか、沙世ちゃんは私と御堂君が中学の同級生だって知らなかったんだ。

「中学が同じだったの。夕貴と中野と御堂君と私は中学3年間ずっと同じクラスだったんだよ」

「へー、だからこの旅行にも参加してるのね」

ずっとクラスが一緒だったイコール仲がいいと思ってくれたようで、納得したというように一人頷いた沙世ちゃんは、カンナと河原君と熊本君に話しかける。

御堂君が旅行に参加している理由　本当はそれだけが理由じゃないだろうけど、変に興味をもたれると説明が面倒だから沙世ちゃんには勘違いしておいてもらおう。

って　御堂君が旅行に参加しているのは私もいるからだなんて、自惚れすぎかな。

一人でそんなことを考え、顔が僅かに赤くなってしまった。

船橋から電車に乗ってしばらくした頃、沙世ちゃんと話している。

「譲子さん」

ふいにカンナに呼ばれて振り返ると、手招きされているから近寄る。

「なに？」

「ここ、空いたから座りなよ」

そう言っつて、カンナ達が立っている側の空いている席に私と沙世ちゃんを座らせてくれた。

「ありがとう」

「どういたしまして」

カンナのさりげない優しさはいつもの事だけど、なんか慣れなくて照れてしまう。そんな私をカンナは満面の笑みで見る。

隣に座った沙世ちゃんが、じいーとより目になって私を見つめ、それから目の前に立つカンナを見上げて突拍子もないことを言います。

「ねっ、カンナ君と譲子っつてホントは付き合ってるんでしょ？」

「まっ、またその話！？」

前に違っつて説明した後もよく聞かれて、そんなんじゃないっつて言ったのに、なんで今このタイミングで聞くかなあ！？

あまりにも直球で聞くものだから、私は焦ってしまう。だって、はつきり言われたわけではないけど、少なくともカンナが私の事好きなのは知ってるのに。そんなカンナの目の前で「友達」と言い切るのには勇気がいった。

目の前に立つカンナと熊本君と河原君だけでなく、少し離れたと

ころにいる夕貴と中野と御堂君もこつちを見ている。

私が言葉に詰まってしどろもどろとカンナを見上げると、カンナは爽やかな笑顔で言ったの。

「あはは、沙世さんストレートな質問ですね。まあ、俺はそういう関係になりたいと思ってるけど」

カンナはそこで一旦言葉を切り、ちらりと私と御堂君を見て言う。

「今はまだ友達です」

「ええ、付き合っちゃえばいいのに」

沙世ちゃんがにやにやした顔で間髪いれずに言い、横に座る私を肘でつつく。

「いつ、痛いからやめてよ、沙世ちゃん」と思っても反論できず。

「まあまあ、沙世ちゃん。そういうのはタイミングだから」

いつの間にか側に来ていた夕貴が人の良さそうな笑顔で言って助け舟を出してくれたんだっただけ。笑顔の裏で何か企んでそうだから怖い。

微妙にピリピリとした空気に、熊本君が話題を変えるように話を振る。

「沙世さん達は何か部活やってるんですか？」

「私はブラスバンド部だよ」

「私は美術部」

沙世ちゃんと夕貴が答えて話題が変わり、私はほうっと息をつい

た。

学生だから新幹線なんて乗るお金はないけど、鈍行で皆でわいわいやりながら行くのが旅行の醍醐味というか楽しくて、船橋駅から伊豆急下田駅までの4時間なんてあつという間で、電車を降りてからバスに乗り継ぐ。

中野、夕貴がバスに乗り、続いて乗った私。二人は一番後ろの座席の左側に座ったから私は右側の窓側に座る。後ろに沙世ちゃんがいると思つて振り返ると、そこには御堂君が立っについて。

「隣いいかな？」

そう聞かれたら頷くしかなくて、隣には御堂君。前の席に沙世ちゃんと熊本君、その左側の席にカナナと河原君が座る。通路側に座ったカナナが座る瞬間、ちらつとこつちを振り返った気がしたのは気のせいだろうか。

「晴れて、良かったね」

海に見入っていた私は、ぽつんと話しかけてきた御堂君をばつと振り仰ぐ。

「あつ、うん。ごめん……海に見入っていたよ」

隣に御堂君が座っているのも忘れて海に見とれていたのが恥ずか

しくて、私がえへへつと照れ笑いすると、御堂君が瞳を細めて窓の外の海に視線を向ける。

「好きだよね　海も」

「えっ!？」

なんだか感慨深げに言う御堂君の言葉にドキリとする。

「中2の時の臨海学校、桜庭すごいはいでたよね」

くすりと懐かしみの籠った瞳で微笑まれ、胸が急激に速くなる。

「やつ、やだなあ……ほんと、よく覚えてるね。恥ずかしいなあ」

照れた顔を隠すように前髪を触って俯く。

中学2年の臨海学校　海に来るのは初めてじゃなかったけど、もう何年も前の事で嬉しくて、自分でもはしゃいでいたのを覚えている。

はしゃぎすぎて緊張感が一杯いっぱいになって、遠泳で海の水を飲み込んでしまった友達を助けた時に足をつってしまって、溺れかけた友達を助けて溺れてしまった

それを助けてくれたのが御堂君で、その時、私は自分の気持ちが悪なんだって自覚した。御堂君を好きだっていう気持ち、友達としてではなく　男の子として好きなんだって気づいた。

私の中の大切な思い出を御堂君も同じように覚えていて、こうしてその時の話をする日が来るとは思ってもなくて、恥ずかしさと嬉しさで胸が苦しくなる。

第20話 3角関係

白浜海岸のバス停を降りてから10分ほど歩いた場所に夕貴の叔父さんの別荘があった。真っ白な壁にオレンジ色の瓦屋根の別荘だなんてもったいないほど大きくて綺麗な建物で、呆然と見上げてしまふ。

「叔父さんと叔母さんもう着いてるって言うから、さあ、中に入つて」

私以外の人達も、大掃除が必要だつて聞いていたからもつとぼろい建物を想像していたんだと思う。

アプローチの階段を登り玄関の中に入ると、広々とした吹き抜けのリビング、その外に広がるバルコニーからは海が一望でき絶景だった。

「わあーすごい……」

「みなさん、今日は遠いところからわざわざ来てくれてありがとう」

パタパタとスリッパの音を響かせて30代くらいの小柄な女性がお盆に冷えた麦茶の入ったグラスを持ってリビングに入ってくる。グラスの中の氷が溶けてカラコロンと涼しげな音を響かせている。

「若い諸君、よく来てくれた！ 我が別荘に歓迎するよ」

吹き抜けのリビングにある階段から降りてきた40歳くらいの男性が快活な笑顔で言う。頭にカラフルなバンダナを巻き紺色のエプ

ロンをつけている。

「叔父さん、お久しぶりです」

「ああ夕貴、久しぶりだね。しばらく見ない間に大きくなって」

夕貴が叔父さんと抱き合い、叔父さんが夕貴の頭の上に掌を当てて身長を比べてにかつと笑ってから、周りに立つ私達に視線を向けて、顎に手を当てながら頷く仕草をする。

「夕貴の友達はその女子は可愛いし、男の子は格好良い子ばかりだね。今日はわざわざ別荘の掃除を手伝いに来てくれてありがとう」

「いいえ、こちらこそお招きありがとうございます」

「素敵な別荘ですね」

「いやいや、そうだろう。9月の頭に会社の社員たちとする慰安旅行に使うかと思っただが、海外出張から帰って来たばかりで数年間使っていなかったからほりすがすごい。しかし私一人じゃこの広さは掃除しきれんしどうしようかと思ってたところに夕貴が友達を連れて手伝いに来てくれると言って、すごい助かったよ」

言って、叔父さんは叔母さんの肩を抱き、にこりと微笑む。

横に立っていた夕貴がこそっと私と沙世ちゃんに聞こえるように耳打ちする。

「叔母さんね、年末に赤ちゃんが生まれるの」

そう言っただけでちらつと叔母さんのお腹に視線を向ける夕貴。

だからか。どうして一人なんだろう。その疑問は妊娠中の奥さんは重たい物を運んだりする大掃除なんてできないからなんだ。

叔父さんは愛おしげに叔母さんと叔母さんのお腹に視線を向ける。

「私は掃除はあまり手伝えないけど、代わりにうんと美味しいご飯作るからね」

ふふふつと笑った叔母さんは10代くらいに見える。なんだか可愛らしい人だな。

「女の子達は2階の部屋の掃除とベッドメイクと布団をお願いしよう。窓は拭き終わったから床掃除を頼むよ。男の子達は1階の窓拭き、リビングの掃除、バルコニーの掃除を頼むよ。私は風呂掃除をするからね」

叔父さんは指示を出すと、腕まくりをしながら風呂場へと向かう。

「ダイニングは掃除し終わってるから、荷物はこっちに置いて頂戴」「はい」

「よしっ！ それでは大掃除に取り掛かろう！」

荷物をダイニングに運び、それぞれエプロンを身につけて準備が整うと、夕貴の号令と共に大掃除に取り掛かる。

私と夕貴と沙世ちゃんは2階に上がる。

「私も小さい頃に数回来ただけだから、すごい久しぶりだよ」

階段を上がりきると、リビングの吹き抜けを見下ろすようにコの字に廊下が伸び、それぞれ左右に扉が2つずつある。

「一番左が一番大きな部屋でその隣がトイレ、右は2つともベッドルーム」

夕貴がまずは2階の部屋を案内してくれて、左の部屋から掃除することにする。右の2つの部屋はベッドが2つあるのに対して、左の部屋はカーペットの床、窓辺に棚が2つ置かれているだけで広々としている。

「この部屋は親戚で来た時に子供が遊ぶ部屋だったんだ。だから他の部屋みたいにベッドはなくて、布団が確か、そのクローゼットの中にあると思う」

夕貴が説明してくれ、借りてきたはたきと掃除機と雑巾で隅から丁寧に掃除を始める。

初めのうちは黙々と作業をしていたんだけど30分くらいした頃に、沙世ちゃんが大きなため息をついて床に座りこむ。

「あーダメ、私こういう地味な作業って苦手なんだよね」

その言葉に私と夕貴は苦笑する。

「気持ちは分かる」

「私は好きだけどな、こういう単純作業」

「譲はそうだね。学校の掃除の時も一人黙々とやってるよね、マジ尊敬」

肩を落として言った沙世ちゃんはよいしょっと立ち上がり、手に持つてるはたきを紐の部分を持って振り回す。

「でもお、明日は海に入れるんだから今日は我慢して掃除する」
「沙世ちゃん、えらい！」

夕貴が口笛を吹きながら言う。

「でも、なんか話しながらじゃないと頑張れないよ。なんか話そうよっ」

沙世ちゃんが天井を仰ぎながら言って、棚の上部にはたきをかける。

そういえば、と思い出しずっと気になっていたことを聞く。

「夕貴、どうして御堂君とカナナを誘ったこと黙ってたの？」

まあ、カナナのことは知ってたけどさ。

私は沙世ちゃんが叩きをかけた部分を濡れ拭きと空拭きをしながら言う

「サプライズだよ！」

サプライズ？ いやがらせの間違いじゃなくて……？

「あれ、夕貴ちゃんはカナナ君と面識あるの？」

「あるよ、前に一緒に遊園地に行ったから、譲子達と」

「ええー、そうなんだ。って、譲、カナナ君とはなんでもないとか言っで、しっかりデートしてるんじゃない」

前半は夕貴の、後半は私の顔を見て沙世ちゃんが言う。

「だから、デートじゃないんだってばあ」

カナナはデートって言ってたけど、実際は御堂君や夕貴達がついてきてデートっぽくはなかったし。

「それより、どうやってカンナに連絡したの？ 連絡先知ってたの？」

「あー、遊園地行った時に教えてもらった、というか聞かれた」

「えっ？」

「『譲子さんと夕貴さんって仲良いんですね。また皆で一緒に出かけましょう』って言って。つまり私のアドレスが知りたかったんじゃないかって、御堂と譲子が二人で出かけるようなら教えて下さいってことでしょ」

にやっと嫌な笑みを浮かべて掃除機をかける夕貴。

なにそれ。どんだけ深読みなの……

「カンナはそんな子じゃないし、ってか」

そう言った私の声に被さって、沙世ちゃんの興味津々の声が響く。

「なになに、それどういうこと！？ 御堂君と譲が二人で出かけるって??？」

大好物を見つけた犬みたいに瞳を輝かせている沙世ちゃんと、実はねって言うてにたついていている夕貴をうんざりした顔で見つめる。

夕貴は沙世ちゃんに近づいて耳元で話すんだけど、もちろん私もその声は聞こえてて。

「実はね、御堂も譲子にラブなんだよこれが」

「つまり、3角関係ってことおー！？」

どこからどう、つまりに繋がるのか理解できなくて私は眉根を寄せて、余計な事を話した夕貴を睨む。

「譲子、人生初のモテ期ってことかしら。モテ期って人生で3回くるらしいよ」

そんなどうでもいいママ知識を披露して、鼻高々な夕貴。

「えー、あんなイケメン2人に好かれて、羨ましいなあ」

「もお、2人とも！勝手に人の話題で盛り上がらないでよね。カシナとも御堂君とも、なんでもないんだからっ！」

「まったくまあ、隠さなくてもいいんだから」

にやにやとからかうように言った夕貴と違い、沙世ちゃんがぼつんと漏らす。

「いいなあ……私も頑張ろっかな……」

「えっ？」

「えっ!?!」

ぼーっと焦点の定まらない目で宙を眺める沙世ちゃんを、私と夕貴が振り返って見つめた。

第21話　コバルトブルー

「私、熊本君、ねらっっちゃおうかな」

昨日の掃除の時、沙世ちゃんが僅かに頬を染めてそう言った。

「えっ、沙世ちゃん、熊本君の事好きなの？」

さんざん同じような質問を他人にされて辟易していたはずなのに、思わずそんなことを聞いてしまった自分の口に慌てて手を当てる。

沙世ちゃんは顎に人差し指を当てて首をかしげる。

「うーん、まだ好きってほどでもないけど。顔はタイプだし、バスの中で話した時、すごく楽しかったんだよね」

「いーじゃん、いーじゃん。夏だし、海だし、恋に盛り上がっていいんじゃないのお」

そう言った夕貴は、沙世ちゃん越しに私をじいーと見た。

伊豆2日目は午前中を掃除の続きをして、昼食後、海に行くことになっていた。

「昨日も思ったけど、叔母さん、料理上手だね」

「おいしい〜」

ほんとに美味しくて、ぱくぱく食べちゃって体重が増えそうで怖いくらい。

大掃除と言っても埃がすごいとかクモの巣がすごいとかそんなこととはなくて、その手伝いの代わりに別荘にタダで泊めてもらってこんなに美味しいご飯までご馳走して貰えるなんて、良くしてもらいすぎてるなあ。

「君達が手伝ってくれたおかげであつという間に掃除が終わって助かったよ。私と妻は午後から出かけるけど、好きに使ってくれていいからね。本当にありがとう」

昼食を食べ終わってから部屋に戻って、海に行く準備をする。

部屋割は1階の和室を叔父さんと叔母さんが使い、2階の左側の一番広い部屋が女子、右側の部屋を中野と御堂君、カンナと河原君と熊本君でそれぞれ使うことになった。

部屋の隅に置んだ布団が重ねて置かれ、中央にそれぞれが荷物を広げて水着に着替えだす。

夕貴と沙世ちゃんがさくさく着替える横で、私は鞆の中から水着の入った袋を取り出し、その中身を見てごくりと唾を飲み込み、身を強張らせる。

あー、この時が来てしまった……

なんだか沙世ちゃんにいいように丸めこまれて買ってしまったけど、いざ着るとなると恥ずかしょ……

これはもう、着るしかないよね　そう思っただけと袋の中に手をつ突っ込んだ時。

「なにしてるの、譲子？」

黒のボードーのビキニにすでに着替え終わった夕貴が後ろから覗きこんできて、すっとんきょうな声を上げてしまう。

「ひゃっ」

肩をびくりと震わせた瞬間、手に掴んでいた水着が袋から落ちる。

「何びつくりしてるの？」

「なっ、なんでもないよ。私もすぐに着替える」

棚の上に大きなスタンド鏡を置いて、熱心に化粧を直している沙世ちゃんが鏡越しに、んっ？ と眉根を寄せて振り返る。

「ちょっと、譲。まさか、その水着に着替える気!？」

「えっ、なに、譲子。競泳水着なの？」

眉をひそめる二人が見ている私の手元には、黒色の地にグレーと水色のラインが入っている競泳水着。

「えっと……」

「この間本八幡で見ていた花柄の水着は!？ 買わなかったの？」

驚きの声を上げながら沙世ちゃんは私に近づき、手元の袋を覗きこむ。

「あっ……なんだ、ちゃんと買ったんじゃない」

言いながら勝手に袋の中からラベンダー色の小花柄の水着を取り出す。

私はため息をつき、沙世ちゃんの手から水着を取り上げる。

「ちゃんとバイトして買ったよ……」

そうして、渋々、はじめての遊泳水着に着替え始めた。

1階のリビングに降りて行くとすでに男子は水着に着替え終わり、ソファアに腰かけたり床に座ったりして寛いでいた。

「おまたせ〜」

お化粧もバツチりに気合いの入った沙世ちゃんが片手を上げて言い、ぞろぞろと玄関に向かう。玄関を出て鍵を閉めた夕貴に、中野が脇から何かを取り出して言う。

「夕貴、叔父さんと叔母さんは出かけちゃったよ。これ、パラソルとレジャーシートとアイスボックス使っていて出して出してくれたよ」
「わっ、気がきく〜」

夕貴が持とうと手を伸ばすと、中野が俺が持つと言ってアイスボックスの紐を肩から下げ左手にパラソルを持とうとする。その手を遮り横にいた御堂君が手伝うと言ってパラソルを持って、海に向かつて坂を下りに始める。中野が空いた左手に、レジャーシートの入った袋と浮き輪を持とうと手を伸ばしたのを夕貴が遮り、その2つを持つ。

「これは私が持つよ」

そう言って歩きだし、中野が慌てて夕貴の横に並ぶ。

沙世ちゃんは早速、熊本君に話しかけて2人で並んで歩き、その後ろを河原君が歩く。

その光景をぼーっと眺めていた私を、カンナが下から顔を覗きこんでくる。

「譲子さんも行く?」

「あつ、うん」

カンナは青色ベースにパステルカラーのピンクと黄色の細ラインとネイビーの太ラインの可愛い可愛いチェック柄のサーフパンツをはいている。

「それ、荷物?」

私が肩にかけている袋を指さしてカンナが尋ねる。

「お財布とタオルと日焼け止めが入ってるの」
「持つよ」

そう言ってさりげない仕草で私の腕から鞆を取り、持ち手を持って肩に担ぐようにする。

「あつ、ありがとう」

「どういたしまして」

にこっと笑って、私の鞆を持ったカンナは半歩先を歩く。しばらく黙ったまま歩き、斜めに振り返ってじいーっと私の顔を見る。

「譲子さん、泳がないの?」

「えっ?」

「水着、着てないの？」

そんなことを聞くから、私ははたと視線を落として自分の格好を見る。私はグレーの長袖のパーカーを羽織り、その下にはラベンダー色の小花柄のスカートが揺れて見える。ビキニを着てその上に付属の水着地のワンピースとパーカーを羽織っているのだ。足元はビーチサンダル。

「ん？ 着てるよ。これ、水着」

どうしてそんなことを聞かれたのか分からなくて首をかしげると。

「あつ、なんだ、水着なのか……服なのかと思った」

ぼそつと言って、カンナが頬を染める。

そっか、服みたいに見えるのか。遊泳水着なんて初めて着るから、そんな風に見えていたなんて思いつきもしなかった。

「水着だよ。せつかく海に来たのに泳がないなんてもったいないもの」

「さすが譲子さん、水泳部だけあるね。電車の中で海が見えてきた時から、目が嬉しそうにキラキラしてたから」

いつのまにか横に並んで歩くカンナが上目使いに私を見る。
わっ

いつもそうやって見る、カンナの癖だっけ分かってても、子犬のような瞳を向けられてドギマギし始める。

私はなんだか視線を合わせていられなくて、ぱつと視線をそらして俯いた。

海岸に着くと、夏休み中ということもあって海岸は大勢の人で埋め尽くされていた。私達はレジャーシートを広げられる場所を探して歩き、空いている場所にシートを広げて大きなパラソルを立てる。今日は雲一つない晴天で、空の青と海の青とそのあいだの青がグラデーションになってとても綺麗だった。

シートを広げ終わって荷物を置くと、沙世ちゃんが元気に言う。

「さあー、海に行こー!!」

「でも、誰か、荷物番してないといけないね。交代ですか？」

って、冷静に夕貴が言う。

「あつ、私、日焼け止め塗りたいから、最初に荷物番するよ」

手を挙げて言う私を見て、カンナが口を開いて何か言おうとしたのだけだ。

「じゃあ、俺も残る」

そう言って御堂君がシートに腰を下ろす。

「晃紘、譲ちやんお願い」

って、中野。その隣に立つ夕貴はにやにやと私を見てから浮き輪を中野にはめて紐を引っ張って海に向かって歩き出す。

「御堂君、譲をお願いね。」

沙世ちゃんが意味深に言って手を振って海に向かう。

カンナは何か言いたそうにシートの側に立って私達を見ていたけど。

「俺らも行こうぜっ」

そう言った熊本君がカンナの肩を抱いて引っ張るように波打ち際に向かっていってしまった。

第22話 スカイブルー

parasolで出来た日陰の部分 御堂君から少し離れた場所に腰を下ろす。お尻だけをシートの上に乗せ足はサンダルを履いたまま、靴から日焼け止めを取り出して塗り始める。

水泳部の癖に今更、日焼けとか美白とか気にしているっていう訳じゃなくて、日に焼けて真っ黒になるんだったらまだましなんだよ……

私の場合、日焼けすると肌が真っ赤になって引くのにすごい時間がかかる。その間、肌はひりひり痛いし、お風呂なんて入れたものじゃない。だから、念入りに日焼け止めを塗って日焼けしないようにしないと悲惨な目に合うのだ。

顔は着替えの時に縫ったから、パーカーから出ている手の甲と首まわりを塗る。実はパーカーは日焼け防止のアイテムなんだよね。で、つい手の甲を塗り忘れがちになるんだけど、ここもすっかり塗ってないと焼けてしまっって手の甲だけ真っ赤……なんていう最悪の事態になってしまう。

手の甲を塗り終えて、パーカーのチャックを少し下げて首回りと鎖骨の辺りも塗る。

あと足だな。

そう思って、ビーチサンダルを脱いで足をシートの上に乗せて足の甲から上に向かって塗っていたんだけど、膝まで塗り終えてはっとする。

御堂君の前で、足に日焼け止め塗るってどうなのかしら

あんまり上の方は塗らない方がいいかな？

そんなことを考えて横目でちらっと御堂君に視線を向けると、御堂君は海の方に視線を向けていてほっと安堵の息を吐く。

よし、見てないならささっと塗っちゃおう！

私は慣れた手つきで日焼け止めクリームをチューブから取り出し手のひらで足に塗り広げる。

「そーいえば、御堂君ってバイトしてるって言ってたよね？ なんのバイトしてるの？」

日焼け止めを鞆に戻し、大判タオルを出して膝にかけながら聞く。

「ガソリンスタンド」

「へえー、そうなんだ。大変？」

「ん、まあ。今はもう慣れたけど」

「そのバイト長いの？」

「高1の時から」

「えっ、1年の時からバイトしてるの？ えらいね」

驚いた声をあげた私にふっと視線を向け、涼しげな目元に笑いを含んでる。

「桜庭はバイトしてないの？」

「今まではしてなかったんだけど、夏休みの間だけ短期のバイト始めたんだ」

「なんのバイト？」

今度は同じ質問を御堂君がしてくる。

「倉庫で商品の仕分け。同年代のバイトはほとんどいないけど、クーラー効いてるし快適だよ」

笑いながら言うと、御堂君が僅かに口角を上げる。

「そこ、重要だな。スタンドは夏場は辛いよ」

端正な顔にえくぼを作ってははっと笑う御堂君を見ると、胸がきゅーっとなる。

なんだか中学生の頃に帰ったように普通に御堂君と話して、普通に笑って　こんな風に戻れるなんて思ってなかったから嬉しすぎる。

やっぱりいいな、御堂君。いつもは大人っぽくて無口なのに、本当はよく喋るし笑った顔もすごく格好良いんだよね。

「えへへ」

嬉しすぎて可笑しな笑いを漏らした時、ふっと奈緒の言葉を思い出す。

『晃紘は譲子の前でだけ、たくさん話すしよく笑ってた』

私だけが知っている御堂君の姿

「夏休みの課題はもう終わった？」

「うん、ほとんど終わってるよ」

笑顔で答える裏で、逸る気持ちに戸惑っていた。

誤魔化すように視線を御堂君から足元に移した時に、シートのがく近くにカンナが立っているのを見つける。

「あっ、カンナ。どうしたの、1人？　忘れ物？」

「飲み物飲もうと思って」

カンナは大周りにシートをまわって御堂君の横にあるアイスボックスを開けて中から冷えたペットボトルを取り出して、「ごっきゅごっきゅ」と音を鳴らして半分ほど一気に飲んでしまう。

「もう海入った？ 冷たいのかな？」

聞きながら、カンナの足元が濡れていないことに気づいて首をかしげる。

「あの子……」

カンナが口を開いた時。

「海、冷たくて気持ちよかったよ。譲も入っておいでよ」

すでに海に入ってきたようで、体から水滴がしたたって涼しげな皆が戻ってきた。

「うん、ありがとう」

そう言っつて、何か言いかけていたカンナを見たんだけど、カンナは河原君と話していて、さっき何を言おうとしていたのか聞けなかった。

「譲子、水泳部だもんね、早く泳ぎたいでしょ？ 今度は私達が荷物番してるから行っておいで」

「あー、泳いだら喉乾いちゃった。私もちよつと休憩ー」

そう言つて、ペットボトルを持った沙世ちゃんが私の横のシートに座る。河原君と熊本君もそれぞれペットボトルを取り出して飲んでいる。

皆休憩するみたいだしと思い、私は御堂君を海へ誘う。

「御堂君、海、行く？」

「ああ」

皆の前では口数が急に少なくなる御堂君はそれだけ言つと立ち上がる。

私も足にかけていた大判タオルを畳んで鞆にしまつてから立つて御堂君の近くに行き、一緒に海に歩き始める。

その背後から、夕貴の声が聞こえて振り返る。

「カンナ君も海まだ入ってないんだから、一緒に行つてきなよ」

「えっ、でも悪いですよ」

首を触りながら言うカンナを見て、困っているみたいだつて分かる。

「いいから、いいから。荷物番にこんなに人数いらさないし」

夕貴に邪魔だというようにしつしと手で払われて、渋々立ち上がったカンナはまだ困つたように夕貴や河原君を見ているから。

「カンナも一緒に行こうよ」

思わず言っていた。

第23話 マリンブルー

波打ち際まで来て足先だけ水につかる。カラッとした空気、照りつける太陽の熱に、冷たい海の水が気持ちよくて早く海に入りたくてうずうずしてくる。

「もうちょっと海にはいるうか？」

私がそう言った時、ぐいっと後ろに腕を引かれる。

「もう少し体慣らしてからの方がいい。すぐに入ると危険だろ」

掴んでいた腕を離して、御堂君がちょっと意地悪な笑みを浮かべる。

中学2年の時、溺れそうになった事を言っているってすぐに悟って、かぁーっと顔が赤くなる。ぽんぽんっと誤魔化すように頬に手を当てて俯く。

「うん、そだね」

良かったー、今日は日焼け防止に沙世ちゃんに借りて少し化粧しているから、顔が赤くなつたの気づかれてないよね？

御堂君から少し離れるように波打ち際を歩くと、今度はぎゅっと後ろから両方の肩を抱き寄せられてビックリして後ろを振り向くと、カンナが立っていた。

「カンナ？」

そう聞く私に、にこつと笑ってから肩にかけてた手を離して砂浜の方を指さす。

「こころなしか、御堂君から離れた位置に押されたような……」

「ビーチバレー、してるみたいだね」

カンナの指先を見ると、シートの前で四人がビーチボールで遊んでいるのが見えた。沙世ちゃんと熊本君、夕貴と中野の2人ずつが左右に別れている。

河原君は1人、シートに座って本を読んでいる。

本好きの私でも、海に来てまでは本は読まないかな……いやいや、河原君とは気が合うかもしれない。

そんなことを考えていると。

「気になるの？ 河原のことが」

小首を傾げて覗きこんでくるカンナの瞳が妖しく光る。真剣な声でカンナがそんなことを聞くから、私は言葉に詰まる。

「ん……私と河原君って気が合うかもなあ……って考えてたの」「なんで？」

間髪いれずに問い返され、カンナが私との距離を一步詰める。

「えっと……あつ、それよりもさ、カンナは泳ぎ得意？」

無理やり話をそらしたのに気づいたカンナが不機嫌そうに眉根を寄せて唇を尖らせたけど、それ以上は追及してこなかった。

「んー、どうかな」

「じゃあ、泳いでみて」

そう言った私に、くすつと御堂君が笑う。

「菊池、俺と競争する？」

すぐ後ろに立っていた御堂君を振り仰ぐと、吸い込まれそうな程綺麗な瞳がそこにあってドキリとする。

「御堂さんは、泳ぎ得意なんですか？」

カンナがまっすぐに御堂君を見据えて尋ねる。

「普通」

そっけなく答える御堂君に、私は思わず突っ込んでしまう。

「普通なわけないじゃん。クラスで上位のタイムなんだから」

1学期の最後の体育の授業はクロールと背泳ぎの50メートルのタイム測定で、御堂君と一緒に泳いでいた他の男子をぐんつと引き離して、タイムはかなり上位だった。

それに、水泳の授業って先生はプールサイドで指示するだけで、実際に泳げない子に教えるのは水泳部員だったり泳げる生徒で、私はもちろん、御堂君も男子の指導役に選ばれていた。

「普通だろ」

その言葉がなんだか水泳部員を標準にして　　っっていう風に聞こ

えて苦笑する。

「まあ、俺も泳げないよ」

「だよ。カンナも泳ぎ得意そう！」

そうだろうと思ってたから顔を輝かせて言うと、くしゃっと髪を搔いて私を見たカンナの瞳が揺れている。

「なんで譲子さん、肯定するかな……」

「だって、男の子が海に来るくらいだから泳げるでしょ？」

勝手に持論を繰り広げ決め付けた私の肩に、御堂君が優しく手を置いて首を振る。

「その考えは間違いだな。中野はかなづちだろ」

「あつ、そっか……」

中野はほとんど泳げないけど海とかプールとか好きで、浮き輪があれば大丈夫だって言っていていつも浮き輪を持参してくる。

私は御堂君と顔を見合わせて苦笑してしまった。

それから3人で海に入って、足が着くか着かないかの深さのところで、波で遊んだり泳いだりした。

御堂君とカンナが競争するって言うから私も混ぜてほしいと言ったら、御堂君が眉根を寄せて。

「競争はなし」

って、そっけなく言って御堂君は海からあがっていつちやうし、カンナも首をかいて苦笑して。

「また今度ね。そろそろ戻ろうか」

って言うの。まあ、夕貴達に荷物番をお願いしていることも気になったから、海から上がって皆の所に戻ることにした。

夕方、別荘に戻ると叔父さんと叔母さんが戻ってきていてバルコニーでバーベキューの準備をしていた。

こういうのも夏ってカンジがして楽しい。

夕飯を食べ終わってからは中野の提案で花火をしようと言うことになって、海岸から少し歩いた所のコンビニに買出しに行くことになった。

「じゃー、買出し係きめるぞー」

中野の掛け声で輪になった私達は手を中央に出す。

「じゃんけん、ぽんっ!」

結果　御堂君とカンナの2人が負けて買出し係に決定。

「花火とペットボトルの飲み物」

「了解」

そう言って財布だけを持って出かけようとした御堂君とカンナに声をかける。

「あつ、待つて。私も買いたい物があるから一緒に行くよ」
「それなら一緒に買ってくるけど、何？」

御堂君にじいーっと見つめられて、口ごもる。

「えっと……やっぱり、頼むのは悪いから一緒に行くよ」

「譲子さん来たら、ジャンケンして買出し係決めた意味ないよ？」

カナナが可愛い笑顔で首を傾げて下から顔を覗きこんでくるけど、ぱつと視線をそらして早口に言う。

「それは皆の物で、私が欲しい物は個人的なものだから」

これ以上追及されたくなくて、さっさと鞆を手に玄関に向かった。

コンビニに向かう間、カナナは私のすぐ横、くつつきそうな程近くを歩き、御堂君は数歩先を歩く。

「なんだか今日のカナナの様子は少し変な気がするんだよね。」

「うーん……上手く言えないんだけど、なんかいつもの二割増し紳士度が上がってキラキラしているのに、そうかと思うと時々空気がピリピリしているような感じ？」

「どうしたんだろ？」

「そんなことを考えていたらあつという間にコンビニに着いてしまふ。コンビニに入ってから。」

「わっ、私はこっちだから。御堂君とカナナは買出しよろしくねっ」

引きつった笑顔で言い、ささっと2人から離れて生活雑貨が置かれている棚に行く。2人が奥のペットボトルの冷蔵庫の方に行った

のを確認してから、棚の中段に置かれている四角いビニール袋を手
に持つ。

さすがに……生理用品は男の子に買ってきてなんて頼めないよ。
ってか、買っているところ見られるのもなんか恥ずかしいつ。

夕方戻った時、なんかお腹が痛いなって思ったら生理になってい
た。予定よりも早かったからナプキンなんて持ってなくて、とりあ
えず沙世ちゃんが念のために持ってきていたのを1つ貰ったんだけ
ど、夜の分と明日の分を買おうと思ってコンビニに来たの。

ああ、せっかく海に来たのに生理になるなんてついてないな。

今日は海に入れたんだし、明日は我慢するしかないかな……

私は手に持ったナプキンを隠すようにし、そそくさとレジに向か
う。レジは大学生くらいの男性と40代くらいのおばさんと2つ空
いていたから、迷わずにおばさんのレジに行き、会計を済ませる。
黒い空けないビニールに入れてからコンビニのビニールに入れてく
れたから、なんだか安心して。

それを鞆にしまい奥にいる2人の所に向かうと、ちょうどレジに
向かうところで、会計を待って一緒に外に出る。

もう8月も半ばで夜でも蒸しつとするけど、潮風が肌をかすめて
気持ちいい。

「あつ、見て。今、魚が跳ねたよ」

海岸沿いの道路から海の方を指して言うと、御堂君が渋い声を出
す。

「暗くて何も見えない」

「俺も見えないなあ。譲子さん、視力いいの？」

なんだかからかう様にカンナに笑われて、歩道から護岸ブロック
に近づく。

護岸ブロックは歩道から海岸の間の10メートル程を緩い傾斜で敷き詰められている。少しいこぼしているけれど、昼間にも通った所で私はあまり足元を見ないで進む。

「よく見て」

そう言って振り返った時、足が滑って後ろに転ぶ。

きゃーっ！

ゴンッ！！

護岸ブロックに当たって鈍い音が響いたのだけど、体はどこも痛くない……

慌てて後ろを振り向くと、私の下敷きになって御堂君が倒れていた。

「御堂君っ！？」

転ぶ寸前に御堂君が後ろから庇ってくれて、私が怪我しなかった代わりに御堂君は護岸ブロックに体を強く打ちつけたみたいだった。

「御堂君、御堂君っ！」

目を瞑って呼んでも反応しない御堂君に、焦りばかりが募って声が濁く。

「譲子さん、落ち着いて。御堂さん、大丈夫ですか？」

御堂君を揺さぶる私の手を優しくカンナが包みこみ、御堂君に声をかける。

「ん……」

眉間に皺を寄せて目を開いた御堂君は左手で体を支えて上半身を起す。

「御堂君、大丈夫……？」

御堂君が気づいたことに安堵して、涙が溢れてきて声が震える。

「桜庭、大丈夫だから。桜庭は怪我、ない？」

私は言葉が上手く出てこないで、首を縦に振る。

「よかった、桜庭に怪我がなくて」

「ごめんね、私のせいで……っ」

嗚咽の混じる声でそう言うのがやっとだった。

「少し頭打っただけだから……平気だから」

そう言って右手で後頭部をさする御堂君の肘が赤く染まっているのに気づいて、ぱっと腕を掴む。

「うっ、くっ……」

苦痛の音が漏れて、御堂君が顔を顰める。

「あっ、どうしよう……すごい血が出てる……」

「御堂さん大丈夫ですか？ 立てます？」

「ああ……」

カンナが御堂君の左脇から肩に腕をまわして立ち上がる手伝いを
して、私はその様子をおろおろして見守ることしかできない。

「とにかく、戻ろう」

冷静なカンナがいてくれなかったら、私は一人取り乱しているだ
けでどうすることも出来なかったと思う。

第24話 ミッドナイトブルー

御堂君は私を庇って転んだ時に、護岸ブロックにお尻と頭と右肘をぶつけてしまった。

別荘に戻った時には血は止まっていたけど、御堂君の服は血だらけで叔母さんが血相を変えて救急セットを持ってきてくれた。

皆がバルコニーで花火を始め、私と御堂君はダイニングチェアに向かいあって座って怪我の手当てをする。

肘の部分をすり向いて赤くなっている。痛々しい様子に言葉が詰まり、黙り込んだまま消毒して傷テープを張る。

手当てが終わると、御堂君が肘を曲げたり伸ばしたりして確認する。

「ありがとう」

まさかお礼を言われるなんて思わなくて、目を大きく見開いて御堂君を見つめる。

「そんな……私のせいで怪我したんだから手当てくらいして当然だよ。ほんとにごめんね……助けてくれて、ありがとう」

海岸では動揺してお礼も言っていなかったことに気づく。

「どづいたしまして」

申し訳ない気持ちでいっぱいなのに、御堂君は目元を優しく和ませる。

「桜庭を守れてよかったよ」

そんなことをうつつとりするような魅惑的な微笑みで言われて、どうしたらいいか分からなくなってしまう。

「あの、御堂君……っ！」

私が口を開いた時、バルコニーから夕貴が顔を出す。

「譲子と御堂も花火やろう。ってか、早くやらないと花火なくなるよっ。」

花火を数本掴んで差し出す夕貴の側に御堂君が立ち上がって近づき、花火を受け取る。

「早くおいでよ」

座ったままの私がバルコニーに戻って行った夕貴から御堂君に視線を向けると。

ぽんっ、ぽんっ。

頭を優しく撫でられて、御堂君を振り仰ぐ。

「もう気にするな、たいした怪我じゃないんだから。行こう」

そう言った御堂君に手を引かれバルコニーに出る。

渡された花火の1本を持ってバルコニーの中央に置かれた蠟燭の火に近づける。瞬間。ぱちぱちと軽快な音を立ててほの白く光り、

火花を散らす。

綺麗だな、そう思った時にはもう火は消えていてなんだか切なくなる。終わった花火を水を張ったバケツに入れ、新しい花火を始める。

ほんの数秒だけ輝く　その花火があまりに綺麗で夢中で楽しむ。火の消えた花火をバケツに入れようとした時、バルコニーの隅に闇に紛れるように一人で腰かけているカンナに気づく。バケツに花火を入れ、ゆっくりとカンナに歩み寄る。

「カンナ、どうしたの？」

肩膝を立てその上に乗せた腕で顔を支えて下を向いているカンナの顔に元気がないように見えて、心配になる。

「あつ、譲子さん……」

顔を上げたカンナは、一瞬前の寂しそうな顔を隠していつものように笑う。だけど私は見てしまったから、何もなかったようにカンナに接することは出来なくて、隣に座る。

「どうしたの？　花火やらないの？」

中野が両手にたくさん花火を持って走り、それを見て笑ってる皆の笑い声が聞こえるのに、カンナの周りだけは静かだった。

「たくさんやったから、少し休憩」

そう言って斜めに私を見上げたカンナの瞳は切なげに揺れている。泣きそうな顔で休憩だなんて　そんな言葉は信じられない。どうして泣きそうな顔をしているのか理由が知りたくて、カンナに尋ね

ようとしたんだけど。

「晃紘！ここに打ち上げ花火置いてっ」

中野の声に思わず振り返ってしまっ。

花火セットの中に入っていた打ち上げ花火をバルコニーに並べている所で、中野と沙世ちゃんがすごくはしゃいでいる声が聞こえる。夕貴は呆れた顔で立っていて、御堂君が花火をより分けていて、ふつと視線を右腕に落として反対の手でさすったのを私は見てしまった。

あっ

「御堂君っ！」

思わず御堂君に駆けよる。

「やっぱり腕が痛むんじゃない？」

御堂君は私の声にぴくりと肩を震わせて、右肘を触っていた手を素早く離して苦笑する。

「違うよ、虫に刺されてかゆいだけ」

それが御堂君の優しい嘘だって知っていたから、私は唇をかみしめる。

「よし、打ち上げるぞっ」

中野の元気な声に振り返ると、並べた打ち上げ花火に順々に中野がライターで火をつけていく。

「讓子、こっちにおいで」

夕貴に手招きされて、窓側の夕貴と沙世ちゃんがいる横に座る。
ピュー……………ッ、ドドーンッ！

黒に近い紺色の空に、小さな花がいくつも咲いては散っていく。

綺麗で胸がくすぐられるのに、どうしてか切なくて　涙が出そ
うになった。

第25話 ウォーターブルー

別荘に来て3日目。今日は朝から海に来ている、って言うっても午後には帰るんだけどね。

私は生理で海には入れないから、デニムの短パンとグレーのパーカーという私服のまま砂浜に来ていた。

沙世ちゃんと夕貴には生理だつて言っただけど、男子達にはそんなことは言えなくて、少し体調が悪いとだけ伝えて荷物番を申し出たんだけど……私の横には河原君が座っている。

カンナが言うには河原君もかなりの本好きで、私が荷物番しているから皆は海に行つてきていいよつて言っただのに、河原君はシートに座ったまま黙つて本を読みだしてしまった。

カンナが声かけても返事は返つてこなくて。

「河原、本の虫だから集中し出したら声かけてもぜんぜん気づかないんだよ」

苦笑して言つたカンナは、俺も一緒にいようか？　って聞いたけど大丈夫と言つて海に送り出した。

ちらつと横を見ると、河原君は本に熱中しているから、私は暇を待たせてしまう。

私も本でも持つてこれば良かったかな。

昨日は海に来てまで読書なんて思つたけど、白い砂浜、青空の下、打ち寄せる波の音を聞いて読書つて　素敵かも！

そんなことを考えながら、砂遊びを始める。手で山を作つてトンネルを掘る。いつの間にか砂遊びに集中していた私は、澄んだ声が聞こえて振り返ると、小説を片手に持った河原君の眼鏡の奥の瞳と

視線が合う。

「譲子さんって菊池と前から知り合いなの？」

いきなり質問をされて、目をぱちぱちと瞬く。

「えっと、知り合ったのは2カ月くらい前かな？」

「ふーん。もつと前から知り合いだと思ってた」

「あはは、ぜんぜん違うよ。突然電車で声かけられてね」

「あー、カンナって人懐っこいから」

僅かに眉根を寄せて空を仰ぐ河原君が、少し羨ましそうな顔を
するから笑みがこぼれる。

「河原君は？ 海で泳がなくていいの？」

「俺、海は苦手で……」

「へー、そうなんだ」

海に行く男の子は泳げるって持論　ここでもまた、崩れたな。
そんなことを考えて、一人苦笑する。

「中学の合宿で海で遠泳させられて、たまたま波が高い日で思いつ
きり海水飲み込んだじゃって、しょっぱいし苦しいし溺れそうになる
しで……」

「あはは、それはトラウマになるかも。でもテニス部でも遠泳させ
られるんだ。体力作りとか？」

そう聞いた私に、河原君がくすりと不敵な笑みを漏らす。

「水泳部だった」

「えっ？ 河原君って水泳部だったの？」
「ああ」

河原君が水泳部　なんか、すごい納得。あの色黒！　あの筋肉！
まあ、テニスやってても焼けたり筋肉ついたりするけど、なんか河原君は違う感じがしたんだよね。

一人でうんうん頷いて納得してしまう。ますます河原君とは話が合いそうな気がしてきた。

昼食を済ませ、叔父さんと叔母さんに挨拶をしてバスに乗って駅に向かう。

電車に乗る前に、駅前からロープウェイに乗って寝姿山に登る。叔父さん達が、今日はすごく晴れているから展望台から見る景色は絶景だつて教えてくれて、せっかくだから行ってみることにしたの。切符を買って乗り場で待っている時、なんだか沙世ちゃんがそわそわしてるのに気づいて手元を覗きこむと、パンフレットには縁結びの名所って書いてあった。

ロープウェイに乗ると頂上まではあつという間で、高い場所に来たからか空気が澄んでいて気持ちいい。3つの展望台と愛染堂、黒船見張所があつて全部見ても1時間かからないって言うからぐるっと見て回ることにする。

「じゃ、2時にロープウェイ山頂駅に集合ね」

夕貴が言っただけなら行動するのかもしれないけど、まずは皆一緒に第1展望台に行く。私達以外にもロープウェイから降りたばかり

りの人が何人もいて記念撮影をしている。

第1展望台からは下田港、下田市街、伊豆の山々が見渡せる。

「空気が澄んでたら伊豆7島が見えるっていうけど、見える？」

夕貴に聞かれた中野が首を横に振って柵から身を乗り出す。

「見えない……」

「あれが大島で利島、新島じゃない」

中野の横に立って左から島を指さしたんだけど、中野も夕貴も首をかしげる。おまけに御堂君まで。

「桜庭、目いいんだな」

って言うのよ。

私はがくんと肩を落とす。

伊豆7島が見えなくても、太陽が青い海面をキラキラと反射して透き通る澄んだブルーが胸に沁みてとても綺麗だった。

「みんなで一緒に写真撮ろうよ」

沙世ちゃんの提案で、近くにいた人にカメラを預ける。前列に沙世ちゃん、私、夕貴、中野。後列に御堂君、カンナ、河原君、熊本君。

「撮りますよー、はい、ちーずっ！」

8人一緒に写った写真は、一生の宝物になるだろう。

次は第2展望台に行くことになったんだけど、私はお手洗いに行くからと言って皆には先に行ってもらうことにした。

ナプキンを替えたかったのと、なんだか本当にお腹が痛くて時間がかかりそうだと思っただから先に行って言って言ったのに、お手洗いで出るとベンチにカンナが座っていた。

「カンナ」

「譲子さん、大丈夫？」

カンナは真剣な瞳で私を見つめて尋ねる。

私は何に対して大丈夫と聞かれたのか計りかねて首をかしげると、真剣な瞳からすっと柔らかい色に変わって微笑んで立ち上がり、私のすぐ横に並ぶ。

「大丈夫ならいいんだ。皆はもう第2展望台の方に行ったから、俺達も行くよ」

そう言ってカンナは私の肩を引きよせて歩きはじめた。突然の行動に、私が不思議そうにカンナを仰ぎ見ると。

「ばちんっ！」

カンナと至近距離で目があって、私はそのままカンナの黒い瞳をじーっと見つめた。

昨日といい今日といい、どうしてこんなにべったりくっついていたり肩を抱き寄せたりするのかしら。

普段はしない行動に疑問を持って、だけど口には出せなくて、代わりにカンナの瞳の中に答えを見つけようとしたの。

すると、カンナの顔がみるみる赤くなってふいつつと視線をそらし、肩に回していた手を解いて私の手を掴んだ。

「わー、びっくり」

カンナがこんなに顔を赤くするなんて。見ると耳まで真っ赤になっていた。恥ずかしいなら、こんなに近づかなければいいのに……歩きながらそんなことを考えててふっと前を見ると、垣根の影に沙世ちゃんの後ろ姿を見つけて声をかけようとしたんだけど。

「私とつきあって！」

掠れた沙世ちゃんの声が聞こえて、沙世ちゃんの向こう側に熊本君がいるのを見てしまった。

わわっ

私が思わず立ち止まったから、手を繋いでいるカンナも立ち止まり、前方に沙世ちゃんと熊本君がいるのに気づく。

沙世ちゃんの告白現場に居合わせてしまったてどうしようかと思っただけ、沙世ちゃんは私達に気づいていないし垣根の迷路の中に入ってしまったから、私とカンナは迷路の横を無言で通り過ぎて第2展望台へと向かった。

わー、わー。

一人ドキドキして、心の中で小さなおじさんが飛び跳ねてくる回る回って踊って、胸がうずうずとする。

告白現場を目撃するなんて！

しかも、友達の告白なんて……びっくりだわ。

今まで告白されたことも 御堂君のはノーカウントよね したこともないけど、リアルにその緊張感が伝わってきて、人事とは思えなかった。

熊本君に頑張ってアタックするって言っていたけど、まさか旅行中に告白しちゃうなんて思ってもみなくて……

上手く行くといいな。

皆がみんな、好きな人と幸せになれば、素敵なのにな

第26話 セルリアンブルー

黙ったままカンナに腕を引かれて第2展望台に行くと、夕貴と中野と河原君の3人しかいない。

「あれ、御堂君は？」

沙世ちゃんと熊本君は迷路の所にいたけど、御堂君はどうしたのだろう。ただそう疑問に思ってたんだけど、繋がれている手にぎゅっと力を籠められて、眉根を寄せてカンナを振り仰ぐと、何かを思いつめた様な怖いくらい鋭い光を宿した瞳が合つて、どきりとする。

「あれ、そういえば晁紘いないな。先に行ったのかな？」

中野が首を傾げて辺りを見回し、第3展望台の方に歩き始める。私達もその後に続いていき、第3展望台に着くと、いつの間にか沙世ちゃんと熊本君も合流していて、今度は河原君がいなくなっていた。

私はふつと手元に視線を落とす。そこには山頂駅からずっと繋がれたままの私とカンナの手。肩を抱かれたままよりはいいけど、どうしてこんな状況になったのか悩む。気恥ずかしくて手を解きたいのに、優しく握っているように見えるカンナの手は私の手をしっかりと握っていて振りほどくことは出来なかった。

「ねー、譲子。一緒にこの望遠鏡見ない？」

ナイスタイミングで夕貴に声をかけられ、私は掴まれていたカナの手からするりと抜け出して夕貴に近寄る。

「いいよ。1000円だよ、50円ずつ出し合う？」

「私50円あるよ」

「じゃ私が1000円入れるね。わっ、すごいよ、景色きれい……」

「どれどれ、おー、本当だあー。伊豆7島見えるね」

夕貴と笑いながらそんなやり取りをして、ちらりと視線だけで振り返っただけ、カナは居なくなっていた。

「あっ、終わっちゃった」

夕貴の声に我に返り、誤魔化すように苦笑する。

「短いね。でもいい景色が見られて良かったね」

「夕貴、次行こうぜ」

大きな声で叫ぶ中野に向かって、夕貴は腰に手を当て眉根を寄せて叫び返す。

「そんな大きな声で言わなくても聞こえるわよー！ まったく、いちいち私に言わなくてもいいのに」

後半は小さな呟きで、でも夕貴の頬が緩んでいるのを見て、棘のある言葉を言っても本心では中野の存在を嬉しく思っているんだって伝わってきた。

いいな、夕貴と中野は。なんだかんだで仲良いし、いつも一緒にいられて羨ましい。

「讓子、行こっ」

ぼーっと自分の思考に浸っていて、夕貴の声にすぐに反応できなかった。

「あっ、うん」

前方を見るとすでに夕貴と中野は歩きだしていて、その前を沙世ちゃんと熊本君が歩いていて、慌てて後を追おうとした時。

「桜庭、ちよっといい？」

後ろから突然に声をかけられて振り向くと御堂君が立っていた。

夕貴達が歩いて行った方向とは逆、第2展望台に戻る途中の別れ道をしばらく進んだところで御堂君が振り返る。

「桜庭と菊池って 本当につき合っていないの？」

突然そんなことを聞かれるからビックリする。

「うん……」

付き合っではないんだから、うんって答えるしかないでしょ。御堂君がなんで急にそんなことを聞くのか不思議に思っで見上げると、御堂君の瞳がキラッと光を反射していた。

「それがどうかしたの？ なんで、みんな私とカンナが付き合っ

るって思いたいのかしら……」

前半は御堂君に、後半はひとり言のように呟く。

御堂君はしばらく黙ったまま空を見上げて、私を見下ろした瞳は空の青よりも鮮やかな青に揺れている。

「もう一度伝えるよ、俺は桜庭が好きだ。桜庭は俺の事どう思ってる？ 友達　？」

真剣な瞳の奥に切なさを宿して聞かれ、私はどうしようもない想いに唇をかみしめて頷く。

私と御堂君の間に停滞していた時間は流れだした

過去の誤解も解けて、以前のように仲がいい友達に戻れた。

頷いた私を見て、御堂君のきれいな瞳が一瞬、潤む。

「今は友達としてもいい、この先ほんの少しでも俺を好きになってくれる可能性があるなら　付き合ってほしい」

どこまでもまっすぐに想いを伝えてくれていることが分かって、胸が苦しくなる。

視界の端に、御堂君の肘に刻まれた痛々しい傷跡が目に入って、俯いてしまう。

好きか　って聞かれたら、好きだよ。でも異性としてかって聞かれると

想いに詰まって何も言えないでいると、ふわりと優しく頭を撫でられる感触に顔を上げると、御堂君があまりにも綺麗な顔で微笑むから涙が出そうになる。

ズキンッ、ズキンッと頭が痛んで警戒音が響く。

「ごめん、困らせるつもりじゃなかったんだ、ちょっと焦り過ぎた

……」

そう言ってもう一度頭をなでる。

私は俯いて、滲む目を手の甲で慌てて拭う。御堂君の気遣いが嬉しくて、その優しさが心に沁みて、ズキリと胸が痛んだ。

しばらくすると愛染堂を見て回ってきた夕貴達が来て合流し、一緒に黒船見張所を見てロープウェイで駅に戻り、帰りの電車に乗り込んだ。

2人掛けの席を2つ向かい合わせにして、私と夕貴と御堂君と中野。後ろの席にカンナと河原君と熊本君と沙世ちゃんが座っている。電車に乗る前に売店でお土産を見ている時に、沙世ちゃんがこっそりと報告してくれた。熊本君に告白して付き合うことになったことを。

おめでとう　それしか言うことが出来なかったけど、沙世ちゃんの幸せそうな顔を見たら複雑な気持ちなんか飛んでいって、本当に嬉しかった。

窓の外に視線を向けると、海岸線を通る電車から海が遠ざかり、楽しい海の旅行ももう終わりだということを書いている。

どこまでも澄んだ蒼と碧が名残惜しい気持ちと複雑な気持ちを一緒に溶け込ませていく。

疲れが出たのか、瞼が重くなつてうとうとし始める。

ズキン、ズキン痛むお腹と頭。駅前の薬局で生理痛止めの薬を買えばよかったと今更後悔しても遅くて、痛みを誤魔化すために睡眠に意識をゆだねた

第27話 愛しさの欠けら

「譲子、乗り換えるよ」

夕貴の声に、はっと意識を取り戻す。下田駅で電車に乗ってからすぐに寝てしまつて、熱海で乗り換えた記憶もあやふやだった。私は慌てて立ち上がり、吊り棚の荷物を取ろうとして、ぐらりと視界が歪む。

「大丈夫？」

倒れる寸前、御堂君が背中を支えてくれて後ろから顔を覗きこまれる。

「うん、ちょっとバランス崩したただけだから」

心配させないように言つただけけど、目の前がちかちか点滅して寝る前よりも頭痛がひどくなつた気がする。ふらつと体が揺れて額に手を当てると、御堂君が私の肩越しに吊り棚から荷物を取つてくれた。

『東京、東京』

駅に着いて夕貴達がホームに降りて行くから、御堂君から鞆を受け取って降りようとしたんだけど。

「俺が持つよ」

そう言って御堂君が自分の鞆と私の鞆を右手で持って、左手で私の手を引いて電車を降りた。

大丈夫　　って言いたかったけど、そんな空元気を出す事も出来ないくらい体がだるくて、手を引かれるまま黙って電車を乗り換えて。

私の意識はそこで途切れた

次に気が付いた時は自分の部屋のベッドの中で見慣れた天井が見える。どうやって家まで帰ってきたのか全然記憶になくて、うーんと悩みながら上半身を起こすと、右手に優しい感触を感じてベッドの横に視線を移すとカンナが床に座ってベッドに頭を預けて眠っていた。

えっ、カンナ　　？

右手はカンナの左手に優しく包み込まれていて、ドキンとする。

なんだか体中が熱くて、頭ががんがんで、顔から火が噴き出しそうだった。

私が身じろいだから、カンナがふっと頭を上げて数回瞬く。

「あつ、俺、寝ちゃってたのか……具合はどう？」

「具合……？」

「覚えてないの？　譲子さん、電車の中で倒れたんだよ。夏風邪だったって」

風邪……だから体がだるくて熱っばかったのか……

「そうなんだ……カンナが家まで送ってくれたの？　ありがとう」

この状況から考えられるのはそういうことでお礼を言う。

少し話すだけでも息が切れて、目眩がしてくる。生理の貧血もあるのかもしれない……

「どういたしまして」

いつかと同じ甘い笑みを浮かべて言うカンナに、泣きたくないのに涙が溢れてくる。

涙腺が壊れてるのかも……

体が弱っている時は人恋しくて、あんまり優しくされると頼りたくなっちゃうから困ってしまう。

「いま何時？」

言いながら机の上の時計に目を向けると20時になろうとしていた。

「もうこんな時間　カンナ付いてくれてありがとう。でも……」

これ以上は　手から伝わる温もりが優しすぎて、握られている手を離したくなくなってしまう。

私は心とは裏腹に、握られている手を解こうとしたんだけど。ぎゅっと力をこめられ、抵抗を遮られる。

「カンナ……？」

苦笑して首をかしげると、カンナが怖いくらい真剣な瞳で私を見つめてくる。

「御堂さんと……なにかあった？」

カンナの顔を見ていられなくて、視線を思わずそらしてしまう。窓の外は漆黒の闇に包まれているけど、室内は天井のライトが明るく照らしている。

カンナがどうゆう意図で御堂君のことを尋ねたのか
もしかして、告白されたのを聞かれたとか？ そんなことないよね……

「えっ、と……な、んのこと……？」

そう言うのがやっとだった。

カンナが私を好きなんじゃないかって気づいてて、気づいていないふりをしていた私はずるい。

だから皆の前で沙世ちゃんに付き合っているのかって聞かれた時、カンナに申し訳ないって気持ちよりも、自分の心の中に踏み込まれたくなくて、何も言えなかった。

カンナははつきりと「そういう関係になりたい」って言ったのに、それでも気づかないふりをしていた。

海でカンナがあまりにも側にい過ぎて卑怯な自分を見透かされたようで、胸が苦しかった。

カンナの想いに答えないのは、面と向かって「好き」とかそんな言葉は言われていないからだって言い訳して、本当は自分の気持ちがあいまいだからなのを誤魔化して

ふっきた。友達として。御堂君にそんなことを言いながら、私の心は揺らいでいた。まだ御堂君を好きな気持ちが心に残っていて、そんな簡単に消えるような想いじゃなくて

中途半端なのは嫌なのに、自分の気持ちが一番分からなくて困る。カナナと御堂君が素直に気持ちを伝えてくるから　困ってしま
う。

「なにもないなら、いいんだ……」

そう言った声が寂しそうに霞んで、私には聞こえない小さな声でカナナが何かを呟いた。

なにを言ったのか聞こうとしたけど、あんなに強く握りしめていた手をカナナが急に離して立ち上がったから、カナナの手にすがりついてしまいたい衝動にかられて焦る。

わっ、私なにやってるんだろう

伸ばした右手を慌てて引っこめて、左手で強く握りしめる。

「帰るね」

部屋を出て行くこととするカナナを追いかけ、玄関まで見送る。

1階に下りて行くと、リビングからお母さんが顔を出す。

「あら、帰っちゃうの？　ちょうど今、夕飯が出来たから呼びに行くところだったのよ、譲子がお世話になったんだもの、夕飯食べて行ってちょうだい」

「いえ、今日は遠慮しておきます」

お母さんとカナナが会話してるなんて、妙な気分がする。カナナは深々と頭を下げると。

「遅くまでお邪魔してしまってすみません」

って礼儀正しく挨拶するの。

「いいのよ、譲子が迷惑かけてごめんなさいね。また遊びに来てちょうだい」

カナナは少し困った顔をして、それを隠すようにふわりと笑う。

「気をつけてね」

「はい、失礼します。譲子さん、お大事にね」

「あっ、うん……」

声をかけられるなんて思ってたなくて、すっとんきょうな声を上げてしまい、カナナがえくぼを作って笑い、手を振って夜道を遠ざかって行った。

玄関を締めて上がると、お母さんがにやにやと頬を緩めて私を見る。

「あんな可愛い彼氏がいたなんてね」

「なっ……ちがっ……」

突然お母さんに言われて、声がどもってしまふ。

「ふふふっ、隠さなくてもいいのに。お父さんが帰りの遅い日で良かったわね。お母さんは気づいていたからいいけど、お父さんはきつとビックリしちゃっわよ」

楽しそうな笑い声を響かせてリビングに戻っていくお母さんは全く私の否定の言葉を聞いてくれなくて、なんだか一気に疲れが出て

肩を落として大きなため息をつく。これ以上言っても聞いてくれな
いことが分かっていたから、わたしはとぼとぼと重たい足取りでリ
ビングに入る。

「それにしても、礼儀正しくていい子ね、彼。名前はなんていうの
？ 同じ学校の子？」

否定するのがめんどくさくて、出された冷しゃぶサラダうどんを
食べながら答える。

「菊池カンナ君、隣の学校」

「隣って里見高校？ あら、菊池君は頭がいいのね」

向かい側に座ったお母さんがにこにこ嬉しそうに話しかけてく
る。

「私、カンナ 菊池君と一緒に帰ってきたの？」

カンナと言いかけて、言い直す。

御堂君に手を引かれて東京駅で乗り換えたところまではおぼろげだ
けど覚えている。その後の記憶が全くない。

「そうよ、熱出して倒れた譲子をおぶって連れて来てくれたのよ」

お皿に視線を移したままふつと笑ったお母さんを、私は訝しげ
に見つめる。

「なに？」

「すごく彼の事が好きなのね？」

「えっ？」

脈絡のない言葉に一層眉根を寄せると。

「家に送ってくれてすぐに帰ろうとした菊池君の手を掴んでずっと離さなかったのよ。病院も付き添ってくれて」

えっ

自分の記憶にないことを言われて戸惑う。

目覚めた時に、カンナが手を繋いでくれたのは、私から繋いだの　！？

かぁーと顔に血が巡って真っ赤になる。

わー、恥ずかしい。私、そんなことしたの！？

「今度会った時にちゃんとお礼を言いなさいね」

「うん……」

硝子の厚底のお皿に視線を落として、小さく頷いた。

第28話 掴んだ手のひら 1

8月に入って夕貴さんから電話がかかってきて、海に行かないかと誘われる。

目的は別荘の大掃除だけどすぐ側に海があることを聞いて、行きなくなる。おまけに、メンバーが譲子さん、それに中野さんと御堂さんと聞いたら行かないわけにはいかないだろう？

日程もちょうど部活が休みに入る時で、男友達を2人くらい誘って欲しいと言われて行く返事をする。夕方、部室で帰り支度をしている時の電話だったから、部室に残っていた河原と駿介しゅんすけに声をかけた。

旅行当日、集合場所の船橋駅に来た譲子さんは困ったような驚いた顔をして御堂さんを見ていた。その瞳が揺れているのに気づいて、俺は焦りを感じ始めていた。

電車の中で沙世さんに「ホントは付き合ってるんでしょ？」って聞かれた時、譲子さんが困った顔をして口をつぐむから、すごくイライラした。違う　ってはっきり否定されるよりは良かったのかもしいないけど。

譲子さんに苛立って「俺はそういう関係になりたいと思ってる」なんて言ってしまったけど　よく考えてみると、今までかなり積極的にアプローチしてはきたものの、譲子さんに直接好きだと言ったことがなかったと気づく。

きっかけは些細なこと

最初は同じ電車に乗っている国府台南高生が目に入って、なんとなく興味を惹かれて毎朝観察した。見ているといつも本を読んで、

そのうちなんの本を読んでいるのかな、どんな本が好きなのかなって気になりだしていた。

だからあの日、帰りの電車で彼女を見つけて大きく胸が跳ねた。

こんな言葉は陳腐だが、運命だと思った。

彼女の声を聞きたい。喋ったらどんなだろう。そう思った時には、もう話しかけていた。

今思えば、初めから惚れていたのかもしれない。

話したらもっともっと欲求が出てきて、一緒に過ごす時間を増やしたくてなつて。

彼女が俺の事をただの友達としか見てなくて、そして心の奥には俺じゃない違う人がいるんだと気づいた時も、長期戦でこの恋を頑張ろうと思った。絶対に、俺の方を向かせて見せる　って。

だから、夕貴さんが言っていたように確かに気持ちを言うタイミングを計っていたのもある。

初めて御堂さんと会った時、譲子さんの瞳を見た時から気づいていた。譲子さんは御堂さんの事が好きなんじゃないか　って。

それでも、譲子さんが御堂さんはただのクラスメイトで、俺の仲間がいい友達だって言ってくれたから、出会ったばかりだし、これから俺の事をたくさん知って好きになってもらえばいいと思っていた。

それなのに、あの夜。譲子さんと御堂さんが2人きりである現場に遭遇して、いてもたってもいられない自分がいて、気が付いたら譲子さんの傍まで駆けよっていた。

その時は2人きりであるっていうのは誤解だと分かったけど、御堂さんが譲子さんを見つめる目は俺と同じで、譲子さんを好きなのはすぐに分かった。

遊園地に着いてきたのがなよりの証拠で、でも俺も2人がデートするって知ったら邪魔すると思うから、御堂さんに何か言うこと

はしなかった。

それとなく夕貴さんに2人の中学の話を聞いて、2人が両思いだったけど付き合わず友達以下の関係になっていたことを知る。

それが最近、以前のような仲良かった頃の関係に戻っていると聞いたら、もうがむしゃらに頑張るしかないじゃないか。

下田駅からバスに乗った時、譲子さんの隣には当然のように御堂さんがいて、俺の立ち入れない思い出話を楽しそうにする2人を横目に見て、譲子さんの存在がすごく遠くに感じた。

海で譲子さんが荷物番に残ると言った時、俺も残るって言いかけたけど、御堂さんに先を越され唇をかみしめた。

駿介に引つ張られ渋々海に行った俺は海の青なんか目に入らなくて、砂浜の譲子さんから目が離せなかった。

「気になるなら行ってきたら？」

くすりと夕貴さんに笑われ、俺は駆けだした。

シートの端と端に座る譲子さんと御堂さんの間にはすごい距離があるのに、俺には分からない話をして笑う譲子さんを見て、焦燥感が胸を焦がす。

少しずつ俺の事を意識し始めてくれてるんじゃないかって自信過剰になってたけど、そんな鉛細工で出来た自信はすぐにぼろぼろになった。

邪魔したくても近寄ることが出来なくて、奥歯を噛みしめて突っ立っていることしか出来なくて、胸が苦しくなる。

2人が付き合うのも時間の問題かもしれない　だから俺はあがくしかなかった。

残された時間はこの旅行の間しかないように感じて、焦った俺はなるべく譲子さんの近くにいたようにした。でも、譲子さんが御堂さんを好きなら 譲子さんの邪魔はしたくなくて、矛盾した気持ちぐるぐると胸を渦巻く。

夜のコンビニへの買出しの時、じゃんけんで負けて買出し係になった俺と御堂さんに、譲子さんが一緒に行くと言った時は、背中に冷や汗が伝う。

もしかして、御堂さんと少しでも長く一緒にいたいから ? そんな考えをしてしまった自分はどんどん胸が苦しくなっていく。邪魔したくない、だけど自分の気持ちに嘘をつくことも出来なくて、コンビニへの行きも帰りも、俺は譲子さんのすぐ横、手が増触れそうな距離を保って歩く。
それなのに

「よく見て」

そう言っただけで歩道から護岸ブロックに降りて行った譲子さんが足を滑らした時、一番近くにいた俺よりも早く 御堂さんが譲子さんを助けた。庇って転んだ御堂さんは肘から大量に血が流れ出て、それを見た譲子さんは、泣きながら御堂さんにすがりついていた。

「ごめんね、私のせいで……っ」

嗚咽の混じる声で言う譲子さんは、御堂さんが自分のせいで怪我したことと心を痛めていた。

「ただ俺は

俺が譲子さんを助けたかったんだ。あんなに側にいて何も出来なかった自分が不甲斐なくて情けなくて、消えてしまいたかった。

御堂さんに肩を貸して別荘の戻り、譲子さんが涙目で手当てすると言ったのを聞いて、俺はそっとバルコニーに出てライトの明かり

の届かない端の暗闇に腰を下ろす。

このまま闇に溶けてしまえたらいいのに
肩膝を立てその上に乗せた腕に顔をうずめる。

こんなに譲子さんを好きになって、譲子さんの幸せを願って身を
引くなんて出来ない。だからどうか、想いごと消えてしまえたら楽
なのに。

どんなにあがいても振り向いてくれないかもしれない。諦めよう
と思えば思うほど、好きが溢れて胸が苦しくなる。
想いに蓋を閉じるように瞼を落とした時。

「カンナ、どうしたの？」

そう声をかけてきた譲子さんの顔を見たら切なくて顔をゆがませ、
だけど何も悟られない様にふわりと笑う。

「あっ、譲子さん……」

「どうしたの？ 花火やらないの？」

隣に座った譲子さんが首をかしげる。

「たくさんやったから、少し休憩」

そばにいたいと願った譲子さんの隣が　いまはこんなに苦しい。
胸がはち切れそうで、体中が悲鳴を上げている。

涙腺が緩みそうなのを唇に力を入れて必死にこらえる。
次の瞬間。

「御堂君っ！」

心配そうな声を上げて、譲子さんはすごい勢いで御堂さんに駆け

よっていく。

俺は無意識に遠ざかっていく譲子さんの後ろ姿に手を伸ばして、宙を掻く。

1秒前まではすぐ隣にいたのに、今はこんなに存在が遠い。

苦しくて苦しくて、泣けてしまえたら楽なのに

俺は腕で顔を隠すように俯き、細く息を漏らした。

第29話 掴んだ手のひら 2

翌日、旅行最終日。

寝る時に濡れタオルを当てたからそんなに目は腫れていなくて、鏡に写る顔はいつもとなにも変わらないように笑っている。

昨日は気分がどん底まで沈んでしまったけど、悩む暇があるならもつと必死に頑張ろうと決心した。

帰る前に寝姿山に登り第1展望台で景色を見た後、譲子さんがトイレに行くというから俺はトイレの前のベンチに座って待っていた。ふつと横を見ると、御堂さんが売店の側で立っているのが見えて、胸がざわつき始める。

御堂さんも譲子さんを待っているんだ 直感で分かって、だからどうしても譲子さんには御堂さんの存在に気づいてほしくなくて、トイレから出てきた譲子さんの視界に入るようにトイレの入り口を見つめる。

トイレから出てきた譲子さんと目が合って、顔色が悪いことに気づく。そういえば、午前中も具合が悪いからと海に入らなかつたな。

「譲子さん、大丈夫？」

もしかして具合が悪いんじゃない……

譲子さんは首を傾げてきょとんと俺を見る。その顔があまりにも可愛くて、俺は微笑んで駆け寄る。

「大丈夫ならいいんだ。皆はもう第2展望台の方に行ったから、俺達も行こう」

横に並んだ時、売店から出てきた御堂さんの姿が視界の端をかすめて、譲子さんが振り返って御堂さんに気づかない様に肩に腕をまわして引きよせ、遊歩道の方へと歩きはじめた。

少し強引すぎたかなと思って譲子さんの様子をうかがう様に横目で見ると、不思議そうに俺を見上げる譲子さんと目が合ってまじまじと見つめられて、その瞳が純粹すぎて 僅かに頬が紅潮する。あまりに至近距離で見つめられて、心臓が早鐘を打ちはじめた。恥ずかしくて視線をそらし、肩に回していた手を解いて譲子さんの手を握りしめる。

近すぎるのは困るけど 遠くにいかれるのは切なすぎて、側に繋ぎとめておきたかった。

手を握ったまま、ほとんど会話をすることなく第2展望台に着くと、譲子さんは辺りを見回して真っ先に聞いたことが御堂さんの事で、胸がちりちりと痛み始める。

掴んだ手のひらだけが譲子さんとのたった一つの繋がりで、その手のひらにすがりつくように力を込め、振り仰いだ譲子さんを、俺は切なくて胸がはち切れそうな気持ちで見つめた。

どうか、離さないでほしいと願って。
それなのに。

「ねー、譲子。一緒にこの望遠鏡見ない？」

第3展望台で夕貴さんに呼ばれて、譲子さんは蝶のようにするりと俺の手のひらからすり抜けて飛んでいってしまった。

虚しく風を受けてすかすかする手のひらに視線を落とし、ぎゅっと拳を握りしめる。

望遠鏡から景色を眺める譲子さんの後ろ姿を眺めて、俺は元来た道を引き返し、第2展望台へ行く手前の別れ道を進み、遊歩道から

外れた草むらに隠れた木の根元に腰を下ろす。

はぁーっと大きなため息をついて頭を抱え込む。

俺はどうしたらいいんだ

いや、答えは出ている。

俺は譲子さんが好きだ。例え、譲子さんが誰を好きでも

だけど譲子さんが御堂さんの事を好きなら、気持ち伝えて譲子さんを困らせたくはない。

言いたくて溢れそうになる想いを胸にぎゅっと抱きしめ、体を小さく丸める。

譲子さんが御堂さんを好きなら、俺が取る行動は決まっている

しばらくそのままの体勢でいると、足音が聞こえて耳をすませる。俺が座っている場所からは遊歩道は見えないから気にする必要はなかったけど、聞こえてきた声にはっと顔を上げる。

「それがどうかしたの？　なんで、みんな私とカンナが付き合ってるって思いたいのかしら……」

ため息の混じった譲子さんの声が聞こえる。

譲子さんと　御堂さん……

「もう一度伝えるよ、俺は桜庭が好きだ。桜庭は俺の事どう思ってる？　友達　？」

真剣な御堂さんの声が聞こえ、その言葉にドキンと胸が跳ねる。

「今は友達としてでもいい、この先ほんの少しでも俺を好きになってくれる可能性があるなら　付き合ってほしい」

っ！

まさか御堂さんが旅行中に告白するとは思ってもしなくて、ぎゅっ

と唇をかみしめる。

これ以上ここにいてはいけないと頭に警戒音が響くけど、譲子さんの返事を聞きたい。けど聞きたくなくて、腰を僅かに浮かせた姿勢のまま身動きが取れなくなる。

だから俺は両手で耳をふさいで、聞こえる音のすべてを拒絶した。俺は何も聞いていない。そう必死に思い込むために。

行きの電車は譲子さんの隣の席に座ったけど、帰りは河原の隣に座る。

もし目が合って透き通るような綺麗な瞳で見つめられたら、俺はどうしていいか分からなくなるから、今は譲子さんの顔を正面から見られなかった。

トイレに立った時、窓側に座った譲子さんは窓に寄りかかって寝ていて、その様子を見て心がほんわかとする。だけど、寝ている譲子さんの額にはうつすらと汗が浮かび、顔色も青ざめているように見えて、心配になる。

東京駅で乗り換える時に声をかけてみようかと思ったが、電車から降りてきた譲子さんは御堂さんに手を繋がれて、声をかけるタイミングを失ってしまう。

総武線に乗り換え、扉の横、御堂さんの隣に立った譲子さんの顔はさっきは青かったのに今は赤みを帯びぐったりと瞼を閉じている。本当に具合が悪そうだな。

そう感じて、側に近寄り声をかける。

「譲子さん、大丈夫？」

尋ねた俺に返事は返されなかったが、瞼を閉じたままこくりと首を一度縦に振り大丈夫だと伝えてきた。

だけどその様子はどう見ても大丈夫には見えなくて、譲子さんの肩に手を伸ばした時。

キュキューツ！

高いブレーキ音が響いて大きく電車が揺れ、その拍子に扉に寄りかかっていた譲子さんの体が傾いで、俺は慌てて両手を広げて抱きとめる。

俺の方に顔をうずめて力なく倒れた譲子さんの体はすごく熱くてビツクリする。

倒れた譲子さんに、夕貴さんが驚きの声を上げて駆け寄ってくる。

「譲子、大丈夫!？」

俺の肩に顔をうずめていた譲子さんを支えて顔を覗きこむと、額にびしりと汗をかき、頬が上気している。呼びかけには返答はなく、瞳もだるそうに閉じられ、荒い呼吸が繰り返されている。

「電車に乗る前からずっと具合悪そうにしている、皆に心配かけない様に無理しすぎたんだ、きっと。熱がすごい」

譲子さんの額に手をかざし、あまりの熱さに眉根を寄せる。

沙世さんと駿介が座っていた席を譲ってくれて、譲子さんを座らせ横に座る。譲子さんは力なく体を俺の方にもたれかかってくる。

「ん……」

眉根を寄せ、辛そうに呻く譲子さんを安心させるように、譲子さんの右手を強く握りしめた。

船橋駅に着く直前、少し距離を置いた場所に立ってずっと譲子さんを心配そうに見つめていた御堂さんが近づいてくる。

「桜庭、大丈夫か？」

譲子さんは規則正しい寝息をするだけで、問いかけには答えない。御堂さんも答えは期待していなかったようであんなに風もなく俺に向き直る。

「桜庭とは家が近いから俺が送っていくから」

それが当然だという様に、俺の返事も待たずに譲子さんに手を伸ばした御堂さんの腕を遮り、立っている御堂さんを見上げ鋭い視線で見つめる。

「いいえ、譲子さんは俺が送っていきますから」

具合の悪い譲子さんを、譲子さんの家も知らない俺が送っていくよりも中学からの付き合いの御堂さんが送る方が効率もいいし譲子さんの為だとは分かっているけど、どうしても譲れなくて、強い口調で言い返す。

俺も御堂さんも譲るつもりがないのは同じで、互いに視線だけで相手を威嚇し沈黙が流れる。

駅に近づき電車が大きく揺れ、動こうとしない俺達に痺れを切らした夕貴さんが、御堂さんに声をかける。

「今日は彼に任せよう。私がお家まで案内するから」

前半を御堂さんに、後半を俺に言い、口を挟もうとした俺と御堂

さんを遮る。

「ほら、讓子が具合悪い時にぐだぐだしないの、もう駅着くから。カンナ君も、讓子背負って一人では行けないでしょ？ どうせ荷物持つ人が必要だろうし」

「それなら、俺が荷物を持って案内する。いいだろ？」

静かな、だけど有無を言わせない口調で御堂さんが言い、俺は頷き、夕貴さんのため息をついて御堂さんの肩を叩き、自分の荷物を置いた中野さんのところへ戻る。

御堂さんに手伝ってもらって讓子さんを背負い、船橋駅で降りる。船橋駅で夕貴さん達と別れ、京成線に乗り換え大神宮下で降り、御堂さんの案内で大通りを抜け、数回曲がって讓子さんの家に行く。讓子さんの家の前で3人分の荷物を持っていた御堂さんが俺と讓子さんの荷物を置いて、自分の鞆をもち直す。

「じゃ」

結局、一緒に送ることになったけど、御堂さんはそれだけ言って歩き出してしまった。最後まで意地を張って讓子さんを送ると言った俺は子供で、荷物を持つだけと言って本当に帰ってしまう御堂さんは大人で、そんな冷静な態度を恨めしく思う。

自分ばかりが余裕なくあがいてもがいて、格好悪くて、みじめな気分になるじゃないか。

第30話 掴んだ手のひら 3

沈んだ気持ちと緊張で、譲子さん家の呼び鈴を鳴らすと、インターホンから快活な女性の声が聞こえる。

「はい、どちら様ですか？ あら、譲子？」

インターホンにはカメラが付いていて背負っていた譲子さんが見えたのか、俺が名乗る前にガチャリと通話が切れ、バタバタと家中に足音が響き、玄関が開き、譲子さんと同じくらいの身長的女性おそらく譲子さんのお母さんが現れた。

「あらあら、譲子ったら……」

言いながらおばさんが背中中で寝ている譲子さんに駆け寄り、譲子さんから俺に視線を移す。

「はじめまして」

肩越しに挨拶をし、背中からずり落ちそうになった譲子さんを背負い直す

「帰りの電車で具合が悪くなったみたいで、送ってきました」

「まあ、そんなの。重かったでしょう、ありがとっね」

そう言っておばさんはじいーと俺を上から下まで見て、にこりと笑う。

「ついでに、部屋まで連れて行ってくれるかしら？」

開けたままの玄関に視線を移し、俺を促す。

「あつ、はい。お邪魔します」

靴を揃えて脱ぎ、案内されて2階の譲子さんの部屋に入り譲子さんをベッドに寝かし、布団をかけ直した時にベッドからはみ出た手を戻そうとしたら、小さな譲子さんの手に掴まれて、ドキンと胸が跳ねる。

譲子さんは寝ていて無意識の行動だと分かっているけど、胸が跳ねて冷静じゃいられなかった。譲子さんの方から手を繋いでくれたことにどうしようもなく嬉しくて切なくなる。

掴まれた手をそつと外そうとしたのに、寝てるとは思えないほど強く握られていて、無理やり外すのを躊躇う。

いまだけは俺を必要としてくれる。その手のひらに愛しさをこめて優しく包み込んだ。

そうこうしているうちに、おばさんが救急箱を持って戻ってきて、寝ている譲子さんの額に手を当てて、救急箱から体温計を取り出し、俺は視線をそらす。

すぐに帰ろうと思ってたが、タイミングを逃してしまい、譲子さんの部屋に視線をさまよわせる。

「あら、39度もある……」

呆れた様のため息交じりのおばさんの声に、ぱつと譲子さんを見る。紅潮した頬は相変わらずで、時々苦しそうに眉根を寄せている。

「夏風邪かしらね、病院に……いまならまだ診察時間に合う

わね。譲子、起きられる？」

「う……ん……」

返事はするものの動く気配はなく、静かな寝息が聞こえる。

「譲子、寝てるの？ あら、困ったわね」

ぜんぜん困った様子には感じられない口調でおばさんがいい、譲子さんの顔から繋がれた手に視線を移して、にこりと笑う。

「君、譲子の彼氏？」

言いながらにんまりと笑い、口に手を当てる。

「いえ、あの……」

突然の問いかけに、しどろもどろしていると。

「ふーん、君がねえ。送ってくれたついでで悪いんだけど、病院まで付き添ってくれるかしら？」

そう言われたら断る訳にもいかず どのみち繋がれた手のひらを俺からも離すことは出来なくて、病院に付き添い家までもう一度送る。

譲子さんはそうとう辛いみたいで、目を閉じたまま時々「うーん」とどっちなのか分からない返事をするだけだった。

病院でもらった風邪薬を飲んだ譲子さんをベッドの側に座って、繋いだ手をさするようにする。寝たら帰ろうと思っていたのに、すやすやと穏やかな寝息を立てて眠る譲子さんの寝顔を見たら、帰るに帰れなくなってしまう。

伊豆で御堂さんに告白された譲子さんがなんと答えたのか　俺は聞かなかつたことを後悔していた。聞いたら聞いたで、きつと後悔していたらうけど、2人がどうなったのか知らないでやきもきするよりはましだったはずだ。

「ねえ、譲子さん……」

返事が返ってこないのを分かっている、尋ねる。繋いでいない手で譲子さんの頭を撫で、髪をすく。

触れた時は眉根を寄せたが、気持ちよさそうに目を細めて微笑んだ。

「譲子さんは御堂さんの事が好きなの？　それなら、俺は自分の気持ちを消す努力をするよ。譲子さんには笑っていて欲しいから、隣にいるのが俺じゃなくても……いいんだ……」

最後はか細い声になって、情けなくて、ベッドに顔を突っ伏す。

「譲子さん……譲子さん……」

その名を呼ぶだけで、胸がはち切れそうに苦しくなる。

好きになることが楽しいだけじゃなくて、こんなに切ない気持ちになるなんて、俺は知らなかった。

「どうして俺じゃダメなの……」

呟くつもりがなかった言葉が声になって、静かな室内に吸い込まれて行く。

譲子さんが掴んでくれたこの手のひらも、離さなければいけないんだ

そう思って、もう少しだけ。
もう少しだけだからと自分に言い聞かせて、繋がれた手に力を込めベッドに顔をうずめた。

ベッドの軋む音に顔を上げると譲子さんが上体を起こして、ぼーっと俺を眺めていた。

「あっ、俺、寝ちゃってたのか……具合はどう?」

ベッドから上体を起こして、譲子さんに笑いかける。

さっきまでうだうだと考えていた気持ちを見透かされない様に、笑顔で心を隠して。

「具合……?」

「覚えてないの? 譲子さん、電車の中で倒れたんだよ。夏風邪だっつて」

「そうなんだ……カンナが家まで送ってくれたの? ありがとう」

家に帰ってきてからも時々返事をしていたのは、やっぱり覚えていないようで、ベッドで情けなく吐いた言葉も聞かれていないと分かって苦笑する。

「どういたしました」

「いま何時? もうこんな時間 カンナ付いてくれてありがとう。でも……」

言いながら譲子さんは視線を机の上の時計に向け体をみじろぎ、
繋いだ手のひらに視線を落とす。

その手を解こうと力が込められたことに気づいて、ぎゅっと力を入
れて譲子さんの抵抗を遮る

「カンナ……？」

苦笑して首をかしげる譲子さんを、揺れる黒い瞳で見つめる。本
当は何も聞かないつもりだった。でも、だけど

これが最後のチャンスだとしたら、あがきたかったんだ。

「御堂さんと……なにかあった？」

そう聞いた俺から、譲子さんは素早く視線を外して俯き、掠れた
声で言う。

「えっ、と……な、んのこと……？」

動揺しているのが伝わってきて、じれる気持ちと切ない気持ちが
入り混じってぎゅっと唇をかみしめる。長い沈黙を挟んで。

「なにもないなら、いいんだ……」

そう言うのが精一杯だった。

御堂さんと何かあったことを知っている俺は、譲子さんが嘘をつ
いていることを知っている。どうして話してくれないのか、そんな
苛立つ気持ちは独占欲丸出しで胸がじりじりと焼けるように痛む。

「すべてを俺に報告する義務はないもんな……」

自虐的に聞こえない様な声で呟いて、素早く掴んでいた手のひらを離して立ち上がる。

「帰るね」

部屋を出て1階に降りると行くつと、リビングからおばさんが顔を出す。

「遅くまでお邪魔してしまつてすみません」

頭を下げて挨拶をしながら、結局、最後まで名乗るのを忘れていたことに気づいて苦笑する。まあ、もう会うこともないだろうからいいのかな？

そんなことを考えていたら。

「いいのよ、讓子が迷惑かけてごめんなさいね。また遊びに来てちょうだい」

そう言われて困つてしまつ。首を掻く、気持ちを隠してふわりとおばさんに笑いかける。

「はい、失礼します。讓子さん、お大事にね」

讓子さんにもそう言い、俺は駅に向かって夜道を歩き始めた。

人物紹介

桜庭 譲子
さくらば ゆずこ

性格：マイペース、なんでも器用にこなす

趣味：読書

学校・学年：公立国府台南高校2年

最寄駅：大神宮下駅

所属部：水泳部

兄弟：6つ年上の兄が一人

その他：セミロング

菊池 カンナ
きくち かなな

性格：明るく人懐っこい、頭の中で行動を計算している

趣味：人間ウオッチング

学校・学年：私立里見高校1年2組

最寄駅：海神駅

所属部：テニス部

兄弟：姉と妹がいる

その他：照れている時など首を触るのが癖、身長169cm

御堂 晃紘
みどう あきひろ

性格：クール、落ち着いた雰囲気をもっている

趣味：野球

学校・学年：公立国府台南高校2年、譲子のクラスメイト

最寄駅：大神宮下駅

所属部：帰宅部、中学は野球部

兄弟：1つ年上の兄

その他：譲子と中学3年間同じクラス

南 みなみ 沙世 さよ

国府台南高校2年、譲子の親友、1、2年のクラスメイト、一人っ子

三井 みつい 夕貴 ゆつき

譲子・御堂の中学の同級、高校2年

中野 なかの 大輝 だいき

譲子・御堂の中学の同級生、高校2年、一人っ子、夕貴とは幼馴染
両親が料理屋を経営「たぬき亭」南船橋駅の近く

須藤 すどう 奈緒 なお

譲子・御堂の中学3年の同級生、中学3年の時御堂と付き合っていた

熊本 くまもと 駿介 しゅんすけ

里見高校テニス部メンバー、1年

かわはら はるみ
河原 春海

里見高校テニス部メンバー、1年

第31話 嘘と本音

8月15日、海から帰ってきて2日後。

高熱を出して夏風邪で倒れ、おまけに生理痛の貧血と頭痛腹痛で丸1日をベッドで寝て過ごした。今朝になって熱は下がったものの、37.4度と微熱でまだ頭がふらふらする。

部活は明日までお盆で休みなんだけど、どっちみち生理と微熱で今週中は行けそうにない。

起き上がれるほどには体力も回復したのに、特にやることもなくて暇を持て余していた。

一昨日、電車で倒れたことやカンナに送ってもらったこと、まあその他いろいろ周りから聞かされて驚いたけど、熱でぼーとする頭では上手く考えられなくて、『送ってくれてありがとう』とだけカンナにメールをした。

『早く良くなるといいね、お大事に』

カンナにしては素っ気ない返信が帰ってきて、それ以来メールをしていない。

たぶん、具合が悪いからって気を使ってくれているんだと思うけど、いつも来るメールが来ないとほんとに寂しい気持ちになる。

そんなことを考えて、大きく頭をふる。

御堂君に未練たらたらで、カンナの気持ちにも答えられなくて、寂しいだなんて思っちゃいけないんだ。

宿題も終わってしまっているし図書館で借りていた本も読み終わ

ってしまつて、外に出かけたかつたけど、今日は何日ぶりか分からないくらい久しぶりに雨が降っていて、雷も鳴っている。

いまの体調で雨の中出掛けるのは……風邪をぶり返しそうで躊躇う。

暇を持って余して、部屋の床でゴロゴロ転がって適当に雑誌を見てみると、携帯が鳴り、ぱつと顔を上げる。

鳴り続ける着信音に電話だと分かり、急いで立ち上がって机の上から携帯を取り上げ通話ボタンを押す。

『もしもしー、譲子ー？ 元気かー？』

「夕貴」

明るいつ貴の声に、ふつと笑みを漏らして頷く。

「うん、まだ少し微熱だけど元気だよ」

旅行から帰った日に、夕貴からも『具合大丈夫？』というメールをもらっていた。

『いま大輝の家で旅行の写真見てるからおいでって誘おうと思ったんだけど。熱があるなら無理？』

「うーん……」

行きたいけど、行ってくて言えなくて悩む。

すると、受話器の向こう側で夕貴と夕貴以外の話声が聞こえる。沈黙を挟み。

『もしもし譲子？ うちらが譲子の家に行つても大丈夫かな？ 具合悪いならまた今度にするけど』

「大丈夫だよ！ おいでおいで」

退屈していたところだから、遊びに来てくれるのは大歓迎だ。

『じゃ、これから行くね』

そう言っただけで通話の切れた携帯を机の上に置きながら、首をかしげる。

あれ？ 夕貴はうちらって言ってたけど、その中に御堂君もいたりするのかな　そう考えて、胸がざわつく。

中野の家で旅行の写真を見ていたのなら、旅行に参加していた御堂君がいる確率が高い。

私は慌てて1階の洗面所に降り、顔を洗って髪をとかす。部屋に戻ってきて自分の格好を見下ろし、タオル地の半袖短パンの部屋着を見て、慌てて衣装棚から服を取り出して着替える。

夕貴達が来るのに、さすがに部屋着はまずいよね……
うん、そうだよ！　誰も同意してくれる人がいないから、自分で自分に答えて一人頷く。

「お邪魔しまーす」

玄関を上がってくる夕貴の後ろには、やっぱり中野と御堂君がいて、私は気づかれない様に横を向いて胸をなでおろした。

着替えといて良かった……

部屋に上がってそれぞれ好きな場所に座り、夕貴が中央のローテーブルに写真を広げる。

私は持ってきた麦茶の入ったグラスの乗ったお盆を勉強机に置く。

「お茶、ここに置いておくね。御堂君、いる？」

「ああ、ありがとう」

受け取ったグラスに口をつけ一気に飲み干した御堂君は、立ち上がってお盆にグラスを戻して私を気遣わしげに見下ろす。

「具合はもう大丈夫？」

「だいぶ良くなったよ。御堂君もありがとうね」

「えっ　？」

深い意味はなく言った私の言葉に、御堂君が訝しげにじいーと私を見つめるから、私はドギマギして首をかしげる。

「私、御堂君に手を引かれて東京駅で乗り換えたところまでしか覚えてないんだ。電車で倒れたって聞いたから、きっと御堂君にも迷惑かけたでしょ？」

「あ　……いや、別に平気」

口元に手を当てて御堂君が視線を宙にさ迷わせるから、どうしたのだろうともう一度首をかしげる。

「それよりも、御堂君は肘の怪我大丈夫？」

「ああ、もう治りかけ」

言いながら右肘を持ち上げて、私に見えるようにする。かさぶたもだいぶ小さくなり傷も残らなさそうだった。

「良かった」

本当に心からそう思っていると、優しげに目元を和ませた御堂君と視線が合つて、きゅっと胸が締め付けられて慌てて顔をそむける。

「譲ちゃん、この雑誌読んでいい？」

気まずい沈黙を、タイミング良く中野が話しかけてくれて、振り向いて中野に近づく。

「うん、いいよ」

中野は私がさっきまで読んでいた雑誌を見ている。

「譲子、写真一緒に見よー」

私は夕貴に言われ、横に座って一緒に写真を見る。

御堂君は中野の側に座り、時々中野に話しかけられて答えていた。写真は皆が写っているのがほとんどで、ほんとうに楽しかったなあと思う。その中に、覚えのない写真が目について、机の上に広げられた写真をより分けて一枚の写真を手に取る。

「やだ、なにこの写真……」

カンナの肩にもたれかかって寝ている私と、横に座って寝ているカンナの写真。

覚えがないけど、カンナに寄りかかって寝てしまったという事実に顔が僅かに赤くなる。

「帰りの電車の中で撮ったの。やー、譲子は具合悪くてって知ってたけど、なんだか微笑ましい構図だったからさ、こっ、ねっ？」

カメラを構える真似をして、夕貴が得意顔で鼻をふくらませる。

「ね、じゃないよ」

私は呆れてため息を漏らしながら、写真をまじまじと見つめ、手を握っている事に気づいて、ますます顔が熱っぽくなる。

帰りの電車……そっか、ぜんぜん記憶にないけど、こんな風に帰って来たのか。

本当にカンナには迷惑かけたんだな……

「大変だったんだよ」

一人物思いにふけっていた私に、夕貴が耳元で小さな声で言う。

「えっ？」

大変って、私、なにかとんでもないことを……!?

「船橋に着く直前、御堂とカンナ君が2人して自分が譲子のこと送ってくって言うて睨み合い！ もう見てられなかったよ……」

ふうーと大きなため息をついて、中野と話している御堂君をちらりと見る夕貴。

「譲子、さ……、本当はどっちのこと好きなの？」

その問いにドキリとする。

自分自身でも分からなくて悩んでいたことを改めて他人に聞かれ

ると、背中がざわざわして胸が重くなる。

御堂君は中学の時大好きだった人

いろいろあつて友達とも呼べない期間があつたけど、最近は以前の様な友達の関係に戻ってきていると思う。友達、というよりも微妙な関係かもしれない。中学の時とは違って、御堂君は好きだという気持ちを率直にぶつけてくるから。

私も御堂君の事は3年間ずっと好きで、御堂君が奈緒と付き合いだした時も高校に入ってから忘れられなくて、どうしたら忘れられるかも分からないほど好きだった。

いい加減ふつ切ろうとした時に、また以前のような関係に戻って、御堂君の側にいると昔の強い気持ちに揺さぶられて、自分がどんなに御堂君を好きだったかを嫌でも思い出してしまふ。

そんな状況で、御堂君への気持ちをすべてなかったことには出来なかった。

1回目の告白の時は戸惑いが大きくて、話さなかった2年間のすぐ後で、中学の頃のように戻れないと思っていた。私も御堂君も過去の気持ちにしがみついているだけで、お互い違う方を向いて歩き出していると思つて。

寝姿山で告白された時は、好きな頃の気持ちが蘇って友達以上になつていた。自分から以前の様な友達でいてほしいと言っておきながら、自分を特別に思つてくれる御堂君の優しさに甘えていたんだ。少しでも可能性があるなら 御堂君はそう言った。

以前の私なら こんな言い方は卑怯だけど、もしカンナと出会つていなかったら、何も迷わずに頷いていた。でも

御堂君と以前の様な関係に戻れたのは、カンナの存在の影響だつて分かつているから。

カンナは電車で出会つた男の子。初めて会つた時からカンナは私の瞳には眩しいくらい輝いて見えて、素敵な男の子だと思つていた。直接的ではなくても好意を示してくれて、いつも優しくしてくれるカンナを友達として好きになるのには時間はかからなくて。側に

いるのが当たり前で、友達というよりは弟のような気兼ねしないいい距離間が居心地良かった。

カナナの気持ちに気づいているのに気づかないふりをするのは、最初は御堂君の事をふっきれていなかったし、誰かをまた好きになるとかそんな心の余裕はなくて。

でも次第に周りの人間関係が動き始めて、自分で自分の気持ちが分からなくなってしまった。

御堂君の事は好き。だけど、『好き』とかそんな簡単な言葉では言い表せないもっと深い気持ちで。

カナナの事も友達としてではなく好きになり始めていたのに、自分の気持ちにも気づかないふりをして。

御堂君の事もカナナの事もどちらも比べられるような想いじゃなくて、でもどちらも特別な好きじゃない　そう思い込んで。

まっすぐぶつけれられる2人の気持ちに答えるのが怖くて、どちらかを失うのが怖くて。

今まで真剣に答えを出そうと考えなかった私は卑怯だ

黙り込んだ私に、夕貴が心配そうに顔を覗きこみ声をかける。

「譲子？」

「えっと……」

考えても、結局本気で考えていないから答えは出なくて、なんて答えたらいいか分からなくて言い淀む。沈黙した私に、タイミング良く中野が話しかけてくる。

「なー、8月27日の花火大会、またみんなで行かない？」

中野が屈託のない笑顔でにかつと笑って私と夕貴に話しかける。

「花火大会？ どのの？」

夕貴は興味を持ったみたいで、膝歩きで中野に近づき、中野が手に持っている雑誌を覗きこむ。

花火大会か

そういえば、カンナが夏休み前に花火大会に一緒に行きたいって言ったことを思い出す。その時は話の流れで冗談だと思っていたけど、結局カンナの希望だった。『2人でデート』は叶っていないくて、遊園地に遊びに行った時も旅行も皆で一緒だった。

なんか申し訳ないな……そんなことを考えていたから。

「ねー、譲子も花火大会行けるー？」

夕貴に聞かれて、ぼんやりした頭で首を振っていた。

「ごめん、私は一緒に行けない……」

なんで断ってしまったのか、後になってもその理由は分からなかった。

第32話 戸惑いシチュエーション

「そっか、用事があるなら仕方ないね。どうする、3人で行く？」

夕貴は私が断ったことを特に疑問も持たず、花火大会の話で盛り上がった。

私は机の上に置きっぱなしだった携帯を取り、メールの画面を開く。

どうしよう……私から花火大会誘おうかな。

そんなことを考えるけど、ここ2日カナと全くメールをしていないことを考えて躊躇してしまう。

こんな中途半端な気持ちのまま、カナと2人で出かけていいのだろうか

それはいけない気がした。まっすぐに気持ちを伝えてくるカナに対して、何も返せないのに、これ以上距離を縮めるべきではないと、頭の奥で警戒音が響く。

無意識に携帯を握る手に力を込め、机の上に置き直す。その時。

ピロロン、ピロロン……

着信を知らせて携帯が震え鳴りだす。私は慌てて携帯を掴み画面を確認すると、カナナからの電話だった。

ドキンっと胸が跳ねる。

携帯を見る視線の端で、御堂君がこっちを見ているのに気がついて、さっと顔を背けて携帯を見つめる。

どっしり

出るかどうか戸惑っているうちに、着信音が途切れる。

「譲子ー、電話出なくてよかったの？」

夕貴がお菓子をつまみ、視線を雑誌に向けたまま聞いてくる。

「ん……うん。知らない番号だったから……」

それは嘘だけど、御堂君の視線が痛くてそう言ってしまった。

黙り込んだ私に、御堂君が立ち上がりながら言う。

「そろそろ俺達は帰ろうぜ。あまり長居すると、桜庭も疲れるだろ」

「そうだな。譲ちゃんまだ風邪気味って言ってたもんな。夕貴、帰ろうぜ」

「うん」

夕貴は見ていた雑誌を閉じて部屋の中央に置かれたローテーブルに置いて立ち上がる。ローテーブルには写真が広げたままになっている。

「写真、うちらはもう見たから沙世ちゃんとか他のメンバーにも回して。ほしい写真があったら貰っていいから。じゃ、譲子またね」
「わかった、写真ありがとね」

夕貴に続いて中野が部屋を出ていく。部屋を出ると廊下に御堂君が部屋を立っっていて、強張った表情でじーっと私を見るから、背中がざわつく。

「どうしたの？」

「早く熱下がるといいな」

ふっと目元を和ませてそれだけ言つと階段を下りていく。

それを言う為に待っていたの？

私は切ない衝動にかられて、無意識に胸に手を当てて服を握りしめた。

3人を玄関まで見送ってから部屋に戻ってきた私は、勉強机の上に置かれた携帯に視線を向ける。

さっきのカンナからの電話無視しちゃったけど、なんの用事だったんだろう。かけ直した方がいいかな……

熱のせいなのか、何かを考えるのも億劫で、ふうーっとため息をつけてベッドに腰掛け、ごろんと上半身を寝転がせる。

何にも考えない様にしても、考えないといけないことが頭の中から離れなくて

御堂君の2回目の告白

カンナが家に送ってくれた時に言った言葉

御堂君の去り際の表情

花火大会に行こうと約束したカンナのこと

自分の事を好きだと、好意を示してくれる2人のことが頭から離れなくて、胸が苦しくなる。

私は誰の事が好きなんだろう

夕貴に投げられた質問を自分自身で問いかけてみる。

答えは

微かな音で、重たい瞼を持ち上げる。

考え事をしてベッドに寝転がったまま、寝てしまったようだ。耳に届く携帯の着信音がさっきから鳴っていることに気がついて、電話だと分かるまでに数秒。

がばつと体を起こして、ふらつく足で勉強机に近づき携帯を取る。
カナナだ

「もしもしっ」

『あつ、やっと出たね』

くすりと、いつぶりに聞くか分からない、カナナの優しい笑い声が聞こえて、それが体に沁み渡って痺れる。

「カナナ、あの……さっきは電話に出れなくてごめんね」

『大丈夫だよ、忙しかった？ 具合はどう？』

「さっきはちよつと手が離せなくて。具合はだいぶ良くなったよ」

『そう、よかった。てか、その前に……久しぶりだね』

ふつと笑ってカナナが言葉を紡ぐ。

「うん……久しぶり……」

私はへにやつと力をなくしてその場にくずおれ、床に座り込む。
本当に久しぶり過ぎて、カナナの声を聞いただけでなんだか安心して、体の力が抜けてしまった。

少しの沈黙が続き、カナナが口を開く。

『いま、何してた？』

「えっと、寝てた」

『ごめん、起こしちゃった？』

「ううん、起きようとしたところだから。それよりも、何か用事があって電話したんじゃないの？」

『ああ……』

そう言った私に、カンナが口ごもる。長い沈黙を挟んで。

『譲子さん、具合はもういいの?』

さつきも聞かれたことを聞かれて、首をかしげながら答える。

「えっと、まだ微熱だけど体調はだいぶ良いよ?」

『……………』

「カンナ?」

口数が少ないカンナは珍しくて、どうしたのだろうと思う。私はそわそわと落ち着かなくて、立ち上がって部屋の中を無意味に歩きまわって、カンナの次の言葉を待った。

『来週の土曜って空いてる、かな?』

「来週って……………27日だけ?」

机に近づいてカレンダーを確認する。

さつき夕貴達に誘われた花火大会も27日って言ってたけど断ったから、特に予定はない。

「その日は用事ないけど……………どうして?」

そう言った声が震える。

『譲子さん、さ……………夏休み前にした約束って覚えてる?』

カンナのその言葉にドキンと胸が跳ねる。

「えっと……………夏休みに遊ぼうって約束したこと?」

本当はそれじゃなくて、カンナが何の事を言っていたか分かっていたのに、分からないふりをして、声がかすれる。

『花火大会　一緒に行こうって、言ったこと』

そう言ったカンナの声が、普段の柔らかい雰囲気をはがしたあまりにも真剣な声音だったから、声が直接響く耳、頭、胸から足のつま先まで痺れが襲いかかる。

「うん……」

金縛りに合ったように身動きが取れなくなって、なんとも情けない声を絞り出して相づちを打つことしか出来ない。

『一緒に、花火大会行こう？』

「うん……」

『俺と譲子さんと2人で　行こう？』

「うん……」

カンナの誠意が伝わってきて、揺れる瞳を固く瞑って頷いた。

いつもだったら、明るくて少しおどけた様なカンナの返事が帰ってくるけど、今日のカンナは感情の乗らない静かな声でただ一度だけ頷いた。

『うん　』

だけど、その声からは確かに愛おしさが伝わってきて、胸が締め

付けられる切なくなる。

カナナの誠意に答えなければ

ちゃんと真つ正面から気持ちを受け止めて、自分の気持ちを見極めないと

心の中で、固く誓い、一人頷く。

まさかこのデートが、カナナとの別れに繋がるなんて思いもしないで

第33話 別れへの近道

ざわざわと賑わう人ごみの中。花火大会を心待ちにうきうきとした表情の人々の中で、私は一人、青ざめた顔で立っていた。

待ち合わせ場所の新浦安駅の改札前。花火大会開始1時間30分前なのに、駅にはすでにたくさんの人が詰め掛け、大混雑していた。そんな中、なんで私が青ざめていたかと言うと……慣れない浴衣を着て、あまりにすごい人ごみに酔ってしまったから。

普段はちよつとやそつとのことでは体調を崩さないのに、海で風邪をひいてから微熱は下がらないし、頭痛と腹痛も続いていた。それでも、9月の初めにある水泳大会に向けて今週から部活に出て、練習時間も長くなって少し無理をしすぎたのかもしれない。

うっ……と胸から込み上げる気持ち悪さに、口元にハンカチを当ててしゃがみ込む。

ダメだ、立ってるのも辛い。カンナが来るまで、少しだけ座ってしよう。

ただでさえすごい人ごみの中、しゃがんだりしたら、見つけられないのは分かっていたけど、どうしても立っていることが出来なくて、お腹を抱えるように丸くなる。

せめて、普通の服だったらと思う。きつく締められた帯が苦しいのも原因だと思っただ。

花火大会に行くって言ったなら、お母さんがすごい目を輝かせてきて、誰と言うのって聞かれて適当に誤魔化せばよかったのに、ついカンナと言って言ったら、お母さんが慌てて和室に駆けこんでがさがさ箆笥の前でやってると思ったら、白い紙に包まれた浴衣を出して、

にっこりと笑って言うの。

「譲子、当日はこれ着ていきなさい」

って

恐る恐る白い包み紙を開けると、見たことも無い白い浴衣。白地に藤の花と鮮やかな蝶が描かれた大人っぽい浴衣。

確か、中学生の頃に紺地に赤い牡丹の描かれた浴衣を買ってもらった記憶があるけど、こんな浴衣は持っていた記憶がない。

「これね、お母さんが若い頃に着ていた物よ。と言っても数回しか着ていないから綺麗でしょう?」

にこにこ満面の笑みを向けられて顔が引きつる。お母さんは伝統のある女子校に通っていたらしく、茶道、華道といろいろ嗜んでいたらしく、時々着物で出かけたりもするから和装には慣れている。一方私はと言うと、和装なんて滅多に着ることもないし、浴衣ですら小学校と中学校で数回着たくらいだ。

「えっ……いいよ、浴衣なんて。普通の服で行くから」

「だめよ。デートなんだからおめかししないと。男の子はそういうところ、ちゃんと見てるんだから」

確かに藤柄の浴衣は可愛くて着てみたいと思ったけど、面倒だっという意識が強くて敬遠する。

「大丈夫よ、お母さんが着つけてあげるし、下駄も鞆もあるから、ねっ?」

そういう問題じゃないんだけど……とは思っても、娘のデートに

意気込んでいるお母さんに何を言っても勝てそうになくて、大きなため息をつく。

で、今日は昼過ぎから2時間かけて着付けとヘアメイク　メイクは軽くだけど、して貰って、笑顔で送り出されたのが30分ほど前。

ここ数日寝不足気味だったのと、帯の胸の締め付け、電車の揺れで新浦安に着くころにはげっそり。極めつけが駅前の大混雑で、吐き気が襲ってきたのだ……

あまりの気持ち悪さに、涙目になって口元を押さえる。

どうしよう……トイレに行った方がいいかな。それより、カンナにメールを。

しなきゃ　そう思って鞆から携帯を取ろうとして手を滑らせ、鞆を落としてしまう。

「あつ……」

最後の頼みの綱である携帯を遠くに落としてしまい、腕を伸ばしたけど、人ごみに遮られ、鞆を見失ってしまう。

最悪……どうしよう……

そう思った時。

行き交う人の足の隙間から、床に転がっている私の赤い鞆が拾われるのが見えて、そこにカンナが立っていた。

「カ、ンナ……」

危機的な状況に、タイミング良く現れたカンナに胸が熱くなり、さっきまでの苦しい気持ちがすうーと流れていく。

「譲子さん!？」

しゃがみ込んでいる私を見つけて、カンナが焦った声を出して駆けつけてくる。

「どうした？ どこか具合悪いの!？」

すぐ横にしゃがんで、気遣わしげに私の顔を覗きこんで来る。きつと私の顔は汗まみれで化粧もはがれてぐちゃぐちゃだったと思う。こんな情けない姿見られたくなかったけど、その時はそんなことも考えられなくて、ただカンナが来てくれたことで胸が苦しくて、安心して。

「ううん、ちょっと人ごみに酔っただけなの」

「大丈夫？ どこかで休む？」

私は首を横に振る。

「外に行こう、風に当たりたい……」

改札前は人の熱気で蒸し暑く、浴衣も熱くて動きにくい。外に出れば少しは気分も良くなると思っ、カンナに手を借りて立ち上がり、外に出る階段に向かって歩き出す。

カンナは私の手のひらを優しく包み、ゆっくりと歩いてくれる。

私を気遣って時々後ろを振り返し、私が不安げに見つめると、大丈夫だよ、そう言う様にぎゅっと手を握ってくれた。

駅前の人ごみの少ない場所まで来て、空いているベンチに座らせてくれた。

「ごめん……なんか、私具合悪くなってばかりで……」

旅行の時といい、今回と言い、カンナに迷惑ばかりかけている。自分の体調管理も出来ないなんて、私は自分が情けなくなる。

「気にしなくていいよ。そういう時もあるんだよ」

目の前に立ったカンナは、優しく双眸を細め、ぼんぼんと頭を撫でてくれた。

その気遣いが温かくて、カンナの優しさが胸に沁み渡る。

「何か、飲み物いる？」

カンナに首を傾げて聞かれ、私は頷く。

「ちょっと待ってて」

左右を見渡し、自動販売機を見つけて駆けていくカンナ。

カンナの姿を目で追いながら、足をブラブラさせ、ふうーっと細く息を吐く。

一昨日までの連続的な雨の影響でここ数日、気温がぐっと下がって、夜風は肌に冷たく心地いい。外の風に当たって、だいぶ人酔いの気持ち悪さが抜けて、胸をなでおろす。

ベンチの前の路を、家族連れや友達同士、腕を組んで仲良さそうに歩く恋人同士などが通り過ぎていく。その様子を見て、なぜだか胸が苦しくなる。

私とカンナって、周りからはどう見えるんだろう

二人で来ているから、恋人同士に見えるんだろうか……

友達　それが今の関係だと思うけど、今日はその関係に別れを告げる予感がして、どうしようもなくやるせなくなる。

地面に視線を落とすと、楽しい花火大会のはずが気分も沈んでく

る。じくじくと胸が痛み、眉根を顰めた時。

ひやりと小気味良い感触を頬に感じて、背筋を震わせる。

「きゃっ……」

見上げると、目の前にカナナが立っていて、ペットボトルを私の頬につけてにこりと笑っている。

「はい、ミネラルウォーターで良かったかな？」

「あっ、うん。ありがとう」

私は差し出されたペットボトルを受け取り、キャップを開ける。カナナは私に渡したのとは別に持っていたスポーツドリンクを開けてごくごくと喉を鳴らして半分ほどを飲み干す。

「具合はどう？ 気分悪いようだったら、今日はもう帰ろうか？」

「ううん、夜風にあたってたらだいぶ良くなったから大丈夫」

「本当？」

そう言っただけでカナナが腰をかかめ、小首を傾げて顔を覗きこんで来る。黒い澄んだ瞳が間近に迫って、ドギマギして目をそらしたい衝動にかられたんだけど。

私よりも先にふいっとカナナが視線を外して背を向ける。その行動に違和感を覚える。

「会場までバスも出てるみたいだけど、どうする？ 歩くと30分くらいかな？」

尋ねられて、私は携帯で時間を確認する。打ち上げの時間まではまだ1時間ほどある。

「出店とか見ながら歩いてたら、ちょうどいいんじゃないかな？」

私はとてもじゃないけど、買い食いをしたい気分ではないけど、きつとカンナは何か食べたりしたいだろう。具合悪い私に付き合わせて待たせてしまったから、カンナには少しでも楽しんでほしくて歩いて行く方を選ぶ。それなのに。

「大丈夫？ 歩ける？」

優しく気遣ってくれて、泣きそうになる。

私は苦しい気持ちに気づかれぬように立ち上がり、カンナの手を繋いで歩き出す。

「行こう」

一瞬、掴んだ手がビクツと震え、拒絶されたように感じたけど、カンナがゆっくりと歩き出して正面を向いて掠れた小さな声で言う。

「花火……楽しみだね」

「うんっ！」

だいぶ体調も回復して、だけどカンナがゆっくりとした歩調で歩いてくれて、会わなかった2週間の出来事をお互い話しながら会場へと向かった。

途中、カンナはたこ焼きの屋台と焼きそばの屋台、ベビーカステラの屋台によって買い食いをしていた。

焼きたてのほかほかしたベビーカステラは美味しくて私も好きだけど、カンナが実は甘党だと知って、笑ってしまった。

繋いでいた手は歩き始めて数分で、初めに寄ったベビーカステラ

の屋台で離されてしまつて、そのままだつた。

いつもはカナナの方から手を繋いでくることが多いのに、離されてしまった手になんだか寂しさを感じる。食べ歩きをするから仕方がないとは分かっているけど、なんだかそこに、距離感を感じて切ない衝動にかられる。

カナナの希望だつた2人だけで会っているのに、カナナはあまり私の方を見ようとはしないし、時々視線が合うとすつとそらされてしまふ。

駅で会つた時は、気持ち悪くて歩くので一杯いっぱいで気づかなかつたけど、楽しそうに会話するカナナが時折、ふつと切なげに顔を曇らせるのに、私は気づいていた。

どうしてそんな悲しそうな顔をしているのか気になって仕方がなかつた。

私のことばかり気遣つてくれるカナナはとても優しく、でもどこかよそよそしさを感じるのはなぜだろうか？

第34話 偽りのシゲナル

ドーン、ドドーン……！

ドーン、ドーンッ……！

藍寄りの薄闇の中、紅、緑、青、銀、金 色とりどりの大輪の華が力いっぱい、宵闇を照らしてははらはらと光の屑となり散っていく。

会場で首が痛くなるほど天を見上げては、大勢の人があまりの美しさに感嘆のため息を漏らしている。

私とカンナもその中で並んで立ち、夏の終わりの風情を彩っている花火を見上げて心を和ませる。

それなのに

私の胸は、じくじく痛んで切なく締め付けられる。

隣で笑っているカンナはなんだかどこかよそよそしくて、私の知っているカンナじゃないみたいで。

人ごみの中、肩が触れ合うほど近くに立っていてその熱を感じるのに、手の届かないもつとずっと遠くにいるように感じて、背筋が凍る。

思わず、カンナのシャツの裾を掴んでしまい、慌てて手を引っ込める。

「ん？ どうしたの、譲子さん？」

カンナが見上げていた夜空から私に視線を移し、首をかしげる。その顔が、打ちあがる花火に照らされて眩しく輝いている。

「えっ……と……」

カンナがどこか遠くに行ってしまう様に感じて　そんなことは
言えなくて、口ごもる私に、カンナはばつが悪そうに目を細め苦笑
する。

「譲子さん　」

カンナがすっと私の手を掴んで優しく握りしめる。私を見つめる
カンナの瞳が真剣な光を帯びて、艶やかに瞬く。

「俺に……何か言うことでもある？」

まっすぐに私を見据え、真剣な表情で聞いてくる。言葉は違うけ
ど、纏っている空気が、旅行から帰って来た日　私の部屋で、御
堂君と何かあったのかと聞いた時と同じに感じて、唇をぎゅっと噛
みしめる。

「ど……うして、そんなこと聞くの？」

その問いに答ええない代わりに、カンナが一瞬、握っている手に力
を込める。

カンナは視線を夜空に戻し、カンナには似合わない皮肉気な口調
で言う。

「ねえ、譲子さん。俺が譲子さんを好きって　知ってた？」

その言葉に、ドキンッと胸が跳ねてカンナを振り仰ぐ。ぴくりと
揺れた私の手を、カンナが優しく包み直す。

だけでもカンナは花火に視線を向けたまま私を見ずに、話を続け
る。

「一目惚れだったんだ。譲子さんに話しかける前、譲子さんが俺に気づく前から、俺は譲子さんと話してみたくて、どんな声なのかとか、どんな風に笑うのか　とか、すごく気になって」

そこで言葉を切って、カンナは視線を地面に落とす。

「……………」

花火はフィナーレに向けて連続して打ち上げられ、周りが歓声が一斉に大きくなり、何か言ったカンナの声がすべてかき消される。

ドドドドド……………」

地面から金色の火花が幾筋も立ち昇り、ナイアガラ滝のようになんげしく光を放って流れていく。

ドドンッ。

最後の一発が打ちあがり、残響と歓声が一気に高鳴り、割れんばかりの拍手が辺りにこだまする。

歓声が止むと、辺りを静寂が包みこむ。ざわざわと名残惜しげに会場を後にし始める人々の中、カンナは微動だにせずその場に立ちつくしていた。

「カンナ　？」

なんと声をかけたらいいか分からなくて、名前を呼ぶ。

長い間俯いていたカンナが上げた顔には、熱を宿して底光りする瞳が鋭く光っている。

会場に残る人はまばらで、ほとんどの人が花火の余韻に浸りながらも、すでに駅に向かって歩き出していた。

「讓子さん……」

そう言ったカンナの声は表情とは裏腹に、消え入りそうに切なく揺らいでいる。

「好きだ」

カンナの言葉がまっすぐ心に刺さり、切なく痛む。

少しの沈黙を挟んで、俯いたカンナが涙声で言う。繋いでいる手に力が込められて、私の鼓動がドキンッと跳ねる。

「ごめん……こんな風に言うつもりじゃなかったんだ。ごめん……」

なんでカンナが謝るのか分からなくて、私は首を横に振って、私の右手を掴んでいるカンナの左手に私の左手を添えて握りしめる。

「付き合っしてほしいとか、そんなことは言わない。ただ、俺だけを見てほしいんだ。讓子さんの1番になりたいんだ……」

1番になりたい

その言葉が、その想いが身に沁みて　ツキンと胸が痛む。ぎゅとと心臓を掴まれたように息苦しい。

「カンナ、あの……私……」

それなのに、自分の口から出た言葉に、自分自身で身震いする。

「ごめんなさい……私の1番は、カンナにあげられない」

どうしてそんな事を言ってしまったのか、自分でも分からなくて戸惑いが襲いかかってくる。

ぱっとカンナの顔を見ると、私から顔をそむけ、握っていた左手を強い力で剥がされ、掴まれていた右手からもすっと温もりが消える。

その行動に、カンナが全身で私を拒絶していることを感じて、どうしようもなく苦しくなる。

私がカンナの告白を断ったからなのに、カンナに拒絶されたことが悲しい。

ドキンッ、ドキンッで、胸が早鐘を刻んで、耳鳴りがする。さっきまでしなかった酷い頭痛が襲ってきて、眉根を寄せる。

どうして、あんなことを言ってしまったんだろう

私は今日、カンナと会って、ちゃんと真っ正面から気持ちを受け止めて、自分の気持ちを見極めようと思っていたのに

カンナの誠意に答えるつもりだったのに

1番になりたい その言葉が私の胸の奥底に閉まっていた気持ちを刺激して、どうしてもカンナに答えることが出来なかった。

これが私の答えなの？

自分でも、自分の出した答えが信じられなくて、どうしようもない衝動にかられるのに 動けない、いい訳の言葉すら出ない。

どのくらい、その場に立っていたのだろう。

さっきまではすぐ側にいたのに、私とカンナの間には埋められない2歩の距離。気まずい沈黙が流れている。

その沈黙を破るように身じろいだカンナが、目元に優しさを含んでふっと苦笑する。

「そろそろ、帰ろっか……？」

カナナはどんな気持ちでそう言ったのだろうか
遠慮がちに、優しく私の手にカナナの手の甲が触れる。

「まだ人混みがすごいから。迷子になったら困るから……」

いつもだつたらそんないい訳っぽいことも言わないのに、そう言
ってからそつと指先だけを握って歩き出した。些細な衝撃で離れて
しまうような儂い握り方で。

第35話　かき乱される鼓動

8月29日、まだ8月だというのに夏休みが明け、今日から学校が始まる。ゆとり教育とか休日が増えたりで、今は夏休みも8月いっぱいまでではなくて、最後の週から始まる。

うちの学校は2学期制だから、2学期ではなくて、前期の後半が始まるっていうこと。

花火大会の日

私とカンナは手を繋いだまま、一言も言葉を交わさずに駅まで歩き、電車に乗って帰ってきた。まるで繋いでいる手の温もりが嘘のように、2人とも、そこには存在しない様に。

家に着くと、カンナから『今日はありがとう。暖かくして寝るんだよ。おやすみ』とメールが着た。私も、『ありがとう。おやすみ』とだけ返信し、次の日の日曜日にはメールも電話もしなかった。

どうせ、月曜日になったら電車で会えるんだから　そう思ったのに、朝の電車にカンナの姿はなかった。

今日は始業式じゃなくて全校集会があつて、その後は普通に授業だから、カンナが遅めの電車に乗った理由が分からなかった。もしも、寝坊ならメールが来るはずなのに、今日はいつもくるおはようメールも寝坊のメールも着ていなかった。

どうしたのだろう

そう思う反面で、カンナに合わせる顔がなくて、一緒の電車じゃなくて良かったと思ってしまう。

好きだと言われて、付き合わなくてもいいって言われたけど、結果的に私はカンナの告白を断ったことになる

だから、カンナがもう私の顔なんか見たくないと思って、電車の時間をずらしたんだとしても仕方がないことだと　納得しなければいけないんだとは分かっているけど、心が痛んで状況を受け止められないでいた。

自分が招いた結果だけど、こんなつもりじゃなかった

告白を断っても、カンナとは友達の関係が永遠に続くと思っていたのに、それは虫がよすぎる願いだっただけかな　？

電車を降りて、いつもだったらまっすぐに学校に向かうのだけど、今日は何となくコンビニに入り、特に興味があるわけでもないのに雑誌コーナーに向かう。

通学路の見渡せる硝子の前の雑誌コーナーで適当に雑誌を手にとり広げる。横には同じように制服を着て待ち合わせてる友達なんかを待っている学生が数人いる。

私はほとんど雑誌には目も向けず、正面の硝子越しに通学路を眺めていた。

もしかしたら、カンナが通るんじゃないだろうか　そんな期待を胸に。

いつもより1本か2本、乗り遅れただけかもしれない。

電車が到着し駅から降りてくる人の集団が来る度に、道路に視線をくぎ付けにして目を凝らす。

集団が過ぎ去って、その中に探していた人物の姿がいないと、次かもしれない、次かもしれないと思ってどどん時間が立っていく。何本くらい電車を待ったのだろうか……駅から出てくる学生の数

が増え、そろそろ学校に向かおうと思った時、ぽんつと肩を叩かれて、驚いて振り向く。

「おはよ、桜庭。コンビニにいるなんて珍しいな」

もしかして そんな淡い期待を持って振り返ったけど、後ろに立っていたのはカンナではなくて御堂君だった。

一瞬、身じろぎ、すぐに笑顔を張りつかせる。

「あ……御堂君、おはよう……」

変に思われなかったかな……

「えっと、ちよつとこの雑誌見たくて……えへへ」

そう言って雑誌を閉じ、棚に戻す。

「御堂君もコンビニに用事だったの？」

御堂君の手元に視線を向けたのだけど、何かを買った様子はなく、首をかしげる。

「いや、俺はコンビニに桜庭が見えたから……」

そこで言葉を切り、斜め下を向いて髪をいじる。その先に続く言葉がなんとなく予想出来て、皮肉気に苦笑する。

そんな私を、ちらっと上目使いに見た御堂君の目元には優しさが混じっていて、心配させてしまったんだと気づく。

「そうなんだ？　じゃ、一緒に行こうか？」

そう言って、コンビニを出て歩き出す。

御堂君は知っているから 私とカンナがいつでも一緒に登校していることを。だからきつと、カンナを待っていたんじゃないかって気づいているんだ。

それでも何も聞いてこないのは、御堂君の優しさだって知っているから、今だけは その優しさに甘えてしまった。

学校に着いたのは始業の20分前で、クラスの半分以上の生徒がもう登校していた。沙世ちゃんもすでに登校して来ていて、教室に入ってきた私を見つけて近寄ってくる。

「おはよー、譲」

「おはよう、沙世ちゃん」

普通に挨拶したつもりなのに、沙世ちゃんは眉根を寄せて下から顔を覗きこんで来る。

「なんか譲、元気ない？」

「はは……そんなことないよ」

乾いた笑いで誤魔化せたとは思わないけど取り繕う気力も無くて、机の横に鞆をかけて自分の席に着く。

「あつ、そうだ。生物の問題集で1カ所分らないところがあるんだ、写させてくれる？」

「うん、いいよ」

昨日、沙世ちゃんからメールで宿題を写させてほしいって言われ

て、今日は早めに来るって言われていたことをすっかり忘れていた。

「ごめん遅くなっちゃって」

「いいって、いいって」

鞆から夏休みに宿題をやったノートを取り出し、鞆と一緒に入っていた旅行の写真に気づく。

「そうだこれ、夕貴が焼増しした旅行の写真」

「旅行の写真？ 見たいっ……けど、今は宿題が先だから後でね」

「うん、分かった」

沙世ちゃんは受け取ったノートを持って自分の席に戻っていく。

私は手元に出したアルバムに視線を落とす。

これ、カンナにも渡さないといけないのに……

本当だったら、電車で渡す予定だった。それなのに、カンナはいつもの電車に乗ってこなかった……

ふうーとため息をついて、それから携帯を取り出す。

ぐだぐだ考えるのはやめよう！

結局、考えても答えは出ないんだ。それなら、感じたままに行動して、答えを自分で見つけるしかない。

とりあえず今は、カンナにメールしよう！

このままギクシャクして、カンナと友達の関係にも戻れないなんて嫌だから。

何かに突き動かされるようにメールと書いて送信する。

☞ To: 菊池 カンナ

subject: おはよう。

本文: 今日から学校だね。夕貴から旅行の写真を預かってて、

朝渡そうと思ったんだけど会えなかったから、放課後に会

えるかな？』

メールを送った瞬間からドキドキと緊張する。
以前の私だったら、こんなに積極的に動くことはなかった。何か
が着実に変わりだしていることに　気づき始めた。
手の中に握りしめていた携帯が揺れ、着信を知らせる。

『From: 菊池　カンナ
subject: おはよー。』

本文：寝坊して今学校に着いたとこ……

ごめん、今日は部活のミーティングがあって何時に終わる
か分からないから、

写真はまた今度でもいい？』

カンナから返信が着たことにほっとする反面、メールの違和感に
気づく。

今度でもいい

普通だったなら、明日でもいいって返信が来るはずなのに。それで
はまるで、明日の朝も、一緒の電車には乗ってこないということ
暗示しているような

胸騒ぎに、右手で胸元の制服を握りしめる。

カンナ　！？

第36話 さよならのメロディ

なんだか分からない胸騒ぎを抱えたまま、夏休み明けの1日目はあつという間に終わり、帰りのホームルームを残すだけ。

1カ月半の長期休暇を挟んだ後の初日からの6時間授業に、教室の中の生徒達はぐったりとしている。

夏休みの宿題を提出したばかりなのに、4週間後に迫る前期期末テスト対策の宿題がどっさりと出されて、皆うなだれている。

おまけに宿題が終わっていなかった者は居残り補習を命じられ、昨日までの休みとのギャップにみんなついていけないでいる。

教室に担任が入ってくると、あからさまに元気のない生徒に苦笑し、手にじかにホームルームを切り上げる。

「まっ、頑張れよ」

そんな他人事のようなセリフを言って教室を出ていく担任に、クラス中からブーイングだ。

だけど、私が沈んでいるのはそんな宿題や迫りくる期末テストを憂いているからではない

試験を心配している方が、幾分か気分はましだったはずなんだ。

勇気を振り絞ってカンナに送ったメールの返信が、私とカンナが友達の関係にさえ戻れない位置に立っていることを語っていて、胸が壊れそうに痛む。

なんで 友達以上の関係になれないなら、友達の関係さえ続けちゃいけないの？

カンナは、そんな簡単に友達の関係を切り離すような、薄情な子ではないと思っていたのに

もう、私の顔を見ることさえ嫌になってしまったの？

胸の中に、どろどろとした嫌な感情が溢れて来て、気持ち悪い。悪い方に考え出すとその思考は止まらなくて、ミーティングがあるというカンナの言葉さえ疑わしく思えてくる。

私に会いたくないから、口実に使ったの

こんな自分は嫌なのに、どうしようもなくて、苦しい。

「ねえ、譲」

真つ黒の闇に飲み込まれそうだった時に、沙世ちゃんに話しかけられて、ぱっと顔を上げる。

「あつ……」

その時の私は、どんなに情けない顔をしていただろうか。もし、沙世ちゃんが声をかけてくれなかったら、私はもうカンナの事を信じられなくなっていたかもしれない。

「譲、大丈夫？ 顔色悪いよ？」

「うん、大丈夫だよ……それよりどうしたの？」

「今日も図書館に寄って行くんでしょ？ 私も一緒に行つていいかな？」

「えっ……」

確かに、いつもだったら迷わずに放課後は図書館に行くんだけど、カンナを待つ為に

でも、今日はそんな気分じゃない……っていつか。

「ごめん、私、今日は部活なんだ。今週、大会があるから」

「そうなんだ」

「うん。でも、沙世ちゃんが図書館行くななんて珍しいね」

いつもだったら、私が誘っても絶対に一緒に行かないのに。

「今日、ブラバンは部活なくて。でも熊本君待つから、暇つぶしに一緒に図書館行こうと思ったんだけど、部活なら仕方ないね」

その言葉にドキンとする。さっき引っこんだどす黒い感情がじわじわと寄せ付ける。

「あの……テニス部、今日はミーティングで長くなるんだって……」

もしかしたら、ミーティングがあるというのは嘘かもしれない
その疑いを晴らしたくて、沙世ちゃんに尋ねる。

「あー、そんなこと言ってたね、遅くなるって」

ほっと安堵の息をはく。

よかった 本当に、よかった。一人胸をなでおろしていると。

「譲もカンナ君のこと待つんでしょ？」

にやついた顔で聞かれて、困ってしまう。

「えっと、今日は先に帰っていいって言われてるんだ。私も部活長引くかもしれないから……」

部活が長引くかもしれないのは本当だけど、帰る約束は して

いない。

「そだ、これ、旅行の写真見ながら待ってたら」

鞆の中から朝渡しそびれていたアルバムを渡す。

「ありがとー、これで時間が潰せるよ」

沙世ちゃんはにこりと笑って受け取る。

「夕貴が気に入った写真は抜いていいって言ってたよ。あと、見えないのカンナと熊本君と河原君だから、沙世ちゃんから熊本君に渡ししてくれる？」

「うん、分かった」

「じゃー私、そろそろ部活に行くから」

「うん、頑張つて」

笑顔の沙世ちゃんに見送られ、部室棟に向かって歩き出した。

部室で競泳水着に着替えて、気持ち切り替える。

部活中はタイムのことだけ考えよう……

もう考えるのに疲れてしまって、最近、ない頭でいるんなことを考えてばかりいたから頭が変になりそう。考え過ぎて疑心暗鬼になって、真実すら陰って、見失ってしまいそうだった。

今だけは、考えるのをやめてもいいかな

今朝、感じたままに行動して自分で答えを見つけようって思ったばかりなのに、弱気になる自分に苦笑が漏れる。

「だけど　頑張ろうって思っても頑張れない時は、どうしたらいい？」

パシャツと水面から顔を出し、荒い呼吸を繰り返してプールサイドに上がる。

「桜庭さん、絶好調ねっ！」

ストップウォッチを握った3年の近野マナージャーが嬉々とした顔で私に話しかけてくる。

「タイム伸びてるわよ、その調子で明日も頑張りましょう！」

この調子でいいのかな　　心の中で自問して、苦笑する。

「はい、次っ！」

マナージャーはスタート横に移動して、次の人のタイムを計りに行く。

空を見上げると、私の心を写したようにどんよりとした雲が広がっている。それなのに空気はまとわりつくようにじめじめと暑苦しい。

水面は雲を映して灰色のなんとも寂しげな色になっている。

カナナと音信不通になってからもう5日経つ。当たり前になつてきた登下校はもちろん一緒じゃないし、メールも電話もしていない。月曜日みたいに私からメールをすれば返事は返ってくるだろうけ

ど、素っ気ないメールを見るのは心が痛むから、私からメールを送ることも出来ないでいた。

このまま私とカナナは3カ月前の關係に戻るのだろうか

私はフェンスにかけていたパーカーを羽織り、プールから出て中庭を突っ切る。

水着姿であんまりうるつきたくなかったけど、じっとしていられなくて歩いていく。

学校の敷地を囲むフェンスに指をかけて、鼻が触れそうな程の距離に近づく。学校の南側、この場所から里見高校の運動場が見え、端にテニスコートも見える。

グラウンドやテニスコートにいる人影は見えても顔までは分からない。それでも、あそこにカナナがいると思うだけで、胸が熱くなる。

どうしたらいいのだろう

何度考えてもいまだに答えの出ない問いを、もう一度自分に投げかける。

たった3カ月前。カナナと出会ってから一緒に過ごした日々はほんのちよつとだけど、ついこの間知り合っただけかとは思えないほどカナナの隣は居心地が良くて、今更知り合う以前の他人になんか、戻れそうにもなかった……

「もう、私とカナナは他人……？ 友達にも戻れないの……？ そんなの嫌だよ……」

漏れた声が涙声に変わって消える。

タイムが伸びたって、それを横でカナナが笑って聞いてくれなかったら、嬉しくなんかない。

私の心の中にはいつのまにかカナナの居場所が出来ていて、いまは心にぽっかりと心が空いている気がする。

気持ちを落ちつけるように目を閉じて、プールに向かって踵を返し中庭を通り向けていた時、ばたばたと教室棟から足音を響かせて沙世ちゃんがすごい剣幕で走ってきた。

「譲ーっ!？」

沙世ちゃんの表情は緊張で強張っていて、瞳孔が開いている。私を見つけるなり駆けよる。

「ねえ、譲、知ってたの？ カンナ君が……」

あまりにすごい勢いで走ってきたからか、息が続かなくて言葉を切る沙世ちゃんに、私は首をかしげる。

「カンナが、どうしたの……?」

カンナの名前を聞いただけで、どうしようもなく心が揺さぶられて、平静じゃいられなくなる。

心なしが、声も震える。

はぁー、はぁーと肩で大きく呼吸をし、息を整えた沙世ちゃんが一気に捲し立てる。

「いま熊本君からメールで聞いたんだけど、カンナ君留学するって。学校で毎年、外国語の成績がトップの人が数人選ばれてオーストラリアの兄弟校に留学する制度があって、それにカンナ君が選ばれたってっ!」

「カンナが……留学?」

外国語が得意とか、留学するとか、そんな話は一度もカンナの口

から聞いたことはなくて、はじめて聞く話に胸がツキンツキンと痛み始める。

「知らなかったの!? そのことで、カンナ君と喧嘩してたんじゃないの……?」

私の戸惑いがちな声に、沙世ちゃんが眉を顰める。

「えっ……」

この5日間、確かに私は気持ちが沈んでてあからさまに普通じゃなかったかもしれない。けど、沙世ちゃんはそんなこと一度も聞いてこなかった。普段通りに話しかけられて。

いつもの沙世ちゃんだったら、興味の引かれたことにはすぐに釘を突っ込んで来るのに、この5日間、カンナの名前を口にしたことはない。

「夏休み明けてから、譲、ずっと元気がなかったじゃん? カンナ君と何かあったのかなって思ってたけど、熊本君に止められてたの、2人のことには口出すなって。何かあるなら譲から言ってくれはすだから、待つのも親友だ　って言われて、聞いたくて仕方がなかったけど、ずっと我慢してたんだよ?」

ぶくつと頬を膨らませて言う沙世ちゃん。

「そうだったんだ……」

沙世ちゃんの優しさが胸に沁みる。

「それより、留学の事知らなかったの?　それが原因で一緒に帰っ

てなかったんじゃないの？」

心配そうに見上げてくる沙世ちゃんに、花火大会での出来事を話した

「そうだったんだ……それで譲は、答えを見つけたの？」

その質問に、渡り廊下の壁に背をつけて隣に座っている沙世ちゃんを見て、下唇を突き出してふうーっと細かい息を吐き出し、苦笑する。

花火大会の時、カンナに言われた言葉　　1番になりたい。

それは私が中学の時、御堂君に望んだことで、私が心の中で温めていた大事な気持ちだった。

だからあの時、その言葉を聞いて、心に踏み込まれて　　怖かった。

もしカンナに私の1番をあげたら、やっと元の関係に戻った御堂君と私の友情まで壊れてしまうようで　　逃げたんだ。

大事な物を犠牲にしないで、何かを得られることは出来ないのに

腕に抱えたすべてのものを掴みとろうとしたから、欲張って、指の隙間から本当に大事な物がこぼれ落ちてしまったんだ。

今でも御堂君のことを考えると、胸がざわつく。でも、それは前みたいな嵐のような激しいものではなくて、優しく心震わせる温もりで。

カンナだけが私にいろんな気持ちを教えてくれる。カンナが私を弱くもし、強くもする。カンナが絡めばそれだけで胸がいつぱいになるのだ。今だって、カンナのことと胸がいつぱいなの。

なんで私は、こんなになるまで気づかなかったんだろう

遠く離れていってしまったから、それがどんなに大事なものだっ
た気づくなんて。

近くにあり過ぎて、その存在に気付かなかったの？

手の届かない所に行ってしまったから気づいても遅いのに

第37話 だから、どうか1つだけ

9月3日、土曜日。新習志野の水泳場に向かう電車の中、携帯の着信履歴がないことを確認してパタンと閉じて鞆にしまい、ため息をつく。

昨日、部活が終わってからカンナにメールをしたけど、予想外と云うか予想通りというか 返事は来なくて、今確認してみたけどカンナからのメールは来てなかった。

沙世ちゃんからの情報はおおまかな部分だけで、いつから留学するのかとか具体的な事を知ることが出来なかった。だから私は、直接カンナから話を聞きたくて、『話がしたい』ってメールをしたんだけど、会うとも会わないとも返信は来ない。

カンナはこのまま私とは会わないで留学するつもりなのだろうか
そう考えて、1つの疑念に変わる。

花火大会の日、言ったカンナの言葉を思い出す。

『付き合ってほしいとか、そんなことは言わない』

もしかしたらあの時点で、カンナは自分の留学が確定しててことを知ってたのではないか。だからあんな言い方をしたの？

ただ、私の気持ちを確認したかっただけのような言葉
カンナとの関係を修復しようと思死になってる私だけど、カンナに会って、なんと言えればいいのか分からなかった。

会って、もしカンナに無視されたら

友達以前の関係に戻りたいって言われたら

そんな事を想像して、恐ろしさに心がぶるりと震える。

カンナは、うちよせてはかえる波のように、徐々に私の中で存在

を主張して、いつの間にか、なくてはならない存在になっていた。

この気持ちをカナナに伝えたい。

御堂君の時みたいに曖昧にしたり、タイミングを見失って自分の気持ちまで見失ってしまう そんなことにはしたくなくて。

ただどカナナに会う、あと一步の勇気が出なくて、私は携帯を握った拳に力を入れて額に近づけ、ぎゅっと目を瞑る。

だから、どうか1つだけ賭けをさせて

今日と明日の水泳大会で、自己ベストのタイムを出せたら ほんの少し、前に進む強さを持てたら、カナナに会いに行く って。

沙世ちゃん経由の熊本君情報で、カナナ達も今日と明日は国府台競技場でテニスの大会があると聞いた。

テニス大会のある国府台競技場は学校のすぐ側、水泳大会がある新習志野水泳場は学校から1時間の距離。

時間的に今日は国府台に行くことは出来ない。だから自己ベストを出せたら、明日

いつだって、私はカナナからのアクションを待ってて受け身だった。初めて声をかけられ時だって、一緒に登校しようと言われた時だって、デートの時だって。

だから今度は、私から動くことと思うの。

前のレースが終わり、召集がかけられ自分のコースに並び、ゴールを目の位置に合わせる準備を整える。

私が出る種目は自由形200Mと400M、予選が今日で決勝が明日。うちの学校の水泳部は人数が少ないから、掛け持ちで2種目出る人が多い。

これから始まるのが200M予選で、10コース4組、その内上位タイム10人が明日の決勝に進むことができる。

私の200Mの自己ベストは2分12秒36。

それを目標に、今日まで頑張ってきたことを、今この瞬間、すべ

てをかけて泳ぐ。

『位置に着いて』

スタートのアナウンスが流れ、会場内が静寂に包まれる。
プールサイドからスタート台に登って台の端に足をかける。右足と左足の隙間は拳大で。

『用意』

膝を曲げ腰を折り、伸ばした両手を台につける。緊迫の一瞬。
パンツ！

ピストルの音で、台を蹴り出し宙に舞う。放物線を描いて僅かな水しぶきを上げて水面に潜り込む。それから必至。

ただ美しいホームで、腕を掻き、一杯水を蹴りつける。
水色と泡とざわめきの世界を、がむしゃらに泳いでいく。あつという間に50Mを泳ぎターンをして折り返す。それを3回繰り返す。400Mもそうだけど、200Mはペース配分が大事。自分の力を限界まで出しきつて、いかに体力を消耗しないで泳ぎきるか。自分の力をどこまで信じられるかに懸かっている。

ザバツ！

水面を切り、壁に手をついた格好で顔を上げる。足は立ち泳ぎの格好で。水深が2Mあるから。

プールサイドに上がると、側で待っていた近野マネージャーがタオルとパーカーを渡してくれて、ありがとうと言って受け取る。

『只今の結果』

アナウンスが流れ、結果が電光掲示板に表示される。第7レーンの私のタイムは2分13秒65。自己ベストには届かなかったけど、

今の段階で私のタイムは2位。残りのレース、第4組はベストタイムが1番早い人達で構成されている。4組の中で9位だった人よりもタイムが速ければ決勝に進めて、もう一度自己ベストに挑戦する機会を得ることができる。

他人のレースだけど、自分事のように祈る思いで見つめる。

スターターの声、ピストルの音と水面の軋む音。たった2分間だけど、泳いでいる時よりも長く感じられる時間だった。

「お疲れ様ー」

口々に言っつて、地面に置いていた荷物を持ち上げ、作っていた人の輪からちらちらと人が抜けていく。

大会1日目が終わり、水泳場の外、駅まで輪になって連絡事項とミーティングを済ませ、高濱部長たかはまから解散の合図が出たところだった。空はすっかり青寄りの薄闇に塗られ、西の空の端がつつすらとオレンジ色に光っている。

私も足元に置いていたスポーツバックを握り肩にかけて歩き出す。

「桜庭さん、お疲れー」

高濱部長と話していた近野マネージャーが近づいてきて話しかける。

「お疲れ様です、近野先輩」

「400Mは残念だったけど、200M決勝進出おめでとう」

「ありがとうございます」

そうなんだ。400Mは自己タイムさえ出せず、決勝も行けなかった。200Mは予選で自己ベストは越せなかったけど、タイム8位で決勝に進むことが出来たから、明日、もう一度挑戦することが出来る。

明日の200M決勝にかけることができる

「明日は、試合がない人は自由参加だから人数がぐんと減っちゃうけど。明日も頑張りましょうね」

「はいっ」

私は意気込んで頷いた。

この調子でいけば、いける

絶対なんて言葉は絶対じゃなくて嫌いだけど、根拠のない自信が、その時の私にはふつつつと湧いてきていた。

『ちよつと、桜庭さん！？ 今どこにいるの ！？』

走りながら出た携帯の向こう側から、近野マネージャーの焦った声が聞こえる。

水泳大会2日目。私はスポーツバックを肩から斜めにかけて電車を降り、競技場に向かっていた。

「えつと、今は……」

そこで言葉を切りつて口ごもり、視線を空に向ける。

西の空に沈みゆき太陽が、空を切ないオレンジ色に染めている。

『もう、どこでもいいから、早く戻ってきて！ 表彰式が始まっちゃうわよっ！！』

200Mの決勝、私は第9レーンでスタート台に立つ。数えるほ
どしか経験のない決勝戦は、予選とは比べ物にならないくらい緊迫
感があつて、心臓が飛び出しそうなくらいドキドキと鼓動がうるさ
い。

予選では力の8割ほどしかださない人もいて、正直、決勝戦のレ
ースに着いていけるかどうか自信もない。
だけど

私はこの試合に、大切な物を掛けている。
自分自身との戦い。

どこかでもういいやって弱音吐いて投げ出して、後ろばかり向い
ている私にさよならする。進むべき先に待っている自信と勇気を掴
むために

『位置に着いて、用意』

スターターの声が予選よりも明確に耳に響く。頭の奥に浸透し、
体が戦慄する。

予選の時よりも緊張しているのに、それを上回って体が研ぎ澄ま
されている、不思議な感覚だった。

水に入った瞬間から、自分が自分じゃない様な水に馴染む感覚に
夢中で手足を動かした。ただ前に進むだけに

泳いでいた自分はよくわからなくて、プールサイドに上がると近

野マナージャーと高濱部長が駆けよってきて強く抱きしめられた。

「やった、すごいよ桜庭さんっ！」

興奮気味のマナージャーにぎゅっと抱きしめられて、目を細め苦笑する。

マナージャーの喜びようからすると、自己ベストは更新できたのかな……

いつもだったら手元のストップウォッチで測定したタイムを教えてくださいるのに、興奮しすぎてそれすらも忘れてる。

私は200Mを泳ぎ切った疲労感よりも、なんだか心地良い達成感に包まれていて、タイムばかりを気にしていたのが少し恥ずかしくなる。

『只今の結果』

場内にアナウンスが響き、電光掲示板に1位からゆっくりと名前が出る。

『1位……成山高校、吉綱夏絵さん……』

静まり返った場内が歓声と拍手に湧く。アナウンスが2位を読み上げるよりも早く、電光掲示板に名前が出、次いで3位の名前が出て、私は大きく目を見開いた。

『……3位、国府台南高校、桜庭譲子さん……』

自分の目と耳が信じられなくて呆然としている私に、再びマナージャーが抱きつく。

「おめでとう、桜庭さん！ 3位よ、やったあー！」

自分の事のように喜んでくれるマネージャー、部長や他の部員、顧問から祝福されて笑みが漏れる。

タイムは2分09秒98で、予選より4秒近く早くなって自己ベストを大きく大きく上回っていた。4位との差はたった0秒03、5位とも0秒05しか変わらない僅差で3位だった。

第38話 はじまりはクレッシェンドで

自分の試合が終わって、まだ部長の決勝戦まで時間があるから着替えるために荷物を持って更衣室に行ったんだけど、携帯のディスプレイが光っている事に気づいて慌てて画面を開く。

着信が3件とメールが1件。すべて沙世ちゃんからで、慌ててメールを開く。

『From:南 沙世

subject:譲まだ試合？

本文：私はいま国府台競技場に来てるんだけど、もうすぐカンナ君達の試合始まるよ！

早く来て』

というメールが数分前に届いていた。

試合が始まる つまり、早く国府台競技場に向かわないと、私が着く頃には試合が終わって帰ってしまって、カンナに会うチャンス逃してしまう。

この水泳大会に賭けて自己ベストを出せて、これでやっとカンナに会いに行く勇気を手に入れたのに、このまますれ違ってしまふのは嫌だった。

まさか決勝にまで進むと思ってなくて、本当だったら今頃国府台競技場に行けてたのに とか、うだうだ考えるのをやめて更衣室に駆けこむ。

手早く着替え、服も畳まずにスポーツバックに詰め込む。更衣室を出て、一目散に駆けだした

本当は近野マネージャーにだけでも先に帰ることを伝えるべきだ

つたんだろっけど、あまりに焦っていてそんなことも思いつかなくて、私は新習志野駅から電車に乗り込み国府台を目指した。

いつもだったら電車の中で読書したり有意義に時間を使えるのに、ただ焦り募る想いにドアの前に立って景色を睨んでいた。50分の時間がすごく長く感じて、国府台駅に着いてからも競技場まで全速力で走る。200Mを全力で泳ぎ切った後に、まだこんな体力があるのかと言うほど足が動いて、自分でもびっくりする。

競技場に近づいた時、携帯が鳴ってるのに気づいて沙世ちゃんだと思っただら　近野マネージャーからの電話だった。

「すみません、マネージャー……私、表彰式には出られません」

表彰式のことなんかすっかり忘れて飛び出してきた私。出られませんが、というか無理だもんね。

私は走りながら呼吸を整え、誠意をこめて謝る。

「いま学校の側にいるので……本当にすみません」
「学校！？　なんでっ!?!」

驚きの声を上げたマネージャーが、沈黙を挟み、大きなため息をつく。

『分かったわ。学校にいるなら今から戻ってもらっても時間的に間に合わないし、部長と顧問には私から説明しておいてあげる』

「ありがとうございますっ!」

『その代わり……、今度から途中で抜ける時は、ちゃんと一言いつて行くのよ!　いい?』

「はい、はいっ」

いっぱいマネージャーに迷惑をかけることになるのに大会を無断で抜け出したことを許してくれたマネージャーに言葉では言い尽くせない感謝を感じて電話を切った。

電話を切ると、すぐに再び着信音が響き、今度は沙世ちゃんからだった。

『譲、いまどこ？』

「えっと……」

マネージャーと電話している途中で競技場に着き、敷地内の公園を抜けたところだった。

「もう競技場だよ、テニスコートの近く」

このまま進むと陸上競技場、左に行くとテニスコートがある。

『カンナ君の試合始まるから、はやくっ』

沙世ちゃんに急かされ、左の道を走り抜ける。

「……」

フェンスの外のギャラリーの中から沙世ちゃんが手を振って私を招く。

「沙世ちゃん……お待たせ……」

「譲、すごい汗……」

そう言って、私から一歩話せる沙世ちゃん。酷い……走ってきたんだから仕方ないじゃない。勇気と自信を手に入れたはずなのに、

沙世ちゃんの何気ない一言で落ち込んでしまう。

「見て、カンナ君の試合だよ。カンナ君が勝てば優勝なんだからっ
！」

興奮気味の沙世ちゃんをよそに、フェンスに近づいて中のテニスコートを覗く。緑の萌ゆるコートに、白地に紺色のラインの入ったユニフォームを着たカンナの姿が目飛び込む。

カンナの動きだけがスローモーションで見えて、切り取った絵のようにとても綺麗だった。テニスをするカンナは、表情は見えないものの、テニスに対して真剣な姿勢で取り組んでいることが窺えた。テニスの事はよく分からないけど、カンナがすごいことだけは、観客の声援や感嘆から伝わってくる。

しばらく、カンナに見とれて立ち尽くす。

見とれていたことにはっと気付いた時には、試合は終わっていて、コートの中央、ネットを挟んで試合相手と固く手を握り合いお辞儀をしてコートを出ていく。

コート脇で見守っていた里見高校の部員たちの歓声は一際大きく、勝ったのかな？ 沙世ちゃんに聞いてみようかと横を見た時、部員に囲まれているカンナが一瞬、こっちを見た様な気がする。

まさかね そう思ったのに、気のせいではなかったみたい。

カンナが近くにいる人に何か言い、背中を向けたままこっちを指を指しているのが見えて、カンナが話している相手が熊本君だと気づく。

振り返ったカンナと視線が絡み合い、カンナが人混みを掻きわけて客席の中に消えていく。その様子を首を傾げて眺めていると、横に立っていた沙世ちゃんが私の制服を引っ張ってぴよんぴよん跳ねる。

「カンナ君、譲に気づいたみたいよ」

「えっ？」

もういちど首を傾げてカンナが消えた客席に視線を向けると、客席を抜けたカンナが、テニスコートを囲うフェンスの出入り口を出て、私の方に駆けてくる。

わわっ。

カンナが気づいって、こっちに来るっ。

その行動に私は慌ててしまう。カンナと話すために来たのに、いざカンナが目の前に現れると緊張で、背中に冷や汗がでる。

「譲子さん……どうして……」

どうしてと言われると困ってしまう。

「えっと、カンナの試合を見に？」

自分の事なのに、語尾が疑問形になる。

そんな私を睽目して見つめてたカンナが口を開きかけて、試合を見守っていたギャラリーの只中にあること、周りからの視線にたじろいで、私の手を掴んで歩き出す。

「譲子さん、ちょっとこっち来て……」

後ろで、おめでとうとか、すごい試合だったぞって声が聞こえてカンナの後ろ姿に視線を向けると、耳がほんのり赤く染まっていた。

陸上競技場の正面スタンド裏の並木まで歩いたカンナがふいに立ち止まる。

「……………」

カナナが何か呟いて、沈黙が2人の間に押し寄せる。

私はなんて話を切りだしてらいいか分からなくて……繋がれていない方の手を顎に当ててうーんと考え込む。

ぴったりの言葉を思いついて、カナナの正面に回り込んで尋ねる。

「私に何か言うこと、ある？」

いつかカナナから言われた言葉をそっくり返すと、カナナが目を見張って私を見る。

さあーっと風が吹いて、生い茂る青葉を揺らしさらさらと葉擦れの音が優しく耳を撫でていく。

額ににじんだ汗を手の甲でぬぐったカナナは、眉根を寄せて苦虫でも噛んだように渋い顔をして私から視線をそらす。

「どうしてそんな顔するの……？」

思わず、思ったことを口にしてしまうと、繋いだ手にカナナがあまりにも力を込めるから、私は眉根を寄せて肩を震わす。

「譲子さんは、どうしてここに来たの？ 沙世さんに呼ばれたから？」

一瞬前の複雑な表情を見事に隠して、カナナが不自然なくらい爽やかな笑顔を作るから、私は頭にきちゃって、繋がれていた手を振りほどいて、叫んでいた。

「1週間も音沙汰なしで、どうしたのはいんじやないの？」

そう言っ て私は横を向く。

「私、聞いたの……」

体の横に下げた左の二の腕をぎゅっと右手で握り、聞いたかった言葉を吐き出す。

「カンナが留学するって。どうして教えてくれなかったの？ もう私とは友達もやめるから……？」

自分でも信じられないくらい声が震えている。すると。

「……ごめん」

ドキッとするような憂いを帯びた声で言われて、私はびっくりしてカンナを仰ぎ見る。

「ごめん……」

もう一度謝るカンナの瞳は曇っていて、切なく胸を締め付けられる。

それがカンナの答えなの？

「分かった」

長い沈黙を挟んでから言う。

「カンナと友達するのはやめる」

自分で歩いて掴んだ勇気と自信を片手に握りしめ、きつと顎を引

いて、まっすぐにカンナを見つめる。

「……………」

カンナが声にならない声を出し、悲痛に顔を歪ませて斜め下に視線を落とす。瞬間

私とカンナの間にある1歩の距離を詰めて、私はぎゅっとカンナに抱きつく。

驚いたカンナが身じろぎし、視線を恐る恐る上げて私の顔を見るから、にこつと意地悪な笑みを浮かべる。

「カンナと友達はやめて　彼女になれるように、今度は私からカンナに好きになってもらえるように、頑張るよ」

1つの事を終わらせて、新しい1歩を踏み出すんだ
私は触れそうな程の距離に立つカンナの顔が、どういう意味か分からないという様にキョトンとしているから、くすりと微笑む。

「私の1番はカンナだよ」

カンナは一瞬動きが止まって、それから。カンナにがばっと私の肩を掴まれ引き寄せられて、カンナの胸に抱かれていた。

「さっきの言葉、本当？　ううん、嘘でももう取り消しはなしね」

そう言って抱いた腕の力を少し緩めて、見上げた私の顔を間近で見つめてくる。

澄んだ瞳の中に甘やかなきらめきがあって、うっとりするような魅惑的な顔で見つめられて、ドキってしちゃった。

「讓子さん、好きだ」

斜めに見下ろしたカンナの目元が和み、再び、ぎゅっと抱きしめられる。

「私もカンナが好きだよっ」

そう言ってカンナを見上げると目があって、ふっと一緒に笑いあった。

第39話 溢れるのは、恋（前書き）

第28話 掴んだ手のひら3 の続きです。

第39話 溢れるのは、恋

「結局、何も聞けなかった……」

一人呟いて、ばたんと部屋の襖を閉める。さっきまで譲子さんの部屋にいて、今帰ってきたところだ。

リビングから、母さんが洗濯物を出してと叫んでいる声が聞こえるが、俺はそれを無視して畳の床に寝転がる。

はぁー。

大きなため息をついて寝返りを打ち、頬杖をついて横向くに寝る。寝姿山で御堂さんの告白に何と答えたのか

譲子さんと御堂さんが付き合いはじめたのか

そのことが気になって、旅行の荷物の片付けも手に付かなくて、目を瞑ったんだけど

バンツと大きな音を立てて襖が開かれ、俺の6畳の部屋が廊下から丸見えになる。

「お兄ちゃん！」

重たい頭を動かし視線を廊下に向けると、1つ年下の妹が立っていた。

「マリナ、開ける前にノックしろっていつも言ってるだろ」

呆れた口調で言う。どうせ言っても治らない事を知っているから、言っただけなんだ。

マリナは眉をしかめて俺を一瞥し。

「お母さんが洗濯物出してだって。あと、学校から電話」
「はい」

右から左に聞き流して返事をして、ふっと首をかしげる。

「えっ……学校から電話？」

俺は慌てて立ち上がり、リビングに置いてある固定電話を取る。

「もしもし、お待たせしました」

通話の相手は担任で、内容は次の様なことだった。

『10月からの留学生に菊池が決定した』

うちの学校はオーストラリアに兄弟校があつて、毎年10月から1年間留学生を派遣する。その留学生は1、2年の中から外国語の成績がトップクラスの者が選ばれる。もちろん希望した者が行くんだが、5月に行われた希望調査で『希望する』と書いたことをすっかり忘れていた。

外国語は他の強化よりも好きだし得意で、将来は外国語に関係する仕事をしたいなあと密かに考えてもいた。だから、希望調査をした時も留学はいい経験になるだろうと思っていたんだ。

それなのに 留学生に選ばれたと言われたも、なんだか素直に喜べない俺がいる。

電話が切れてからも、呆然と電話の前で立ちつくす俺に、リビングでテレビを見ていたマリナが声をかける。

「お兄ちゃん、もしかして、学校から呼び出し？」

そう言ったマリナに、キッチンに立っていた母さんが苦笑する。

「呼び出しなんてマリナじゃあるまいし、優等生のカンナにあるわけないじゃない」

母さんが言うほど頭がいい訳じゃないが、普通よりはいい方だとは思う。

「じゃあ、なんだったの？」

「留学生に決まったって」

俺はあまり悪く言って、母さんに視線を向ける。

タオルで手を拭っていた母さんが目を見開いて、次いでにこりと笑う。

「あら、すごいじゃない、おめでとう。いつから行くの？」

その問いに、俺はぼそりとした声で答えてリビングを出ていく。

「10月から……」

10月になったら、俺は日本にいない

離れば少しは気持ちの整理がつかだろうか　そう考えて、どうか離さないでほしいと願ったことを思い出して、切なくて胸がはち切れそうな気持ちになる。

荷物でも片付けようかとした時、メールの着信があることに気づいて開くと譲子さんから『送ってくれてありがとう』と来ていた。

俺はなんと送ろうかと考えて

『早く良くなるといいね、お大事に』

そう、簡潔にメールを返信した。

今は突然の出来事が起こり過ぎて、上手く考えがまとまらなくて、譲子さんに向き合う気持ちを持てなかったから。

2日考えて、俺はある決意を胸に秘める。

ちゃんと告白しよう　と。

それでどんな答えを言われようと受け止め、譲子さんの気持ちを応援すると。

この時点で俺は、譲子さんは御堂さんのことが好きで、俺に振り向いてくれる可能性はゼロに限りなく近いと思っていた。

だから、留学も行くと決める。もともと行きたかったっていうのもあるし、こんなチャンスは滅多にないだろうから。

留学と譲子さんの事は別の事として切り離して考える　努力をすることにした。

期限はあと少し　そう思うと、すごい勢いで体が奮い立たされて、俺は譲子さんに電話していた。

俺が返した返信から、丸1日以上譲子さんとはメールをしていないくて、だからメールよりも電話で要件を伝えようと思ったんだ。1度目の電話は繋がらなくて、2度目に繋がった時、電話越しに久しぶりに譲子さんの声を聞いただけで、ドキンドキンと動悸が激しくなって、そんな自分が情けなくて苦笑する。

「来週の土曜って空いてる、かな？」

他愛もない話をしてから長い沈黙を挟み、勇気を振り絞って要件に入る。

『来週って……27日だけ？ その日は用事ないけど……どうして？』

「譲子さん、さ……夏休み前にした約束って覚えてる？」

平静を装うのに気力を振り絞る。声が掠れていないか心配する。

『えっと……夏休みに遊ぼうって約束したこと？』

「花火大会　一緒に行こうって、言ったこと」

夏休みが始まる前、譲子さんとした約束、譲子さんは冗談のように思っていたかもしれないが、俺は毎年行く花火大会に、今年は譲子さんと行きたかったから

告白するならその花火大会で、と思う。

『うん……』

震える声で譲子さんが返事するから、緊張感が一気に高まる。

「一緒に、花火大会行こう？」

『うん……』

「俺と譲子さんと2人で　行こう？」

2人きりで

譲子さんが愛おしくて、ぎゅっと拳を握り、お腹に溜まった息をふうーっとすべて吐ききる。

『うん……』
「うん」

譲子さんの声に被って静かに頷いた。

花火大会当日。

同じく花火大会に行くという姉と妹の髪を結わされて、待ち合わせ時間ギリギリに新浦安駅に着く。

いちお、譲子さんにはギリギリになるってメールしたけど返事はなくて、改札を抜けてあまりの人の多さに唾然とする。例年、かなりの方が来るのを知っていたが、今年は中止になる花火大会も多く、開催される花火大会に人が集中したようだ。

この中から、譲子さんを見つけれなければ

メールの返信がなかったことから、電話をしても繋がらない予感がして、改札前に視線を走らせる。譲子さんの性格を考えると、待ち合わせよりも早めに来て、建物の柱の前とかで待っていていそうだし、そう思って、改札から一番近い柱に近づく。

ちょうど電車が両方のホームに到着して、改札から人が波のように溢れ出て来る。人ごみを掻きわけながら進むと、からんからんと小さな鈴の音が足元に響いて、赤い巾着が転がった。

俺は思わずその巾着を拾い視線を上げると、柱の根元に蹲っている人物を見つけて慌てて駆け寄る。

俺の名を呼んだ譲子さんの顔色は青ざめていて、驚く。

「どうした？ どこか具合悪いの!?!?」

譲子さんのすぐ横にしゃがみ、顔を覗きこむ。顔は汗ばみ、真っ青でとても大丈夫そうには見えなくて心配になる。

どこかで休むと尋ねると、首を横に振る。大丈夫なはずなのに、俺に迷惑かけないようにと気づかっているのが分かって胸が締め付けられる。

「外に行こう、風に当たりたい……」

譲子さんの言葉に立つのに手を貸し、立ち上がった譲子さんの姿を見て瞠目する

清楚な白地の浴衣には藤の花と鮮やかな蝶が描かれ、清廉で見入ってしまう。普段は下ろしている髪は複雑に結いあげられ、見えるうなじが色っぽい。化粧をしている顔も青ざめているせいで儚さが漂って、この世の物とは思えない綺麗さだった。

あまりに綺麗過ぎて直視できなくて、外に出る階段に向かって歩く間、譲子さんの手を握る手に力を込めた。

譲子さんの体調が優れないのは心配で、駅前の人ごみの少ない場所まで行く。打ち上げ時間まではまだ時間があるから、空いているベンチに座らせ、飲み物を買って渡す。

「具合はどう？ 気分悪いようだったら、今日はもう帰ろうか？」

「ううん、夜風にあたってたらだいぶ良くなったから大丈夫」

「本当？」

また俺に気を使ってるんじゃないか。それを見極めるように腰をかがめ、譲子さんの顔を覗きこんだんだけど、純粋な瞳に吸い込まれそうで視線をそらす。

出店を見ながら花火会場に向かうと決まって、譲子さんの方から手を繋いでくれて、涙が出そうに嬉しかった。それと同時に、酷く切ない衝動にかられる。

いつか離さないといけない。そう思ったら、繋いでいる自信がなくて、出店で買い食いするのを理由にすつと繋いでいた手を離してしまった。

最後のチャンスを掴むために、今日、譲子さんをデートに誘ったのに、どこか逃げ腰な俺がいる

勝敗の確率は低い、それでも最後まで勝負を投げ出すつもりはない。それなのに。

譲子さんと一緒にいるのが辛くて苦しい。譲子さんの幸せを願いつつか格好良い事言っておいて、本当はこの繋いでいる手を離したくない。譲子さんが俺以外の違う人の隣にいるなんて耐えられない。

俺は譲子さんの1番でいたい

第40話 零れるのは、涙

告白をするタイミングを計っていたら、花火大会も中盤に差し掛かっていた。花火が終わる前には、話を切りださなければいけないと思うと、宵闇を照らす大輪の華がどんなに綺麗だろうと、見とれる事も出来ずにほとんど花火は視界に入っていなかった。

唐突に

シャツの裾を掴まれて、その手が慌てて様に引つ込められる。なんとなく見上げていただけの夜空から、肩が触れ合うほど近くに立つ譲子さんに視線を移す。

「ん？ どうしたの、譲子さん？」

「えっ……と……」

首をかしげて尋ねると、譲子さんの顔に戸惑いが浮かび口ごもる。俺から醸し出される緊張感が譲子さんにも伝わってしまったのかと思つて、ばつが悪くて苦笑する。

「譲子さん」

自然と譲子さんの手に手を触れる。譲子さんの手はひんやりと冷たくて。

「俺に……何か言うことでもある？」

まっすぐに譲子さんを見据え、真面目な顔で尋ねる。俺よりも先に、譲子さんが話を切りだすのも、それはそれで良いかもしれないな

い。

もし、御堂さんと付き合うことになって、俺とはもうこんな風に出かけることが出来ないと言われたら、笑顔で受け入れられそうな気がする。

へたに俺の気持ちを打ち明けて、譲子さんを困らせるよりはいいかもしれない　そう思ったのに。

「ど……うして、そんなこと聞くの？」

譲子さんがぎゅつと唇をかみしめて、消え入りそうな声で言うから、身につまされて、言葉が出なくて

言葉にする代わりに、一瞬、握っている手に力を込める。勇気を奮い立たせて言葉に乗せる。

視線を夜空に戻し、ふつと笑う。その笑顔は皮肉気だったかもしれない。でも、そんな風に笑わないと、切なすぎて泣いてしまいそうだったから

「ねえ、譲子さん。俺が譲子さんを好きって　知ってた？」

その言葉に、ぴくりと揺れた譲子さんの手。俺はその手を優しく包み直し、夜空に視線を向けたまま言葉を続ける。

「一目惚れだったんだ。譲子さんに話しかける前、譲子さんが俺に気づく前から、俺は譲子さんと話してみたくて、どんな声なのかとか、どんな風に笑うのか　とか、すごく気になって」

そこで言葉を切って、視線を地面に落とす。

「譲子さんは御堂さんの事が好きなの？　譲子さんの気持ちはどこにあるの？」

そう言った俺の声はフィナーレの花火の音にかき消され、譲子さんに聞こえていなかったことを悟る。

地面から金色の火花が幾筋も立ち昇り、ナイアガラの滝のように神々しく光を放って流れていく。

ドドドドド……………ドドンッ。

最後の一発が打ちあがり、残響と歓声が一気に高鳴り、割れんばかりの拍手が辺りにこだまする。

ざわざわと名残惜しげに会場を後にし始める人々の中、俺は微動だに出来ず立ちつくす。

「カンナ？」

繋いだ手を揺らし、心配そうに見上げる譲子さんに名前を呼ばれ、譲子さんに視線を向ける。心を笑顔に隠して、精一杯笑ったつもりだ。

「譲子さん……………」

それなのに、口から出てきた声は自分でも情けなく感じるほどか細い。ちゃんと自分の手で幕を閉じなければと思い、言葉を絞り出す。

「好きだ」

そんな単純な言葉しか言えない自分が情けなくなる。ただど重荷にはなりたくなくて、自分の心を打ち明けるように、言葉に刻む。少しの沈黙。温もりの伝わる繋いだ手に力を込める。不覚にも涙が零れそうになる

「ごめん……こんな風に言うつもりじゃなかったんだ。ごめん……付き合っただけとか、そんなことは言わない。ただ、俺だけを見てほしいんだ。譲子さんの1番になりたいんだ……」

俺の今の気持ちを精一杯伝える。

譲子さんはずっと黙って俺の話を聞いてくれて、必死に首を振り、繋いだ手にもう一方の手を重ねて、俺の気持ちを受け止めてくれようとしていた。だから

「ごめんなさい……私の一番は、カンナにあげられない」

その言葉が、どんなに痛く胸に刺さっても、受け入れる覚悟は出来ていた。だけど

そんなに俺も強くないんだ。分かっていた答えでも、譲子さんの口から直接聞かされると、衝撃は酷くて、足元が崩れたようにふらつく。

情けない顔を見られたくなくて譲子さんから顔をそむけ、繋いだ手を無我夢中で剥がしていた。

俺の行動に、譲子さんが胸を痛めて戸惑っているのを感じても、取り繕うから元気も出ないくらい動揺して、言葉でも態度でも何も出来なくて。

桜の季節に見つけた俺の宝物

ずっと見守って、見続けて やっと近づいたと思ったら、風に舞う花びらのように手のひらをすり抜けていってしまった。遥か彼方に、掴むことの出来ない場所に

俺と譲子さんの距離はたったの2歩なのに、すごく遠くに感じて、身動きが取れない。

どのくらい、その場に立っていたんだろうか。

2人の間に流れる気まずい沈黙を破るように譲子さんに1歩近づき、苦笑する。

「そろそろ、帰ろうか……？」

譲子さんの体調があまり優れない事を思い出して、いつまでも海風に当たるこの場所にいるのはダメだと思って帰る提案をする。

たとえ、お互いの気持ちの行き着くところが違っても、友達だと言った気持ちに嘘はなくて。自然に振る舞ったつもりだった。今できる精一杯の笑顔を向けたつもりだ。

「まだ人混みがすごいから。迷子になったら困るから……」

そう言うてからそつと譲子さんの指先に指先で触れて、駅に向かって歩き出した。

月曜日、寝坊していつもよりかなり遅い電車に乗り込んだ。

花火大会の日におやすみメールをしてから、譲子さんとはメールも電話もしていない。避けた訳ではなくて、自分の気持ちを整理するために、少し距離を置こうと思ったんだ。

次に会った時、譲子さんと笑顔で話せるようにそれなのに。

国府台駅で、視線の先に譲子さんと御堂さんの後ろ姿を見つけて、心穏やかでいられなくなった。

『譲子さんは御堂さんの事が好きなの？ それなら、俺は自分の気』

持ちを消す努力をするよ。譲子さんには笑っていて欲しいから、隣にいるのが俺じゃなくても……いいんだ……」

そう言ったのは自分なのに、目の前で2人が仲良く歩く姿を見てしまつと焦燥に駆られる。

やっぱり、譲子さんと御堂さんは付き合っているんだ　そう思う一方で。

ついこの間まで譲子さんの隣にいたのは俺なのに　と思わずにはいられなくて、やり場のない苛立ちに身が焦がれる。

そんな時に譲子さんからメールが着たから、苛立つ気持ちのまま素っ気なく返してしまった。

『To: 譲子さん

subject: おはよー。

本文: 寝坊して今学校に着いたとこ……

ごめん、今日は部活のミーティングがあつて何時に終わるか分からないから、

写真はまた今度でもいい?』

書いた内容に嘘はない。そこに、いつもだったら含ませない俺の暗い気持ちを滲ませる。

会いたくないんだ

譲子さんにはしばらく、会えない

落ち込んだ気分が夏休み明け初日を終える。

テンションが高いのは先生だけで、生徒は休み明けにいきなり6時間授業じゃもたないって、なんで先生は気づいてくれないんだろ
うか。

ただでさえへこんでいるのに、リーダーの先生は俺が留学生に選

ばれたか、しつこく当ててくるし、最悪だ。

「なんだ、カンナ？ 機嫌悪いな？」

帰りのホームルームが終わって部活に行く準備をしていると、駿しゅん介けいが俺の席に座ってにたにたした顔で聞いてくる。

機嫌悪いって分かってるなら、そんな顔で話しかけるなよな。心の中で思いながら。

「べつに、なんでもねーよ」

って言ったのに。

「朝、寝坊して譲子さんに会えなかったから元気がないだけだろ」

ちゃっかり話を聞いていたのか、河原が通り過ぎながら言う。その言葉が凶星だけに、苛立ちが募る。だけど、駿介達に当たるのは八つ当たりだって分かっているから、大きく深呼吸して立ち上がる。

「ほんとに、なんでもないから……」

テニスラケットの入った鞆と学生鞆を肩から下げ、教室の出入り口に向かう。

「早くしないと、遅れちまうぜ」

河原はすでに廊下の先を歩いていて、まだ教室にいる駿介を急かして歩き始める。

苛立つのは、譲子さんに会わないとメールした自分自身に。週末に大会がるからその練習で遅くなるからっていう正当な理由がある

けど、本当に会いたければ、どうにでもできるんだ。

それなのに、それをしない、逃げている自分が嫌になる。だけど

あと1カ月で俺は譲子さんの傍から離れることになる。それならもう、このまま会わない方が俺の気持ち荒立つ事もなく、譲子さんを想う気持ちをなめたことにできるかもしれない。

だから、朝の電車の時間をずらし、俺からは一切メールも電話もしなかった。

5日経ち、金曜日。明日に大会を控え、早く部活に行きたかったのに、こういう日に限って呼び出されるんだ。

留学生の懇親会　つまり、今年選ばれた留学生同士の顔合わせとスケジュール確認など。どうせなら大会終わった後の来週にしてくれって思うけど、留学は10月からで、9月末には前期末試験を控えていて、先生たちは大忙しなのだから、仕方がない。

重要そうな話が終わり、生徒や行き付き添いの先生が話しているから、部活に行くといって抜け出す。

もっと早く抜け出したかったが、なんだかんだ引きとめられて2時間も立っている。練習着で懇親会に出ているから、部室に寄らないで直でテニスコートに、アップの代わりに走って向かう。

コートに着いて部長に挨拶して隅で準備運動をしていると、模擬試合をしていた駿介が汗まみれで俺に駆けよってくる。その顔があまりに暑苦しくて、俺は眉根を寄せて身を引く。

「カナナ！　留学生に決まったって本当かよ！？」

留学生の発表は来週の集会でのはずで、駿介が知っていることに訝しみ、河原がしれっとした顔でこっちを見ているのに気がついて舌打ちをする。

河原の1つ年上の兄さんも今年の留学生に決定している。そこから俺が留学生だと漏れたらしい。

「なんで、黙ってたんだよ……俺達、友達だろう？」

駿介は剣を露わにして叫び、俺の胸ぐらをつかむ。

俺は言葉に詰まって地面に視線を落とす。

「譲子さんはこのこと知ってるのかよ!？」

そう言った駿介が、何かに思い至ったように顔を顰める。

「最近、様子がおかしかったのはこれが原因で譲子さんとギクシヤクしてたのか」

一人ごちる駿介。俺は駿介を一瞥し、吐き捨てるように言う。

「友達だからって、なんでも話さないといけないのか？」

留学するって決まって、悩んだ。それは譲子さんのことも含まれるけど、親友と離れ離れになることだって、寂しくないわけではない。

決断するのに、俺がどんなに悩んだか知らない癖に

新しい環境に飛び込むことに、恐れていない訳じゃない。

俺は堪らなくなつてラケットを持って走りだす。

悩んだ末に決めた事だから。背中を押してほしかったんだ。頑張れって言うて欲しかったんだ。

第41話 辿り着くのは、君の隣

思いのまま校庭を駆け抜け、校庭の脇の並木までできてしまったが、部活に戻らないわけにもいかななくて。でも、ほんの少し燻ぶる意地が、すぐに戻ることを許さなくて

ふつと顔を上げた数メートル先、校庭を囲むフェンス越しに国府台南高校の校舎が見える。

譲子さんのことを忘れようと、頭と心から存在を消そうと努力すればするほど、胸は苦しく切なくて 好きな気持ちが大きくなる。忘れられないほど、好きになる。

こんな気持ちになるなんて、こんな気持ちを知るなんて 譲子さんに出会うまでは知らなかったんだ。

それでも、どんなに世界が色あせ、空に浮かぶ夕陽が霞もうと、この気持ちを知ったことを後悔はしていない

そう感じて、俺の中でぶつんと何かが吹っ切れる。

「はは……」

乾いた笑いが込み上げて、視界の端が涙の膜でけづる。そのまま空を仰いで、笑い声を上げる。

校庭で部活中の生徒が、一人突然笑い出した俺を不思議そうに見て首をかしげている。だけどそんなことも気にならなくて、気が済むまで笑い続ける。

そうだ どんなに消そうとしても消せない想いがあるのなら、消す努力じゃなくて、想いを叶える努力をしてもいいんじゃないか？ 隣で笑顔になるための、努力をしてもいいんじゃないか？

単純な事だけど、そんな答えに辿り着くのに、悩みまくって。だ

けどまだ、この恋を、願いを叶えるために、最大限の努力をしたかどうか？ もつとあがいて、くたくたになるまで全力をつくしてもいいんじゃないか

今ある俺のすべてをかけて、旅立つ日に、後悔しないように

テニスコートに戻ると、駿介が気まずそうに額を掻いているから、俺は苦笑して通り過ぎざまに肩を優しく叩く。

「黙ってて悪かった……心配してくれて、ありがとう」

帰りの電車の中で、駿介は俺の留学の話を聞いて焦燥感にかられたと言っていた。

「留学を決めたカンナが、すごい将来の事を真剣に考えてるように見えて、すごい焦ったんだ……」

別に将来の事を考えているからではないんだが、まあ、全く考えていない訳でもなくて、苦笑して頷く。

「相談してくれなかった事も、俺は親友として頼られてないのかと思っ……」

「そうじゃない。悩んでたけど話さなかったのは……自分の中でもまだ整理がついていなかったからで、問題を丸投げするのが嫌だったんだ」

「それで、悩んで 留学することを決めただんな？」

ずっと黙って俺と駿介の話を聞いていた河原が、澄んだ瞳で尋ねてくる。

俺は真っ暗な窓の外に視線を投げ、頷く。

「ああ」

「カンナが決めた事なら、俺は応援するよ」

ぼんつと肩を叩かれ、笑いかける河原。

「俺も！俺もそうだぞ。離れてたって、友達だろ？」

俺の左右に立った駿介と河原が顔を見合わせて、にいつと歯を見せいたずらな笑顔を作る。

「頑張れよっ！」

2人同時にそう言って両脇から背中を叩かれ、あまりに強く叩くから、痛さに涙目になりながら、暖かい気持ちで心が満たされる。

留学するなら、この大会でしばらくはテニスともお別れになる。

仲間と出る最後の試合　そう思うと俄然気合いが入って、調子も上がってくる。

大会初日は個人戦と団体戦の予選。嬉しい事に、個人としても団体としても予選を通過して、2日目に臨む。

個人戦はいいところまでいったけど負けて。団体戦、初日はメンバーには選ばれてたけど試合には出れなくて、だけど個人戦で調子が良かったから、決勝で団体シングルのメンバーに選ばれる。

個人だろうと団体だろうとのしかかってくるプレッシャーは重くて、それを振り払うように、コートに潜む相手だけに集中する。

萌える若葉にコートは眩しくて、心地よい風が吹き抜ける。

コートには一人だけど、仲間からの声援を受けて孤独感は全くない。グリップを握りしめて、きゅっと軽快な音を鳴らす。

気持ちが晴れ晴れとしたからか、体は軽くて、いまなら空すら飛べそうな足取りで

ゲームが終わった瞬間、耳に響く歓声に、仲間の笑顔にふっと笑みがこぼれる。試合相手と挨拶をして部員が待つベンチに向かう。

「やったなあー、カンナっ！」

駿介が自分の事のように喜んで俺の肩に腕をまわして抱きついてくる。

「おめでとう、カンナ」

河原がタオルを渡しながら言ってくれる。

「いまだ抱きついたままの駿介に苦笑しながら、引きが貸す。」

「駿介、暑苦しいから離れるよ」

そう言った俺に、駿介が頬を緩めてにたあくつと嫌な笑みを向ける。

「なっ、なんだよ……」

「俺にそんなこと言っていていいのかなあ〜？」

「はっ!？」

「俺はカンナのために、景品を用意したんだぜ？」

景品　って、勝つかどうかも分からないのに、何を用意したの
だろうか？

腰に手を当てて威張る格好の駿介からひしひしと嫌な予感が漂い、眉を顰める。

「ほら、あれ」

駿介が俺の後ろ　コート以外のフェンスを指さす。俺はつられて振り返り、ぎょっと目を見開いて自分の目を疑う。ってか、駿介に詰め寄る。

「なっ、まさか……譲子さんを呼んだのか!？」

振り返ったのは一瞬だったけど、俺の瞳に譲子さんの姿は鮮やかに飛び込んできた。

「えへへっ」

気持ち悪い笑いを浮かべる駿介から一歩距離を置く。

「なんてことするんだよっ」

心の中で叫んだ言葉が口から出ていて、しまったと口をつぐむ。

譲子さんに、もう一度気持ちを伝えようと、最後まであがいてみようと思ったのは2日前。だけど、それをどう行動に移すか、まだ思いついていなかった

どうしてくれるんだよ

なんの作戦もないまま、もう一度当たって粉々に砕けろって言うのかよ

花火大会の時とは違う。あの時はまだ、譲子さんの気持ちを知らなくて、万に一つの可能性に欠けたけど。

譲子さんと御堂さんが仲良く登校する姿を思い出して　苦虫を

かみつぶしたように顔を顰める。

ぱつと振り返り、譲子さんを見つめる。

くりつとした二重の瞳、桜色の様なふわりとした唇の譲子さんが、俺を見ていて 譲子さんの顔を見たら、頭で考えるよりも何よりも先に、駆けだしていた。

人でいっぱいになっている客席を掻きわけるように進み、コートをまわって出入り口を目指す。テニスコートを囲うフェンスの外に出て走り、譲子さんに駆けよる。

息が僅かに切れたけど、お構いなしに話しかける。

「譲子さん……どうして……」

横に沙世さんがいるのに気づいて、駿介に呼ばれたことに確信を得る。だけど、俺が聞きたかったのはそんなことではなくて、譲子さんがどうしてここにいるのか。

呼ばれたからただ来ただけなのか、それとも

「えっと、カンナの試合を見に？」

頬を掻きながら横に視線を漂わせ、首をかしげる譲子さん。

呼ばれたからではなくて、譲子さん意思で来てくれたのだろうか

そんな予感に、胸がきゅっと締め付けられる。

溢れる想いに駆られて口を開こうとしたんだけど、俺と譲子さんがたくさんのギャラリに囲まれて見られていることに気づいて、譲子さんの手を握って咳払いする。

「譲子さん、ちょっとこっち来て……」

あんな大勢の前で告白する訳にはいなくて、だけど、あわや勢いで言ってしまうそうだった自分が恥ずかしくなって、心なしか顔

が赤くなる。

譲子さんが俺に引かれるまま半歩後ろを歩いていて、こんな情けない顔を見られないで良かった

陸上競技場の正面スタンド裏の並木まで歩き、ここなら人も少ないからいいかと立ち止まる。

「譲子さん……」

思わず名前を呼んでしまったが、譲子さんには聞こえていなかったよ。たよつで2人の間に沈黙が流れる。

何から話せばいいのか分からなくて、ただ、1週間ぶりに見る譲子さんの顔に、声に、存在に、繋がれた手の温もりに心が癒される。あまりに俺が黙っていたからか、譲子さんが俺の正面に回り込んで尋ねた。

「私に何か言うこと、ある？」

その言葉に目を見張る。

譲子さんに言いたいことはたくさんある。ただ、いざ譲子さんを目の前にすると言う事が出来なくて、そんな情けない自分に嫌気がする。

さあーっと風が吹いて、さらさらと揺れる葉擦れの音さえ、俺を急かしているよう。うっとおしくなる。じわりと、額ににじんだ汗を手の甲でぬぐい、眉根を寄せ奥歯を噛みしめ 譲子さんから視線をそらす。

「どうしてそんな顔するの……？」

言葉にするだけの勇気が持てなくて、繋いだ手に気持ちを込める。譲子さんはぴくりと肩を揺らし、眉根を寄せる。いい加減話をしなければと思い切り、口を開く。

「譲子さんは、どうしてここに来たの？ 沙世さんに呼ばれたから？」

本当はもっと別に言いたいことがあるのに、遠回りしようと据える。

譲子さんにいつも見せる自然な笑顔を作ったのに、譲子さんが苛立ったように繋いでいた手を振りほどく。

「1週間も音沙汰なしで、どうしたのはいんじゃないの？」

声を荒らげ、横を向く。

「私、聞いたの……カナが留学するって。どうして教えてくれなかったの？ もう私とは友達もやめるから……？」

譲子さんの声が信じられないくらい震えているから、愛おしくて。

「……じゅめん」

何に対してか分からないけど、切なく胸が震えて、謝罪の言葉を口にする。

「じゅめん……」

そう言うだけで精一杯で、まっすぐに譲子さんを見られなかった。そんな言葉だけじゃ、俺の気持ちが伝わらないのは分かっていたけ

ど、言葉に詰まって、何も言えなかった。
長い沈黙を挟んで。

「分かった　カンナと友達するのはやめる」

その言葉に、胸がつぶれるように痛み顔を歪める。声にならない声を出して、斜め下に視線を落とす。

自分で招いた結果だとは言え、譲子さんから突き放されるような言葉を言われ、心が痛くて叫んでいる。

「ただ、次の瞬間

譲子さんが、俺達の間にある1歩の距離を詰めてがばっと俺に抱きついたんだ。

驚いて身じろぎ、地面に落ちていた視線を恐る恐る上げると、見た事もないような優美で魅惑的な笑みを浮かべているから　ドキンッと胸が跳ねる。

「カンナと友達はやめて　彼女になれるように、今度は私からカンナに好きになってもらえるように、頑張るよ」

えっ、えっ　!?

「私の1番はカンナだよ」

くすつと笑って譲子さんが下から俺を覗きこむ。その顔はとても嘘を言っているようには見えなくて　一瞬何を言われたか分からなかったが、目の前にある笑顔が答えなんだと思ったら、譲子さんの肩を掴んで引き寄せていた。

「さっきの言葉、本当？　うっん、嘘でももう取り消しはなしね」

譲子さんが、俺を1番だと言ってくれた、それだけで、心が心地よく揺れる。

どんな言葉よりも輝いて、俺の宝物になる

腕を緩めた俺のすぐ下、至近距離で澄んだ瞳に見つめられて、ふわりと顔をほころばせる。

第42話 幸せの花を咲かせよう

あの日

カンナの大会が終わるのを待って、駅前のマックと一緒に行った。2階の窓側の席に横に並んで座り、暮れかかる夕闇の中駅に出入りする人々を眺めながら、カンナがぼつぼつと話し始めた。

「譲子さんに 一目惚れだったんだ。そんなこと初めてで戸惑って、初めて話した時は本当に緊張していて、でも話せた喜びで胸が一杯だった。話したことがないなら話せばいいんだし、お互いの事を知らないなら知ればいい そんな始まり方があってもいいはずだろ？」

そう言ったカンナは、私の方を見てくすり甘い笑みを浮かべるから、私は静かに頷いた。

「御堂さんと初めて会った時、譲子さんの気持ちになんとなく気づいていた。自分と同じような感情が譲子さんの中にもあって、その先には御堂さんがいるって。不安で胸が押しつぶされそうで、遊園地の時も、海の時も、気が気じゃなかった」

カンナが、私の中の御堂君の気持ちに気づいていたなんて知らなくて瞠目する。なんか罪悪感を感じて、身じろぎし肩をすぼめる。

「あの、私と御堂君は つ！」

中学の頃の事、今の御堂君との関係をすべて打ち明けようとして

開いた口を、カンナの優しい瞳が遮る。

「2人の事は、夕貴さんから聞いて知っているよ。だから、譲子さんは御堂さんのことがまだ好きなんじゃないかって思って、おまけに寝姿山で御堂さんが告白するの聞いちゃって」

「えっ!?!」

まさか、告白されたところを見られてたとは思わなくて、かぁーっと顔が赤くなる。誤魔化すようにストローを啜えただけど、チユーっと飲み物がなくて空の音を響かせる。

誤魔化そうとした行動で恥をかって誤魔化しきれなくて俯く、ちらつと横目にカンナを見ると、目元を和ませて見られていて、ぎゅーっと胸が締め付けられる。

そんな顔、反則だよ　っ！

「だから、御堂さんと譲子さんは付き合いたしたんだって思った」

「えっ、違っ」

そんな誤解をされていたとは思わなくて、必死に首を左右に振る。

「花火大会の日告白したのは、振られる覚悟だったんだ。譲子さんの1番が御堂さんだったのは分かっている、だけど譲れない気持ちがあって　風邪で倒れた日、譲子さんが帰ろうとした俺の手を握ってくれて、それが嬉しくて離せなくて。だけど譲子さんは御堂さんと付き合ってるから諦めないといけないんだって悩んでた時に、留学生に決定したって聞かされたんだ」

御堂君とは付き合っていない　って言おうとしたんだけど、カンナに分かってるって目で言われて安心して、黙ってカンナの話の続きを聞いた。

「迷ったよ、ってか留学の希望出してたことなんかすっかり忘れてたしね。でも、賭けて見たいんだ、自分の可能性に。将来かならず役に立つからとか、将来のためとかじゃなくて、今できることに、未来の可能性に賭けてみたいんだ。だから、譲子さんへの気持ちとは別に留学することを決めて　花火大会に誘った」

そこで言葉を切ったカンナを見て、恐る恐る口を開く。今度は、私の番。

「あの……私は……。1番をカンナにあげられないって言ったのは、自分の気持ちがよく分かってなくて。中学の時、私は御堂君と1番仲がいいと思っていて、でもそうじゃないって知ってショックで、忘れようと思っただろうやったら忘れられるのかも分からなくて想いが凝ってて　大切な言葉だった。だからそれを自分が口にして、もし間違っただけ、傷つく　自分が怖かった」

涙声になる。震える唇で呼吸を整えて、しゃんと背筋を伸ばす。

「まっすぐにぶつかってくるカンナや御堂君の誠意に答えられなかったのは私が弱いからで、自分が傷つくことにばかり恐れていた。でも　夏休みが明けて、カンナが電車に乗ってこなくて、当たり前になっていた日常にカンナの姿が欠けて寂しくて、カンナが側にいない日常なんて考えられなかった」

膝の上に置いた私の手の上にカンナが手を乗せ、優しく微笑むから、ふっと笑みが漏れる。続きを言う勇気が湧く。

「でも、カンナが留学するって聞いて、私とは会ってもくれなくなっただけ、もう友達でいるのも嫌になったのかと思って心が折れて

だから、今自分に出来ることを頑張って、少しでも自分に自信を持てたらカンナに会いに行こうって」

「駿介から聞いたよ、譲子さんも昨日今日って大会だったんだってね」

駿介　？　誰の事が分からなくて首をかしげると、カンナが意地悪な笑みを浮かべて熊本的事、って教えてくれた。ああ、熊本君の下の名前、駿介って言うんだ。

つまり、沙世ちゃん、熊本君経由で聞いたって訳ね。

「うん……」

私は頷いて、頬がうずうずして　笑みが漏れる。

「自己ベスト……更新したの。初めて3位になっちゃった……」

決して他の人が遅かった訳ではない。タイムを伸ばして3位になって、確実に自分の中で何かが変わり始めている

「すごいじゃん！　おめでと」

カンナがあまりにもキラキラと瞳を輝かせるから、私もカンナに笑いかける。

「カンナもおめでと。団体、優勝したんだってね」

「ありがと」

そこで互いに顔を見合わせて、ふっと2人同時に笑顔がこぼれる。

「会いに来てくれてありがと」

カナナがうつとりするような甘い笑みを浮かべるから、私は座っていた丸椅子をくるりと回してカナナの方を向く。

「私とカナナって友達？」

いつか聞いたセリフを言うと、カナナが透き通るような綺麗な瞳に一瞬鋭い光を宿して、甘く妖艶に笑って頬を寄せる。その仕草があまりに色っぽくて、ドキンッと大きく胸がはねる。

「俺と譲子さんは　彼氏と彼女だよ」

くすつと笑って、不意打ちで頬に軽い口づけをするから　私は心臓が口から飛び出しそうな程驚いて目を白黒させる。

そんな私を隣に座っているカナナがくすくす笑っている。なんだかカナナって、私が知らない顔をまだまだ持っているように鳴り響く鼓動に、波乱の予感がして眉根を寄せる。

「譲子さん、そんな顔しないで」

そう言われても警戒しない訳にはいかなくて、身を固くしてカナナから少し距離を取っただけ

「好きだよ、譲子さん」

さりげなく言ったカナナの言葉に、自分でも分かるくらい頬が真っ赤に染まっていく。

カンナの留学までの1カ月、休みの日はなるべく会う様にして、一緒にいる時間を大事にした。

そして9月30日、カンナがオーストラリアへ旅立つ日。

この日は、来週から始まる後期と昨日で終わった前期を挟む秋休みとして、金曜だけと学校が休みだから、空港までカンナを見送りに来ていた。

「譲子さん」

荷物をすでに預け終え、斜めがけの手鞆1つの身軽なカンナが私の手を両手で掴んで、それを額にあてて俯く。

「たくさんメールするから」

「うん」

「たくさん、葉書を送るから」

「うん」

「……………」

「体に気をつけてね。ちゃんと勉強してね」

カンナが黙っているから、私は苦笑する。

「カンナなら、すぐに友達いっぱいできるだろうね。向こうでの生活、楽しみだね」

顔を上げたカンナが切なく瞳を揺らして、こっぴつ時に笑顔で別れを言えそうなカンナだったから予想外で、言葉に詰まる。

最後じゃないから、ちゃんと笑顔で見送ろうと思ったのに、カンナにそんな顔をされたら、決意が鈍りそうで堪らなくなる。

「譲子さんは俺と離れて平気　？」

この1カ月、お互いにそのことに触れないようにしてきた。離れてもお互いの気持ちが変わらない事を信じて、また1年後に再会するのが当たり前のように。

それなのに、カンナがその言葉を口にして、秘めていた思いが溢れて、涙の堤防が決壊する

「平気だよ　」

平気な訳ない

カンナは私の言葉を聞いて切なく顔を歪め、それから私の顔を見て動揺する。

きっと、涙で顔がぐしゃぐしゃだったと思うから。

「カンナは、たくさんメールも手紙もくれるんですよ。それなら、目に見えるところにカンナがいなくても、心は側にいるから。そう、信じているから　　いつてらっしゃい」

カンナを突き放す言葉じゃなくて、カンナの背中を押す言葉だから、ちゃんと伝わればいいと思う。

繋いでいた手をそっと離し、手の甲で涙を拭う。今日はカンナの笑顔を見ていないことに気づいて、精一杯勇気を奮い起して、とびつきりの笑顔を向ける。

「カンナ　」

カンナの肩がぴくりと揺れて、動揺した表情に緊張感が走る。

「笑って？」

涙を拭くために離れた手を繋ぎ、にっこり笑いかける。

「私はずっとカンナを待ってるよ。カンナの横で、前を向いて歩ける自分でいたいから、カンナがオーストラリア頑張る間、私も自分で自分を誇れるように精一杯努力する」

水泳大会で手にしたのは銅メダルじゃなくて、ほんの少しの自信と1歩を踏み出す勇気だった。

無理をしているのは伝わってくるけど、カンナがふわりといつも
の笑みを浮かべる。

「笑顔は幸せの種。2人でいっぱい笑って時には喧嘩して、仲直りしてまた笑って、幸せの花を咲かせよう。2人で一緒に」

繋いだ手を離さないで

こうして、電車の中という変な出会い方をした私とカンナは、友達になって、恋をして、付き合い始めて、別々の道を進んでいく。

カンナはオーストラリアで、私は日本で。

だけど、向いている方向は一緒なの。

手を繋いで並んで歩いて行く。

これははじまりの扉を開いただけ。

すべては、ここからはじまる物語

あとがき

ストーリーについて

この作品は私の処女作である「ここからはじまる物語」を加筆訂正した【改訂版】です。

第1章と第2章は同じストーリーのまま、第3章は軸を残して登場人物で出来事を大きく変え、第4章を新たに加えました。

元々この作品は、「電車の中ではじまる出会い」をテーマに書いたもので、書きなおすにあたって、譲子とカンナのハッピーエンドを前提にしていました。

10カ月も前に書いて、というか初めて書いた作品だから、いつかは直したいと思って、改めて読み直して恥ずかしくなるくらい稚拙な文章で、これは書きなおすしかない！と一念発起です！

季節もちょうど夏だし、夏の話だからというのを口実に……

改訂前と改訂後と両方読んで頂いた方に少しでも良くなったと思ってもらえると嬉しいですよ。

キャラについて

ほんと、この頃はプロットとか全然考えずに書いているので、キャラについても思いついた感じで決めているので、特に書くことが……ないです。

プロットで書いたことは。

電車の中で出会った2人は……

これだけです。へへっ。

登場人物だって、学校名と学年しか書いてないんですよ。

もちろん、改訂するにあたって、かなりプロットを練り直しました……初めから作り直した、が正解かな？

夕貴視点について

主人公以外の自人物視点というのを初めて書きました。

これは改訂前の遊園地でのラストシーン……一人称の文体なのに譲子視点ではない場面を書いてしまっていたので書きなおそうと思っただけで、初めは御堂視点で書こうかとも思っただけですが、夕貴視点の話となりました。

夕貴視点の方が、御堂の譲子以外との接し方が客観的に見えるかなっと思っただけ。

第3章について

改訂前は、あて馬に東条君というキャラが出ていたのですが。

東条君……ぽんつと出て振られて、少し可哀そうなキャラで、改訂後には出てきていません。ほんと、散々な扱いをしてごめんよ……という感じですが。

譲子が中学生の頃好きだった御堂と、譲子とカンナ。この3人もっとならませよう！と海編かなり書き換えました。

第2章で2人のデートについて行った夕貴がキーパーソンとなり、海編で御堂とカンナが再び！と感じます。

伏線ではなかったのですが　いい具合に働きました。

第4章について

改訂前では第3章で終わりだったのですが、第3章を大幅に変更したので第4章を加えました。

第4章の花火大会編は、譲子とカンナがそれぞれ悶々と悩むといったカンジを書きたかったのです。

悩んで、お互い何かをふっ切って前に進むぞ！　ていうのを書きたかったです。

カンナ視点について

改訂前には1話だけ書いたカンナ視点の話、全7話書いて、書きたかったことはすべて書けた感じがします。

f o r T h a n k y o u !

この作品であとがきに書くことはあまりないですね。裏話的なものなくて。

カンナに出会って、譲子は大きく成長した　そう思ってもらえるような作品であれば嬉しいです。

とにかく「電車の中ではじまる出会い」というのに思い入れがあるので、このテーマで違う話も書いてみたいのですが、それを書く

前に「ここからはじまる物語」をちゃんと書き直しておきたかった
ので。

この作品を通して、1つでも多く、電車の中で素敵な出会いが
生まれることを 願っています。

最後まで読んで頂きありがとうございます。

2011・8・25 滝沢美月

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2169v/>

ここからはじまる物語 【改訂版】

2011年8月29日06時01分発行